

THE CHURCH THEOLOGICAL LIBRARY NO. I.

CHRISTIAN CHARACTER

BEING

SOME LECTURES ON THE ELEMENTS OF
CHRISTIAN ETHICS

BY

J. R. ILLINGWORTH, M., A. D. D.

TRANSLATED BY

J. H. KOBAYASHI, B. D.

Published with the aid of a grant from
the Society for Promoting
Christian Knowledge.

—><—
FUKOSHA

TOKYO

1909

325-92



ゲエー、アール、イーリングオース著

林彦五郎譯

基督教徒の品性

明治
42 9 1
内交

✠
Translated and
Published with the Kind
Permission of the Author and the English Publisher.
* * * * *

The Church Theological Library in no way claims to speak authoritatively for the Nippon Sei Ko Kwai but it is hoped that it will represent the best theological thought of the Catholic Church both in translations and in original works by Japanese Churchmen.

✠

序

本書は元と基督教倫理に就て爲したる講演の要領を公にしたものである。基督教徒の生命と品性とに缺くべからざる不變の要素とは果して何であるかを大體説明がしたいので、全く一の講釋である。古來時代により、學說によつて、或る特別の徳を修むる道に就ては種々意見も異つたが、高德の基督教徒が具へた基督教的品性の粹は何れも千古同一で渝らない。それで又此品性は詮する處基督教の根本教理に基いてをるのである。然るに近頃一方には基督教徒の品性は教理と關係なしと説く人があるかと思へば、他方には基督教倫理は全く今日の需要に應ずる力が缺けてをると論ずる者がある。しかし基督教は初よりして人間一切の進歩發達を指導するに足り人間の諸の冀望の目標たるに足ると主張したのであつて、又此かる力があるのは全く基督教が天の啓示たるが故であると主張して止まないものである。本講演は即ち新たに此主張をしたいと謂ふに外ならない。

基督教徒の品性

目次

目次	次
第一章 基督教倫理の目的は生命である……………	一
第二章 品性は生命の條件……………	一八
第三章 鍛錬は發達の方法……………	三四
第四章 信仰と希望……………	四七
第五章 愛……………	六一
第六章 本徳……………	七五
第七章 祈禱……………	八九

第八章 サクラメント(聖奠).....一〇三

第九章 神秘.....一七一

第十章 基督教徒の生命は超自然である.....一三三

基督教徒の品性

第一章 基督教倫理の目的は生命である

既に基督教徒の生命と謂へば基督教といふものが有つての上の事たるは言ふ迄もな
い。然れば基督教倫理といふ時は、他の宗教を信する者が奉じ得べき教訓とか、又は
行爲の道とか謂ふ意味でなく、神子降生を信する結果として實際上に現はれる生命と
いふことなので、神子降生といふ事は全く此特別な生命を人に授けんが爲めに有つ
たのである。「我が來るは羊をして生命を得、かつ豊かならしめん爲なり」とは基督が
自ら來世の目的を示させ給ふた語である。聖パウロは基督教徒の實驗を代表して「然れ
ば我れ生くるに非ず、キリスト我に在りて生くるなり」と主の御聲に應へ奉つてをる。
『又新約書には此生命の反面たる死を絶へず對照させて此生命に注意を惹いてをる。
「アダムに於て萬人死ぬる如くキリストに於て萬人生くべし」。此對照は普ねく世に見
る處の事實であるから、單に倫理説を説くと異つて人を動かす力も強く又萬人を感せ
しむるものである。此對照は如何にも明瞭で具體的で、萬人に了解し得らるゝ言語で
萬人に訴へるのである。アダムに於て萬人の死ぬることは明々白白疑のない事實とし

て人が認めるところであるから。

【三】

我等は人間の初祖よりして何人も何れの世にも肉體を受けるのであるが、肉體其物は朽つべきものである。肉體は死ぬるもので、死ぬる臨分前からして死の影がかゝつて来る。白髪皺顔は老の至れることを警しめ、五官は衰へ、筋肉は緩んで来る。生活の樂は漸々苦となり、信愛せし朋友は一人々々消れ失せて行く。我思想習慣も何時しか時代に後れて青年は之に感服しないようになる。『移り行きて遠らぬ物』の無き日といふものは決して之を見ない。

夜といはず日ともいはず

天がした

いづこにゆくも

まのあたり

視ゆるものごと

やがてはや

消れてすがたも

更になし

偕又此く死に行く生命の外形の裏面を窺ふと罪といふものがある。罪の起原奥義については種々説もあらうが、議論のないことは罪といふ事實の存すること、死の刺は罪であるといふことである。此は自分を省みても、他人の様子を見ても直ぐわかる事である。先づ考ふべきことは、人の五臟六腑に罪の毒が廻つて居なかつたら、肉體が老衰して來ても左まで不安の念はあるまい。度に過ぎたる飲食の慾、憤怒、不品行、

怠惰等が、幾百千年の間右往左往に働いて人生を亂すことが無かつたら決して世に發すまじき疾病が、此れあるが爲めに世に生じ來つて蔓つてをる。かて、加へて傲慢と貪慾とが富を餘りに有りがたがり、貧を妄りに悲しむ爲め、ますます此疾病が増長する。此は肉體の事であるが、心の病氣は尙更ら恐ろしいものがある。深き感情、思考の力、意志の働、凡て品性を高尚にし、人生を眞に幸にするものは悉く、罪が知らず識らずの裡に人の靈を蔽ふ爲めに腐つて仕舞ふのである。且此害毒の頂點ともいふべきことは、元氣の源たる希望、進歩に缺きがたき安心が、悔恨といふ怖ろしき魔に襲はれて滅ぼされることである。此れは殊更ら神の啓示を蒙らなくても、人間一般の實際に訴へると明かにわかる。『我等も我等のものも皆死の有である』と古の羅馬詩人はいふた。

然るに不思議にも我等は心の底から死ぬるといふことを厭ふて排斥するものである。何かなる死に様でも、どの様な離別でも人は慄然として之を怖れる。どうも死といふものは不自然で變則で眞實でないところが有る様に思はれる。人は生れながらに我生命が益々豊かになることを欲し、愈々大になることを冀ふ。我等の主が『我來るは羊をして生を得、かつ豊かならしめんが爲めなり』と宣ひ、聖パウロが『キリストに在りて萬人生くべし』と言ふのを聞くと、我等の全心全靈は忽ち之に應じて起つが、其

れが本統であるように感ずる。此約束が明白に約束通り成就する時は無論墓と死の門とが過ぎ去るといふ未來の事であるが、現に此世からして此約束が働いてをる證據が心の内にも世間の事物にも充分見えて居る。と謂ふのは唯くよくと罪を憂ふる心が、基督教の精神で變じて悔改となり、パウロが所謂「死を來たす世の憂は、神に由れる悔なき憂」と變じ、此悔改からして赦罪の安心が生じ赦罪は人を自由にして悪習を打ち破り、新生命を發展する力を與へる。而して此生命は世の惡風邪俗を擯けて眼のあたり「愛と喜と平和と忍耐と溫良と忠實と柔和と擗節」の花を開かせる。是れは我等が視もし自らも經驗するところである。此は慥かに一種の復活である即ち今迄靈生の命を滅す力のあつた罪惡に靈生が打勝つたものではないか。唯だ此れのみでない。新生命は宛ら冬枯れしたる森の木に、立歸る春と共に通ふ液の如く内より外に向て働くのである。固より其れが身體を不死の物とはなし得ないが死ぬべき身體の有様が一變して、死其物が却て生命を發表する一の啓示となる程である。何となれば靈の結ぶ果が肉の働に打勝ち、清潔、擗節、精力、平和の習慣が成るに隨つて、體は靈の敵にならずして精神の味方となり、四肢百體皆聖別したる意志の自由を助くる忠僕となり、心靈的の機關となり、義の器、聖靈の殿となるからである。體の外形は變じて靈の生ける表象となり、體の老朽の徴は靈の勝利の證となり肉の壁いよいよ弱り

【四】

行きて内に包まれたる光明ますます照り増り、雪を戴ける頭は榮光の冕となるのである。成程此かる變化を以て墓の彼方に現生の續き行くことを證明することは出來ないが、しかし未來の生命の繼續するものであらうといふ推測が全く妄誕不稽のものではあるまいと思はせる丈けの力はある。此推測は實際心の中に經驗を有する人になると殆んど立派な證明になつて、基督によりて萬人生くべしと斷然信するに至るのである。然れば生命といふものが基督教の實際上の目的の根本になつてをるので、信望愛も其他一切の徳も善行も此生命から自然に發生して來るものであるから、此等は全く生命といふ此中心の事實を各方面から、發表するに過ぎないものである。さて生命に種々の定義を附しあるうちに、之を「有機體の活動状態」と説くのがある、即ち有機體が其勢力を發揮し得る状態といふことなのである。そこで人の生命も之と同様に、即人格の活動状態も人格が充分に其勢力を發揮し得る状態と説明してもよいと思ふ。

然るに人間の人格を解剖して見ると、其れが結局靈的のものである、即ち體にせよ、心にせよ、意志にせよ、此人格の複雑なる能力は皆靈的の自我に附屬する作用であつて、各己れ獨り勝手に働いては到底充分完全のものとなる譯には行かないので、此の唯た諸能力が其靈なる主腦の用を足し、又此主腦が其諸能力を正當に使用するか、せ

ぬかで、完全不完全の差が生ずるのである。故に競技者とか哲學者とか禁慾家とかいふが如く、或は身體、或は智力或は意志の一方面に於て特長を有してをつも、其れが其の裏面に靈的に生きてをる人格の發表でない限りは、眞實に發達した人間とは謂へないのである。

【六】

借又人格は個人的と社會的との二方面を有つて居て、此兩方が面發達せねば眞正の生命ではない他人と異なる一種特別の個人としては、人は其裡に隠れをる諸性癖を外に形はして其個人性を實現し、以て世の進歩に貢獻せねばならないので、詩を作るなり、繪を畫くなり、各々其性質々々で其生れ出でたる世に盡さねばならぬ。一言にいへば、夫のプラトールが説いた如く、自分のみがなし得、自分のみが尤もよくなし得る務を果さねばならないのである。しかし之と同時に人はアリストートルが曰ふた如く社會的のものであつて、他人の爲めに生き、他人のうちに生きるものである。人の生命とは他人の呼ぶに應へることなのであつて、其又他人は自分のために生きて呉れるのである。されば人の本性は他人と相頼つて立つと其生命の本色を成就するようになつてをるので、其婢僕、朋友、家族、教師、豫言者、英雄及び自分が力を盡す社會の要求是認に頼つて生涯の目的を達するのである。而して吾人がかく他人に依頼する必要を最後の處まで推し究め行くと、結局其れは無限なる神の人格に依頼する必要が人に有る

といふに歸着する。勿論此は萬人均しく認めるといふ譯には行くまいが、古今東西苟くも物を心靈的に考へる人は皆承認するところであつて、夫のオウガスナンは人間に安心の缺けて居るのは全く此の承認を肯んじないからであると言ふてをる。「オ、神よ、主は己のために我等を造り給へり、されば我等は主に安んずるまでは安心なし」とは、彼の有名なる語である。されば人格(たゞ體又は智力又は意志でなく)の活動するには、即ち人格が眞に其本質を成就するには神と一致せねばならぬ。而して神子降生は此一致を一層よく遂げしむるがゆゑに、加々人に生命を豊かに與へることになるのである。且つ此生命は永遠なる神と一致して成立つ生命であるから、自らそれが永遠のものになるのである。「子を有つものは生命をもてり」と聖書はいふ。此生命は此世に始まるもので、未來世にも繼續し行くと吾人は信するが、現世にもせよ、未來世にもせよ、此生命の性質は等しく永遠のものである。而して現世に於てそれが永遠のものであるといふのは、其れが元來心靈として永遠のものであるからである。故に基督教徒は此世の辛苦艱難に遭ふとき此かる悲憂の消滅せる來世を望んで之を忍ぶとしても、教徒の永生は現在此世よりして既に彼の中に働いてをるのであるから、現世を願みずして來世のみに心を移すといふは其信仰の道に合はぬものである。此く考へると、基督教的生命とは神と一致の生命であるので、その根本の性質は宗教

【八】
 的のものである。然るに罪といふものが一般に行はれ居るところから此一致が妨げられてをる。『何となれば智慧は邪なる心に入ることなく、又罪に服する體に住むこともなければなり』とある如くである。故に罪を征服することは基督教生命の第一要義である。罪は我等を殺す疾であるから、生きるには是非之を除かねばならぬ。そこで基督教倫理には罪を考察することに大に重を置くのである。何を後にしても、此考察を先きにせねばならない。罪は人性の基礎に附ける瑕であるから、此基礎の上に道德の家を築く前に其處置をせねばならぬ。此處が宗教以外の倫理學と途筋の異なることである。此類の倫理學では大概初めに行爲の原則を説いて、之を破つた場合の考察はたゞ附けたりのものとするのであるが基督教を措いて基督教道德を説く人も同じく此弊に陥るものである。されば罪に對する基督教の態度につひては、基督教の立場からして倫理上必ず此態度を執らねばならぬといふことを切論するのは頗る肝要である。然らば基督教の立場とは何ぞといふに、即ち人は道德を守る力を得る前に生きねばならないので、道德とは生命の一作用である、其又生命の源に何かといふに、神と一致することであるが、此生命の源を罪が攻撃する、此ういふのが基督教の説なのである。右の如く、罪とは神を離れることであると考へるのが基督教の罪の見解であつて、又『凡ての不義は罪なり』といふものも其主張である。言を換へていふと人が己の性質に

對して行ふ害悪も、社會に對して行ふ罪惡も、詮するところ神に背くこと即ち罪であればこそ其れが悪となるのであると、そう考へるのである。然れば罪とは道德上惡と認むる一切のものを含むものである。偕て其罪とは聖書に、『罪とは即ち律法を犯すことなり』とある如く、畢竟其本は意志に在るのである。罪の本源はマニキヤ宗徒の説の如く、肉體に存するのではなく、或神智宗徒の論の如く、無智に存するのではなく、或は又佛教徒の主張の如く煩惱に存するのではない。罪の本源は全く意志を以て神と神に背くことより存する。肉體の亂肌も、道德上の無智も、道ならぬ煩惱も、罪を醸す縁とはならうが、其源に溯ると元來罪の結果で原因ではない。といふは、罪が先づ意志に宿つてをるから人間の全性を亂すので、決して其一部を犯す位の事ではない。意志とは畢竟人の人全體の活動するものを言ふので、人間の自我其者の發表ではないか。かるが故に亂れたる意志とは亂れたる人格のことである、而して人の行爲は漸次に習ひ性となり、惡習がたゞび成ると必ず又他の惡習を馴致するものであるから、人格全體が愈々惡に陥り、加々神といふ生命の源からはなれ行くやうになる。其れで人の性質が二重であるから、右の結果として二種の死を生じて來る。社會的には惡人は有害なる感化模範を與へ社會を擾亂解體せしめて終には之を破壊し了るやうになる。又個人的には此と同様の有様が自己に起つて來るのである。といふのは、心靈を以て

自ら制する力が失せるため、自己の人格の統一が附かなくなるからである。プラトールがいふ如く、『靈車の馬が相反して牽く』やうになる。人は一心を懐き、其諸能力は互に相闘ぎ、徳性亂れて自ら智力も歪み、肉體も疾を得るに至るのである。シエキスピアの戯曲『リチャード第三世』の有名なる獨語に、此心中の矛盾を手に取る如く描き出してある。

我もし死なば、誰れ一人我を憐れとも思ふまじ、否、憐れむ筈のあるべしや。おのれ自ら省みて、憐れと思ふ心の露だにあらざれば。

以上は人が實際に犯せる罪について述べたのであるが、基督教によると、實罪は原罪に基づくものである。即ち過去に犯した實罪に全人類が感染して罪を犯すように傾く悪質を有つてゐるといふのである。元來此事は随分議論のあるところであるから、一言説明を要するかと思ふ。人性に惡に陥り易き傾癖があるといふ事は實驗上の事實である。所謂『濫りなる慾』と稱して、人間の情慾が道に外れて満足を求める傾向のあることは自己の經驗に訴へても、他人の状態を見ても了解されるのみならず、古に溯つて、見ても同じ現象が認められて終に茫漠たる大古にまで及んでをる。且又我等は此傾向が我等の實罪の結果でなく、寧ろ其裏面に存する或物であつて、人性固有の一物であることを感ずる。即ち生るゝ時自ら有つて生るゝもので、惡性の遺傳とでも云

ふべきものがあると思はざるを得ないのである。凡そ物の起源といふものは不明のものであるが、此罪の傾向の眞起原も朦朧としてをるのみならず、其遺傳の方法も確かには解らない。創造論者も傳生論者も前世論者も皆其人靈の起原に関する自家の説に随つて此點に於ける意見が異なる。それで此等の諸説を讀んで見ると、さうも皆人智以上の問題を論じてをる者の如く感ぜざるを得ないのである。人間の知り得るところは、其れが實驗上の事實であるといふまでのこと、若し之に就て推論をするとしても、古今の歴史に現はれたる傾向は歴史以前の太古に存したものであらうから、それで世界一般に行はれるやうになつたのであると言へるまでである。

右述べたところが、即ち觀察と實驗とに基ける原罪の事實ともしいふべきもので、其れは全く原罪につける種々の臆説とは別の事である。畢竟原罪とは罪の方面から觀た、人性の共同一體のことなのである。加之此は間々個人としては随分拒む者もあるが、古の希臘羅馬の智者學者は申迄もなく、縦し確然とまでは行かないまでも、廣く古代の諸宗教の認めたところであつて、殊に猶太人に在つては其晩年の宗教思想に於て此觀念が著しくなり行いたが、終に其れが聖パウロに切言されたため基督教の神學に移つて來るやうになつた。

『誰れか潔からぬ者より潔きものを生み出し得んや。』

「人は何者なれば潔からんや、婦より生るゝ者は義しからんや」とヨブはいふた。「視よ、我は邪曲のうちを生れ、罪にありて我母我をはらみたりき」と詩篇記者は叫んだ。而して聖パウロが羅馬書に人性を手にとる如く解剖したのを讀むと、其れが眞であると感ぜざるを得ない。

「我は我肉のうち善の在らざることを知る、そは願ふところ我に在れど、善を行ふこと得ざればなり。」

然れど右の如き實驗の事實と之につける臆説とは全く別物である。先づ聖パウロには當時猶太人の定説に従つて罪は人類に死を來したと信じたやうである。此は一見學術に反するやう思はれる。尤も之れについて一言すべきは、無罪の人格が肉體に對する作用といふものは到底實見し得られぬ事であるから、右の説が學術に反するといふは證明の出來ない事であるといふことである。然し聖パウロが吾等以上の智識があつたか、又は學術的に誤つてをつたかは大した問題でない。といふのは、彼の説の要點は「死の刺は罪なり」といふに在るからであつて、此語の意味とても、罪が無くば死が有すまじき性質をば、罪があるために死が有するやうなつたと取れば充分である。勿論人類の苦き實驗からして此が眞實であることは大に知つてをるが、吾等の知つてをる以上のところが尙あるかと思はれる。なせといふに、罪あるが爲に人の神と心靈

界とに對する關係が大に不明になつたところがあるので、若し罪が無かつたら、宛ら夜の睡眠の前方に翌日を望む如く、死の前方に來生を眺めることができるかも知れないからである。若し然うなると「死にて我等は何處に往くをしらす」といふことはないであらうから、ビクビク死を怖れることも消れ失せやうし、朽ちゆく我身も苦痛がなからうし、反つて死は我心靈生命の發達の常態となつて了ふであらう。此が全く揣摩臆測でない證據には、此世で高德の聖徒の臨終の様を見ると大に之に類するところがある。其れは兎も角聖パウロは確かな事實を述べてをるので、罪と死とは現生で如何なる關係のものであるか、此の二者あるがため人類がどれほどの重荷を負ふてをるかを説いたのである。其れで又此確かな事實のうち原罪は唯一部分に過ぎないので、苟くも幼稚の時に死せざる限り人は其原罪の上に實罪を犯すようになるのである。「バブルクの黙示録」の著名は、「人は各其靈のアダムなり」といふた。コレリツツは又「原罪はつきては各人は萬人の充分なる代表者なり」と述べた。故に聖パウロの教理中理論に屬する分に就ては種々の異論もあらうが、彼が人間の實狀を描いた點に就ては何人も同意であるべきもので、吾等に取つては此實狀が大切な問題なのである。後世起つた原罪論に至つては尙更の事である。

又は人性が實際に腐敗することかなど論じ、又原罪の咎を其人に歸し得べきかと問ひ、終に或人は原罪の咎を人に歸すべしといふ説を極端まで推行いて、人の理性が断然承服し得ないことを主張する者もあつた。然し此く異論紛々として果てし無いところが即ち其れが人智以上の問題たる證據であるのみならず、此かる不確定なる議論のため、現在我等に罪の傾向と實際犯せる罪ありといふ恐るべき實驗上の事實を顯著ならしめずして反て朦朧たらしめる嫌のあるのは明かである。

斯く罪の征服が基督教生命に先づ缺くべからざるものであるから、此征伐が出来るといふ保證になる贖罪は勢ひ基督教倫理に最上位を占めねばならぬ。其れで贖罪は玄妙不思議の事であつて、随て幾多の淺論誤解を生じたからといふ理由一つで之を下位に置くことは出来ない。なせといふに、人類を眞實に感化したのは救贖の事實即ち神が基督に在つて世をして己れにやわらがしめるといふ事であつて、贖罪につける解釋の議論其者ではないのである。世界の歴史を觀ると贖罪をなしたことの願望は罪の念と等しく人間に廣く行はれてゐるので蠻族の粗野なる慣習にも古代の大宗教にも、共に贖罪の冀願の存するのが見へる。且かの世界一般に行はれてゐる犠牲といふものは其初めの主意は贖罪のためではなかつたかも知らんが、程なく贖罪が其一元素となつて來た。猶太教に於ては贖罪と犠牲とは密接に關係してをつたが、其れが漸次と靈化さ

れて來て、終には眞正の犠牲は碎けたる心と改まりたる意志であると考へるようになつた。而して贖罪は爲したし、さればとて自ら力はなしとて苦心せる此人情に基督教の贖罪は眞實の天啓として訴へ、人間が解釋せんとして志を果しかねたる問の天の解釋として人の信仰を要求するのである。此く言ふは空論に非ずして歴史上の事實である、即ち幾千億萬人が信仰し、今も尙信仰する事實であつて、此の信仰こそ古今の基督教生命即ち神と復和した題る生命の生ずる秘訣である。

然れども贖罪が若し多少道理で了解することが出来ないものなら、此くまで人の感情良心を動かすことは出来なかつたので、實際多少でない、大に道理を以て了解し得られるところがあるのである。人類に罪あつても、「天地開闢の前に豫め知り給へる」永遠の目的を遂行せんとして、神が自ら人性を取り、縦ひ苦を受けても人を罪より救はんとし給ふといふことは了解の出来ることである。之を信仰すると否とは且く措いて、其處までの道理は合點が行く。若し之を信仰するとなれば其合點が一層進んで悉く神を愛し奉つて其恩に應へるといふ處まで行く。然し果して何故にかく罪より救はれるようになるかといふことが、即ち贖罪の根本性質は其れで説明が附いたといふ譯に行かないので、思ふに現在人間の淺き智力では此説明は到底あたへられないであらう。然るに恰かも此點に於て議論紛々として起り、神の計畫が往々曖昧になり了つたのは

遺憾である。人々は其時代時代の思想法によつて説を立てるものであるから、昨日の是は今日の非と移り行く論説のため贖罪の大事實は妨害をうけ、不明にせられ、其論説が歓迎される世には大に人の信仰を受けても、其論説が時代後れとなると贖罪までが空虚不確のものと感ぜられるようになったのである。然れど贖罪の事實は種々雑多の贖罪論の裏面に在つて千古不變に一貫したものであることを忘れてはならぬ。例へばアンセルムとアベラードとは贖罪論に於て互に説を異にしても、共に贖罪の事實の感動を蒙つて、甲は其高德を羨ひ、乙は悔改をなすようになったので、贖罪の事實は他の諸勢力と同じく其實力を世に發揮して其實在を證明したのである。贖罪を充分領會し得ないからといふて其れが空想であると難ずるとは出来ない。若し充分了解が出来るといふとそれこそ難題が生ずる、何せといふに、贖罪は神と悪罪との關係に相連絡してをるので玄妙不測のものであるからである。然ればとて吾等が贖罪につきて有する智識は毫も道理に反するものではないといふ事を認めねばならぬ。人は贖罪に代理といふ觀念が入つてをると難ずるけれども、其れは人類の共同一致といふことが益々明かになつて來るので漸々に難儀が消へて行く。既に述べた如く、人は何れも社會的の方面を見へてをるから、他人の生命のうちに自ら入り之を感化することによつて自分の本性を完ふするし、他人も亦た我を感化して己れを完ふするものである。然れば

人は御互奉公で互に親密に連絡して居るので、各員皆他人の爲に務め其人は他人の奉事によつて生き、又自分は其人の爲に務めるといふことになつてをる。借又奉事には多少の差があるので人の感化の廣狹深淺は其人物の大小によつて異なるのである。人格が無二獨絶であればあるほど其感化も廣くして深い。言を換へていふと、プラト、ダンテ、オウガスチン、ルーテル、ラファエル、ヘンデルの如き人は他人よりも多人數のために生き、多人數のうちに生き、其反面として多數人は彼等を通して生き、彼等のうちに生きるといふことになる。故に絶對無二の人格が絶對無二の奉事を人間に致すといふことは全く人間界に例のあることである。其れが代理的プロキシマスといふのは、「人の代り」といふ意味でなく「人のため」といふのである。而して人間の方では、基督の靈によつて基督の業を己が生命に受けられ、終に其れが他人のものでなく我ものとなり、パウロのいふ如く、基督の形我うちに成るに至るのである。此途行の第一着は人が義ジヤスティチヤとせられることであつて、其れは人が自分でなし得ず、又自ら獨りでなし得ない措置である。其第二着は聖ホリエイキオン化であつて、己のために基督のなし給へる業を自己の意志の働で受けいれることである。

此二點は近年充分研究して説明が出来たから茲に之を詳論することはしないで、唯だ人間の新生命には之がなくてはならないから、それが基督教徒の實行生活の支關口で

あるといふことだけ切言しておく。贖罪とか稱義（義とせらるること）とかいふと何だか神學者の空論臭いところがあつて、之を嫌ふ人もあるが、其中に含んでをる眞理は決して空理空論でなく、人間の生命全體と極めて實際的に親密の關係を有してをる。畢竟稱義聖化及其他之に類する語は唯だ一種の略語ともいふべきもので、之を用ひて世々代々基督教の福音を人に傳へ、其時代に隨つて新たに其意味を豊富にするものである。或は又一種の樂譜とも稱ふべきもので、美妙なる音樂が其中に眠つてをるのを、大家が出でて其を眠より醒し以て聽く人の耳を悦ばせるのである。即ち人の思に超えたる愛と、限なき生命といふ大音樂が其中に眠つてをるので、此妙律が一たび奏せられると、浮世の亂調は雲の如くに散るのである。

【二八】

第二章 品性は生命の條件

基督教的生命は人間の意志の改革から始まるものであるから、此生命は一個人の資格で一個人から始まるべきもので、人間の衆團若くは社會から始まるべきものでないことは明かである。今此事に注意を惹くのは必要である。といふのは宗教以外の慈善家、道德論者等は先づ人間の集團に眼を注ぎ、社會の教育を進歩せしめ、社會の理想を高め、社會の生活状態を改善さへすれば社會改良は出来るものと考へるようであつて、

基督教徒は自分一人の靈を別々に救ふことのみに腐心して利己的であると非難するからである。成程古來眞面目ながらも不完全なる基督教徒の言行に、此く非難されても是非ない所があつたに相違はない、しかし今日の如く教會が其社會に對し、傳道につきて有する責任を充分に認め、之を切論公表して居る時代に此かる非難をするのは、如何にも基督教の本色を曲解するものと謂はねばならぬ。基督教の目的は此世の國々を神と基督の國にして仕舞ふとに在るので、其根本の目的は社會的である。然し社會は個人より成るもので、其個人は罪人であり、而して罪は人の人格の中心即ち意志に根を有つてをることは已に述べた如しである。そこで先づ意志の改良隨つて個人の改良より着手せずして社會改良を企てるのは、知らずして皮相の業を爲すか、又は知りつゝ偽善を行ふと謂はざるを得ない。不確なる基礎の上に高く家を築き上げるほど愈々大なる危険を冒すものとなり、傳染病の感染者を多く集める丈け其惡疫を猖獗ならしめる譯であるが、罪ある意志は即ち此不確なる基礎又は惡疫に外ならない。然れば罪ある意志を其儘にして置いて社會の道德的改良を企て、も其れは無益である。好き家、高き賃銀、清潔なる空氣、教育などは申迄もなく結構なものであるのみならず、人を善良に導く手段ともなるが、其れが直ちに人間を善良にするものでもなければ、又必しも善良に導くとも謂へないので、道德上からは善とも惡とも附かぬもので、此

等を用うる人の精神一つで或は貴く或は貴からぬものになる。而して其精神動機とは心に屬すること個人のものではないか。左れば真正にして充分なる社會改良は先づ個人から着手せねばならぬ。

【二〇】

か、れば基督教は個人より始め、先づ人に罪を明かに認めしめて之を癒すことを目的とする。基督教が動もすれば罪を除き大袈裟に言ひ過ぎて人生の事實を狂げると難せられるのは此故である。然し基督教は何れ程罪の重大なことを切言痛説しても不當でない、却て無智か、爲にするところあつてかは知らんが之を非難する論者こそ人生の事實を狂げるものであると明白に主張するのである。『もし我等罪なしといはば自ら欺くものにして眞理われらに在るなし』。

然らば斯く主張する理由如何んといふに、人は心靈的の者であつて有限なる心靈は必ず心靈的の境遇の力で生活する、恰も有限なる肉體が物質的の境遇に頼つて存在すると同一である。其心靈的の境遇とは結局神のことなので、『我等は神によりて活き、動き、又在ることを得るなり』とある如くである。されば人は唯だ神と一致して眞正に生活し得るのであるが、此一致を妨げる唯一の障害物は罪であるから、基督教の生命觀では先づ悔改と、罪を認め、罪を棄てることを主張するのである。勿論幼少より正しく生活し來つて唯だ其れを一層進めて行けばよい人と、道に外れた生涯を送つて改

心を要する人とは大なる差があるのみならず、此兩極端の間には百種の品性があるが、罪に汚れてゐるとは何れも同様であつて、高德の人丈け却て靈眼が鋭くて先づ自ら之を告白する。基督教の悔改とは即ち此事實を認めるところから生ずるので、悔改は人の全人格の作用である。何せといふに、過去の罪を理性で排斥し、感情で悲み、意志で將來は改良しようと思ふのが悔改であるからである。カントとかスピノザとかいふが如き幾多の道徳論者は、倫理的悔改即ち意志の改正のみが必要で、過去の罪を悲しむといふ感情は精力の浪費であると論ずるが、基督教の立場から謂ふと、道徳法の裏面には人を愛する人格が有るのであるから、罪を詮じつめると愛を傷けたことになる。そう悟ると。罪人の感情が動いて悲痛を感ぜざるを得ない。此感情の強弱は人により民族によりて大に異なるであらうが、神が愛であると眞面目に信する者には必ず發せざるを得ないので、且つ此感情のある爲め、一方には大に謙遜の心を人に起さしめ、他方には基督教品性の一熱烈なところが生じて来る。

そも謙遜の徳は他の生命觀に於けるよりも基督教の生命觀に於て遙かに重大の地位を占めてゐるが、其處を世人が屢々誤解する。謙遜とは人間に對して謙るといふよりも主もに神に對して謙るとを謂ふので、此理を充分悟るところより其れが生ずるのである。元來人は其存在も一切の能力も皆神から授かつた者であるのに其能力を神に背く

爲めに用ひ、又は造られたる者であるから神に信頼して行くべき者であるのに、傲慢にも獨立自主の不當なる態度を執り、隨て其人格に具はれる各能力の作用を測り、たき迄に毀損し到底自ら之を矯正することの出来ない程になつた。此處を承認するものが悔改である。一步進んで人が其破つた關係は愛の關係を破つたのであると悟ると尙更ら謙遜の情が深くなつて来る。之れに何等卑屈の廉はないので、唯だ正直なといふまでである。しかも其結果は人を弱くせずして強くする。といふのは、人間の元氣精力の源として神に導ひて之に頼らしめるからである。固より此くして生じたる氣風は人の同胞人類に對する態度に良き影響を及ぼして彼を社交的にするに相違はないが、其れは第二の結果であつて、第一主要の性質は宗教的である、即ち個人が神に對して眞の態度を執るようになるといふに在る。

且つや悔悟に悲痛といふ感情の元素があると、其れが意志に働を及ぼして生涯を改めようといふ努力を切にする。何せといふに世に愛ほご強い起動力はないので、又自分を愛して呉れた人の恩に背いた其人に不親切をしたと念ふほご人を動かして活動さすものはない。我不實に心を痛める恩人の遺憾の眼を視、悲憂の聲を聞くばかり人を悔悟せしむるものはない。宗教に於ても同一であつて、罪を愛に對する侮辱と悟るほご悔悟に導くものはないので基督教徒の傳記は充分之を證明する。理性は罪人に罪を認

めさすであらうが、感情は聖徒を造るのである。此の如く悔悟は智情意とも全人格をして神と正しき關係を有たすものであるから、基督教徒の品性に缺きがたき基礎である。而して品性を形くることが生命の根本であるから、其れが基督教の最大目的である。人は外面では法に合するのみならず善道に適ひたる行を爲しながら、其内面の本人は善人でないといふこともあるが、品性が善ければ必ず其行爲は善である。人は種々の理由よりして、百回も眞實を語るかも知らんが、其れでも其人が眞實なる人でないといふような事もあるが、其本性の眞實なる人は眞實を語らざるを得ない。故に我等の品性の方が我等の行爲よりも大切なのである。行爲と品性との關係を右の如く述べると誠に明白で又古今有名の道德教は皆之を認め得るが、世間普通の人が所謂道德として許して居るものを觀ると、黙々の裡に之を度外視して居るのである。人は兎角一部一部の生活をして居るもので、世人の眼に觸れる其一部門の責任を盡すと、世人は其道德に實際以上の價値を附けて讃めて居る。例へば勇敢なる軍人、敏腕なる政事家、公平なる判事、巧妙なる醫師、正直なる商人は各其道に於ける達人として世人に認められるが、必しも善人であると限らない。如何程かかる人々が社會に有益であつても、又有益なるに相違はないのであるが、其れでも暗々裡に言ひがたき一種の惡感化を及ぼして社會の道德的標準を混亂墮落せしめ

ることがある。故に如何程美しき外部の善行爲を多く積んでも、其を善き意志と同等に視ることは出来ない。何處までも主張する必要がある。再言せば、善行爲は善き意志即ち或る一種の善き行爲を執らうと決するのみでなく、善は善なるが故に之を執ると決する意志、更に言へば、善き品性と同日に論すべきものでないのである。

【二四】

且つや品性は行爲よりも更に深きのみならずして更に廣きものである。といふは品性は實に正しき行爲の源なるのみならずして、正しき感情、正しき思考の基であるからである。ストイック流の道德論者の硬派中には、感情は、本来的本来的たるが故に本分をつくすといふ純然たる倫理的動機を妨げるといふて、感情の價值を輕視するものも寡くないが、これでは道德は法外に抽象的のものとなつて仕舞ふ。成程人生には本分と慾望とが衝突する場合もある。然る場合には慾望をすて本分をとらねばならぬ。しかし此は道德の進歩が不完全ながら起る變體なので、進歩して達したいと思ふ目的地は慾望を本分に犠牲にするのでなく、二者相符合一致するといふ妙境なのである。即ち本分を本分たる故に行ふのみでなく、本分たるが故に之を慾望するのであつて、所謂「聖徳の美」を慾望するのである。心に快らずして行ふ本分といふは何となく峻厳にして無理な處があるが、本分を愛するといふことになると自然に其れが行へるようになる。そうになると本分が善として貴き處へ美といふ飾が添ふて、善美共に全く、所謂

るはしきところが出来て人をして之を愛慕せしむるようになる。されば「凡そ美しきこと、凡そ眞なること、凡そ直しきこと、凡そ令聞あること」を思念して、漸々と天のこゝを愛するようになつた基督教的品性は實に善を行ふ力を確かに有するのみならず、其行爲に一種の優美の光彩を添ゆるものである。

儲又品性は善惡の關係ある問題を正當に判断する源である。勿論科學哲學等に關する問題を考察する際にすら、其思考者の感情徳性が其考察に影響を及ぼすことは少くない。世間を忘れる事、興味、注意、正直、忍耐等の如きはこれである。しかし其れが道德、社會殊に心靈に關する問題になつて來ると一層影響が甚大なのである。基督教徒の生涯が該教の根本信仰箇條と密切に關係するといふことは既に述べたところであるが、此等の教義の信仰が信者の徳性によりて大に左右されることは申迄もなきことである。なせといふに、此等の教義は代々人に傳へるために理屈めいた語で言ひ表はしてはあるが、畢竟心靈的のものであるから、之を悟るにも心靈的に悟らねばならぬからである。其又心靈的悟得の力は心靈的品性がなければ人に具はるものではない。勿論品性はたへず智情意として外に發表し、其發表したものが又反動して品性其ものを感化發達さすものであるから、此發表と切りはなして何か品性といふ一物が、心の内に獨立しあるように右の如く論するのは不自然の嫌がある。然しそれさへ承知の上

【二六】
 であれば、吾人は人の最も不變の側面なり、人の本性の最眞の表示たり、其本我に尤も接近せるものたり、其一切言動の原因たるものを稱して品性といふても不可はないと思ふ。此意味に於て吾人は基督教の最高の目的は品性を形づくるに在るといふてもよい。さて種々の倫理學派は規矩教訓を以て品性を形つくらうと努めたが、基督教のみひとり人の標準として模範的人格を立て、之を形成しようといふのである。基督教の品性は基督の靈により基督に倣ひ即ち基督に従ふことによつて形つくらるのである。福音書に載せたる彼の生涯は我等の前に示されたる外部の模範であつて我等の靈と力を合せて働く基督の靈こそは、我等をして此模範を寫出さしむる内部の力である。福音書を讀むと完全なる模範的人、遺憾なく神靈が内にやどつた人の活例が描出さされ居るのをつくづく觀るのである。殊に彼を其先驅者なる施洗者ヨハネと對照して見ると一層其光榮を認める。大禁慾家なるヨハネは世を遁れ俗をはなれて居るので、其悔改を奨励するや、秋霜烈日人を懾伏せしむるものはあるが、世間普通の生涯を送りたるものに同情を以て近くことはできない。基督に至つては然らず。彼は罪人を容れて之と俱に飲食し、婚姻を祝福し、墓にて泣き、人馬絡繹の巷を巡つて善を行ひ給ふた。彼は萬人に適する。それで「特色」を具へたる我等も各彼のうちに各自の理想を發見することが出来る。此品性の萬人に悉く適する普通性が其傳紀の普通的なところ

に現はれてをる。福音書の萬人萬世に適することは他書の及ぶところでない。種々の信仰上の書物はいふも更なり、「基督教の模倣」の如き偉書すら著者及其時代の偏見短所に毀損されてをるので、其短所を矯正するには屢々其大源頭即ち福音書に立戻らざるを得ない。近世一種の論者は基督の品性は人間の完全なる模範となるものでなく、唯だ其當時のエセネ宗徒の如き禁慾的の品性で、技藝學術貿易其他百般の社會政治に亘れる普通人の生涯に何の關係もないと評するのであるが、以上吾人の主張は無論此かる批評に眞面目に答辯する必要がないと認めてのことである。といふのは、福音書に描き出されてある基督の人物を公平に觀察すると、善き意味に於いて世間的なところが些か缺けてゐないことは著しき事實であるからばかりでなく、實に此かる批評は基督の生涯と事業の性質を全く誤解したものであるからである。彼は品性の源たる心内の動機に心を専らにしてをるので、其目的は人をして神に對する關係を全然正しくせしめ、以て其内心の諸能力を眞正に發展させたいといふのである。彼は人が神と正當の關係をもつようになつた以上のことをかくせよ、此くなす勿れとは指揮しないので、只だ其うなる唯一の要件即ち神と一致することに力を用いたのである。なせといふに、此條件さへ具はらば、人各々が有する「殊れる賜」の發達は自然の結果として生ずるからである。基督は明言し給ふた「眞理の靈來らんとし彼は汝等に衆理を悟ら

しむへし……彼れ我れより受けて之れを汝等に示すべし。父の有ちたまふものは凡て我有なり」と、思ふに此語には少くとも神の授け給ひたる人間諸能力の自然の發達といふことを含み居るに相違なく、教會は常識を以て古來かく信じてをる。成程時と場合によりては世俗生活に對する極端の反動もあつたが、概して言ふときは基督教徒は其天賦の能力を用ひ、人生百般の職業を基督に獻ぐるを自分の本分と確信し、哲學者、詩人、美術家、科學者、實務家として世俗の職務に従事したもので、之によりて人類の進歩を扶掖したのである。時には軍役或は俳優といふが如き某々の職業に就て疑の起つて來たこともあるが、それは其職業が正道に合して居るや否やの問題なので、今論じてをる大體論には關係がない。

基督が完全なる模範でないなどいふ説の裏面には、基督の神性と之を大に主張してある福音書とを拒絶する意があるのである。それで若し基督を普通の人間と見做さば縦ひ他の偉人傑士の如く模範となることは出來ても、勿論萬人の生命を陶冶すべき活模範となるとは叶はぬことである。カントは「道徳は模倣を容るの餘地なし」と曰ふたが、成程個性を殺して了つて他人の眞似をするとか、唯だ他人がなす故自分もなすといふ様な譯ではカントの説の如くである。これは習慣的道徳であつて道徳生命の初段に過ぎない。我等は他人たるべからず、自己たるべきものである。且つ或る時代及境

遇の弱點短所を有する人間が萬人の標準となることはできない。故に基督は基督教徒の目標として之に倣ふべきものであるといふのは、彼が眞に世に來る凡ての人を照す眞の光」であるとして充分確信しての事である。即ち人たると共に神であるからして、其萬人に適應する神性によつて、萬人の一個一個の理想を己が一身に集めることが出來るので、宛も萬人が一人一人自己固有の運命を照し視る鏡の如くである。其處で基督に倣ふのは決して吾人の人格を犠牲にするのでなく、之を實現する譯なのである。換言せば基督は寄り着けない高尚なる模範でなく、人の力に宿り給ふ原動力なので、彼は此世にて示させ給ふた品性をば聖書の力にて人をして各其固有の性質と事情との許す限りに於て模倣せしめ彼によつて人は神の素志の如く其本來の目的を遂げるようになるのである。故に基督が倫理上意味があるのは彼が神性を有するからであると謂はねばならぬ。

基督教徒の目標が基督に倣ふことにあるとすれば、基督教徒の眼前に置かれたる標準は完全になることであるのはいふまでもない事である。『爾曹の天の父の完きが如く完くなるべし』と基督は山上の説教に宣はせられたが、然らば如何にして完全になれるか。『我を見し者は父を見しなり』との教主の語が其答である。

罪に妨げらるゝ此世に於て完全の域に達するとは固より言はぬ。此世で完全になると

いふことを信する或熱狂派がないでもないが、基督教會の大多數は此説に賛成しない。完全とは遠き未來の目標であつて、かの萬物皆新たにせらるゝと稱する世界に於て初めて達するものであるが、しかし兎に角完全を求めよとの命令は基督教徒の生命に一種特徴を與ふるものである。なせといふに世人は大概さまで高尚ならぬ言行の標準に満足し、彼等が達し得べき水平、行ひ得べき律法に甘んずるからである。

かの卑き人は小さき事をもとめ、

これを見て、これを行ふ。

恐く尤も世俗の稱讃を博する倫理説は此かる主義に賛成するか又は賛成するよう思はるゝものである。此かる卑近の標準は劣等文明の世界には勿論有用たりしに相違はないが、とても人間の心靈を發達さす助けとはならない。といふは大なる事實を作り出すには大なる理想がいるからである。

此の高き人は大なる事を追ひ求めて、

まだ其事を知らぬまに、はやくも露と消れ行く。

而して基督教の完全といふ理想ほど高尚なるものは他に考へ得られない。かるが故に吾人は一方にはたわす懺悔し、他方には絶わす進歩することになる。懺悔といふは、かゝる高尚なる標準で判定されては吾人は常に無益の僕であると自認せざるを得ない

からである。而して又進歩といふは、吾人の理想はかくも高尚なる故、現在以上の状態に達するように絶わす力めねばならんからである。此は宛がら登山者がいよゝ／＼高く登ると、いよゝ／＼高き嶺が現はれ來るが如くである。

此種の心靈的理想主義は兎角普通の人が忌む。といふのは全く其中に懺悔の元素があつて、自分の現狀に不満足を感ずるといふ不愉快が伴ふものであるからで、此かる説を稱して實際に適しない迂論であるといふ。

然し若し進歩が吾人の目的ならば、此理想主義こそ進歩の唯一條件を供給し、眞の進歩と偽の進歩とを區別するものであるから尤も實際的なのである。世に似而非なる進歩があつて、實際は進歩でも何でもなく、唯だ一の有様より他の有様に移り行く丈の道行で、何たる効益もなく、かの東洋人が太く嫌忌する西洋人流の躁急不安の結果に過ぎないものがある。之に反して心靈的理想に鼓吹さるゝ變化は個人に取つても、人類全般に取つても、常にいよゝ／＼高尚の状態に進むことになる。今日世界文明國の状態は其理想をさることが實に遠い。しかし其文明國に於ける文明史の裏面を窺ふと、かの政事學者等が所謂進歩的の人民の天才のみで、基督教の完全に關する理想の鼓吹が無かつたら決して達し得られなかつたと思はるゝものがある。勿論反對をうけて此理想は蒼白虛弱に見えることもあつたが、其蒼白なのは犠牲献身の色であつて、其弱さ

ところが、却て強き者よりも強いのである。かく言ふも決して此理想を追求することが不完全な時であつたといふ事實を忘れては居ない。理想といふものは一般人民に守らすには之を明白なる律法規則にして了はねばならないのであるが、是れが屢し殊に暗黒時代といふが如き劣等文明の社會に於ては墮落して道徳が唯だ律法を守る丈けのものになり、外部の規則を守る方が精神、動機よりも重く視られるようになる。

或は又はよりも精神は高尚でも同じ誤に陥つたこともある。人は完全に達したいと熱望するの餘り、此理想は永遠追求しても尙前途に立ちて人を魔くといふ高遠のものであることを忘れて、此世にて或状態に達し、又は或事を行ふて、此世にて此理想を實現しようと思つたこともある。かの所謂「完全に就ての勸言」といふが如きはそれであつて、修道院の僧侶が貧、潔、順の三誓約を守り、隨て普通人間の生涯を以て僧侶生活よりも不完全なりとなしたのは其一例である。又人の肉軀上の諸能力を程よく制することをせずして全く之れを禁遏して人格を全ふせんとしたる極端の禁慾主義も或は又何となく現世及現世の誘惑を避ける傾向があつて、基督教の愛の誠を守るといふよりもストア派かエピクロス派の如く冷淡に世を白眼視する風も、凡て右の主義から出たのである。人は之を評して、かゝる完全は消極的である調和の在るといふよりも不調和の無いといふ丈けのものである、生命の充實よりも生命の空虚を示すものであ

【三二】

るといふ。成程其れに相違はないが、又そふ計り言ひないところもある。なせといふに此種の完全は一種の勇猛心であつて、人は之を批評するは易いが、之を模倣するは容易の業でなく餘りに外形に重を置き過ぎた完全到達法に相違はないが、畢竟完全に達せんとて一生懸命に盡して居るのであるからである。此點に於ては學術と宗教とは似た所がある。學術家は各専門の研究に従事するがために一方に偏した人になる。しかし之が爲めに彼は學術界の進歩を助ける人になる。之と同じくアントニーとか、ベネデクトとかフランシスとかいふ如き修道院風の聖人は心靈界の専門家ともいふべきもので、完全の或一側面を離して自己の生涯に現はし、以て不完全なる世界の眼を醒し、世人をして人間の大理想を常に眼前に置かしむる役目を勤めた人である。否彼等が暴力物慾の跋扈したる時代に生れて之と奮闘せざるを得なかつたことを思ふと、彼等の如き生涯を送るが最上策であつたかと考へられる位で、畢竟彼等が此かる方法で道徳を維持奨励したればこそ、今日吾人は其効によつて一層高尚なる標準を立て、恩人なる彼等を彼此批評し得るのである。且吾人が本章に於て考へつゝある點、即ち基督教徒が進んで事業をなす唯一の基として、何はさておき、先づ我靈を我有とし、我品性を直くせざるを得ないといふこと再言せば個人として聖くなくてはならぬといふことに對して、右の如き聖徒は重要な證人である。

第三章 鍛練は發達の方法

【三四】

世間には自己犠牲を基督教の倫理の理想目的と誤認し、自己發達を理想とする主義と相對照して喋々之を論ずる人があるが、此かる人が苟くも基督教の目的は生命にあるので、其生命の目標は完全圓滿といふに外ならぬことを知つたならば、其誤認を自ら認むるであらうと思ふ。論者は自己犠牲を基督教的生命を得る方法とせずして其目的となし借之を自己發達といふ希臘風の理想に比べて基督教を貶するのである。此自己發達主義は其後歐洲文藝の復興の時に再現し、近世に於てはゲーテを以て之が代表者とするのである。成程一寸感服すべき議論のように見える。極めて詮じつめた意味で言へば、自己發揮は人間固有の根性であつて、畢竟ただ生きたいといふ人の願望に外ならぬ。之をむつかしくいひ並べると、人間固有の諸能力を發達せしめ、之と共に諸能力の活動すべき機會を多くすること、人間固有の一切のものを高調し、擴張し、行ける處まで行つて見たいといふことなのである。吾人は此かる自己發揮は自然で正當で健全であり、人性に根ざしをるものであると感じ、自分にも望ましく思ひ、世の詩人、畫家、軍人、政事家其他所謂名を揚げたる人々に之を認めると嘆賞せざるを得ざるところのものである。且つ自己發揮主義を執る人は必ずしも基督教以外のものと限

らないで、教會内にも一種の暗流として存してをる、即ち道理の上から自己放棄の必要を拒まんとする念があつて、平素は餘り著しくないが、心靈上の危機に際しては幾たびか現はれ來つて心靈の眞作用を妨げるのである。

左れば吾人は此く記憶すべきである、此かる理想を追求するのは、基督教の立場から見て、唯だ之を理論と見れば決して不當の説ではない、しかし人間今日の狀態では自己發揮といふことは時が早過ぎる、何せといふに、此は罪の存在を看過した説であるからである、此う思はねばならぬ。今日此世にて發達すべき吾人の自己は罪ある自己であるから、罪に打勝つまでは到底發達する力がない。故に所謂自己發達は實は自己放縱であつて、其極品性の墮落を來すこととなり、進歩にあらずして退歩となり、人間の眞生命に缺くべからざる神との一致を妨ぐるに至らざるを得ない。希臘理想の恐るべき結果は聖パウロの筆にて千古に黒く寫し出だされたが、爾後此流を汲むものある毎に多少此と同一の悲惨なる狀態に達せざるものはない。其處で何はさて置き罪に勝つ必要があるとすれば、現世に於て人の人格全體が過不及なき完全圓滿の域に達すべしとの望は捨てねばならぬ。

故に聖書には克己、體を苦しむ、世に對して十字架につけらる、右手を斷つ、右眼を抉り捨つなごいひて罪と戦ふことを説いてあるが、勿論此かる生命は人格の一部分の

み完全に達し得るので、幾分偏して居るのは是非がない。然し偏してはをるが兎も角神と一致して事を爲すのであるから、現世丈けで謂ふても、神を信せずして完全に達せんと努める人と較べては大に有力なところがある。才能秀でたる罪人よりも數にもなき聖徒の方が偉大なる人格である。まして「人は永遠を有す」基督教徒は現來兩世を一個の世界と観て、來世の事を念頭に置いて世を渡るのである。必ずしも現世にて克己せば來世にて福樂を報酬として享けるといふのではない、來世に行けば神と合體することを妨げる罪に勝つことが出来る、神と一致が出来れば自ら我人格に具れる諸能力が完全圓滿に發達するといふのである。之を要するに基督教は人をして現世に於て爲し得る限りの發達を爲さしめ、未來に於て圓滿の境に達することを約するものである。

【三六】

左れば基督教では禁慾は手段であつて目的ではない。マニク宗等は物質肉體を元來惡と認めるから、禁慾が目的になつて來る。其處で情慾を具へたる肉體を人の敵と見做し、之を可成滅ぼせば功德ある如くに考へ、終には苦痛を却て楽しむといふ陰鬱なる氣風を醸す迄になるのである。印度の難行者は其著しき例であつて、其苦痛に耐ふる力は驚嘆に堪へないが實際は人性を高めずして墮落せしむるものである。而して基督教も或時代に於ては此東洋思想の影響を受けたる禁慾主義を實行したことが有るのは

争はれない事實である。然しながら基督教には之よりも高尚なる一種の禁慾主義があつて、基督自ら之を命じ給ひしことは明かである。「人若し我に隨はんと欲せば己を棄て」よと彼れは宣ふた。是れ信者の生涯は其發端よりして禁慾の元素あることを示すものではないか。基督は次に此く克己禁慾する理由と規則とを授け給ふた。「若し汝の右眼汝を礙かさば抉て之を棄てよ、そは汝の手足の一を失ひて全身地獄に投げ入れざるは汝に益あればなり」と。其意を按ずるに、物質を無視し、肉生を蔑如するのではなく、却て兩眼を並せ具ふる方が完全ではあるが、人間に罪の傾向があるから是非なく、孰れを取るかと謂はゞ、不完全ながら肉を捨て、靈を取るといふのである。聖パウロもいふた、「己の體を撃て之を服せしむ、そは自ら棄てられんことを恐るればなり」と。畢竟基督教の禁慾は神の造り給ひし物を惡しと見るより起るのでなく、人が罪惡に陥り易きところがあるから、誘惑に近づくかぬよう之を避けるといふ謹慎より出づるのである。信者は己が力の不足を感ずるので逃げ避けるのである。さて此く感じで見ると信者は謙遜ならざるを得ない。そこで自分が苦行難行をするから何か功德でも積むような念は毫頭起つて來ないのみならず、却て其れは自分の不完全に基くことを絶へず忘れさるゝの器械となるまで、ある。左れば基督教の禁慾家は苦痛其者に功德ありといふ念は決して生じないので、唯だ目的を達する手段として謹慎の上より苦痛

を忍ぶのである。

禁慾といへば世の常ならぬ苦行難行でもする人の事のように思ふ習なれど、以上述べたる主意にて謂はゞ、苟くも基督信者たる人は皆此主義を奉すべきものである。さて此は禁慾主義の道理の方面であるが、之に感情の方面即ち痛悔の方面がある。此は道理の方面の如く萬人皆行ふべきものといふのでなく、人々任意のことであるが、しかし世界の信仰の歴史に於て随分注目すべき現象である。感情の人が一旦自分が己を愛する神の心をいためたと悟る曉には、何とかして自ら己を罰して其悔恨の情を表はしたので其れは道德上の義務と思ふて爲すのでなく、止むに止まれぬ愛情が發して然るのである。基督教の禁慾生活は個人及民族の氣質によりて異同はあつたが、此精神は屢大に其禁慾生活の基礎となつたのである。

故に謹慎と愛とが基督教禁慾の源であるから、理論上東洋の禁慾主義とは頗る趣を異にしてをる。但し實際上に於ては往々必ずしも彼此差別が無かつた。基督教の禁慾主義の初めて勃興したのは埃及であつたが、丁度其れは東洋の感化の盛大な時と場所とに起つたのであつて此感化の爲めか又は自家の熱狂の爲めかは知らないが、屢々極端に馳せて基督教の理想に反したもつた。蓋し此は當時異教世界の淫蕩の風俗に對する反抗運動として必要であつたので、人心を動かすには思ひ切つたる言動を以て

實物教育を施こさざるを得なかつたのであるが、不完全なる人間の行ふ反抗運動は古來真理に誤謬を混するが例である。肉躰をマニケ宗徒の如く惡と考へて之を扱ふようになり、肉躰上道德上の苦行難行を除りに極端まで實行せるが爲め、往々其目的を失して却て避けんとしたる誘惑を強むるに至りたるのみならず、功徳を積むといふ念が何時しか侵入し來るなど、テベイド砂漠の空氣は新約全書の空氣と甚だ相異なるものとなつた。テニソンが描き出した柱上仙人シメオンは當時砂漠にて修行せる幾多の仙人の好標本である。中世紀に至つて此等遁世者の崇拜家等は其長所短所共に之を學んだが爲め、終に禁慾主義に一切反動する夫の文藝復興の運動が起るに至つた。然し「事物の濫用は其物の有益を否定せず」。禁慾主義は時代と場所とによつて發現の方法こそ異なれ其れが基督教的品性に缺くべからざる元素であることを忘れてはならぬ。之と同時に吾人は過去の殷鑒によつて、禁慾は目的を達する手段に過ぎざること、謹慎と愛との外の精神より禁慾を行ふべからざることを記憶すべきである。

以上は自己の意志よりして自己を鍛鍊する禁慾の事に就て述べたが自己の力以外の原因より來る他の一種の鍛鍊がある。即ち疾病、苦痛、死別、悲哀及其他諸種の憂慮等凡そ人間の日々負ふべき十字架が是れであるが、之に就ての心得も前述同様である。此等の患苦を忍ぶにも決して之を目的としてもならず、目的として之を求めてもなら

ぬ。畢竟此等は神と一致して品性を形くるといふ最後の目的に對する必要の手段方法に過ぎない。シヨールペンハエルやハートマンの如き厭世家は世界に苦痛が存すること嘲罵を逞ふするが、人の品性を陶冶するに艱苦は有力なるもの、無いことは實際争はれぬことである。ペーコンやシェーキスピアは人性に通じた大家であるが、シェーキスピアは「艱難は甘し」といひ、ペーコンに至つては「舊約の祝福は順利なりしが、新約の祝福は艱難なり」と切言した。博士ジョンソンは曰ふた「苦患が萬人を善ならしめざることば實際の明示するところなり、然れど世に存する善の大半を苦患が生ずることも疑を容れざるところなり」と。此等は熱狂者にあらずして世態人情に通ずる思慮ある人の語である。近世の道徳論者にして議論の公平なるジエー、モツン氏は甚だ注目すべき語を發してをる、曰く、「人生の經驗を積み行くにつれ働きはよく、眞實の遊戯となりて、患苦はいよく眞實の働となる」と。

艱苦の存在する理由には人間の今日迄了解するところ以上のものあるにあらずやと思ふ時も屢々之有れど、兎に角吾人が了解する理由は明白なるものである。先づ第一の理由は、人間の罪の根本は我意であるが此の我意を挫くには我意と衝突する艱難を忍んで受くるといふ程有力なものはない。之を克己禁慾に比しても却て有力である。といふのは、克己には自力を發揮せねばならぬところより、屢々傲慢不遜の氣風を醸し、

奮き自我が新しき形を具へて現はれ来ることは禁慾主義の歴史の證するところであるからである。されば艱難は我意に對する最良の治療である。第二に、基督教徒は特別の攝理を信する故、自ら艱難に遭ふとき、此は一般宇宙の法則が偶然自己の上に働くのであると冷淡に考へずして、神が特別の思召を以て我を遇し給ふと信する。其處で此は直接に神意に黙從する譯であるから神人兩意志の一致に外ならない。第三に、人間が尤も直接に神祐の必要を感ずるは艱難の時であつて、之が爲め祈禱するようになる。然るに祈禱とは單に意志が神と一致せんと求むるのみならず、全人格が神と一致せんと望むものであつて、其結果一種言ひがたき深切なる一致を得ることは、悲痛のうち此一致を求めたる人のみ知るところである。「我れ汝の律法を學ばんが爲め艱難に遭ひたるは我れに益あり」と詩篇記者はいふた。又曰く「我れ艱まざりし時は過を行ひしが、今は我れ汝の、證言を守りたり」と。

以上は苟くも宗教の信仰あるもの、普く同意するところであるが、是ればかりではない。基督教の精神で患苦を忍ぶと、必ずとはいへないが往々品性に良結果を及ぼすことがあるので、同情、剛毅の性を養ひ、人を精神的にするのである。艱難に遭ひし人は他人の艱苦を察する力が強く、同情が深い。其聲といひ、動作といひ一種不思議の力がある。然ればといひて彼が女々しく爲るかといふに、患苦に鍛へた人は涙脆くし

て而かも却て剛毅な處があるので、自ら苦みたるが爲め世人の苦痛を軽減せんとする難事業を行ふ力がある。且つ又彼は困難の爲め益々心靈界に接するよりして自然に精神的になつて来て、其心靈が高潔になるのである。

然れば罪ある現世に於ては悲哀苦痛は品性を陶冶する最大力たることは是れ實驗の明證するところであるが、其れが品性鍛錬の益となるには、之に對する精神が正しくなければならぬ。即ち患苦は信仰生涯には是非有るべきもので、之に遭はば聖ヤコブが謂ふ如く、我心靈の益となるゆゑに、「之を喜ぶべきこと」とし、するといふ心得が必要である。然れど此精神は東洋宗教の如く、何事も運命と諦らめて、身にかゝる災難を避けるんともせずして忍び耐ふるといふのは大に異つてをる。基督教徒は正直に奮發して避け得らるゝ艱難辛苦をば、避け得られぬ神の思召として一も二もなく之を忍ぶのではない、又さる義務もない。却て艱難に遭ふとき之を除き又は軽減せんと奮發努力するのが抑も人間活動の源であつて、其れが醫術とか社會事業とかいふが如く他人の爲めに盡力することになると、人間の自由意志を最も高尚に用ふるものと謂ふべきである。

然し此努力が方向を誤つて、道德法を破ることに力を盡すといふことになる不都合のものとなるので、基督教は寧ろ苦を受けても罪を犯すとは成らぬのである。極端の

例ではあるが耻辱苦痛を免れんが爲めに自殺するといふは信者の爲すべからざる事である。其他日々の事物に於ても此主義を奉せねばならぬ。其處で罪を犯さずば避け得られぬといふが如き艱苦は、其れが神意に出づる證據であるので、此が神意であるとの精神で之を忍ぶと品性を必ず高める。加之苦痛は唯だ實行上の利益を人に與ふるのみならず、此かる利益を與ふるといふ事よりして自ら自己の世界觀が愈々明白になつて益々信仰を深くするようになる。其れが又自分の日々の行爲に影響して一層言行が高くなつて行く。元來苦痛が世に存在し、殊に其れが善人義士の身にかゝるといふ事は、罪惡の存在の次に位する最難問題であつて、神の仁愛と矛盾するとして非難する人が絶へずある。然に人が實際苦痛に遭つて見て、其れが屢々人の害とならぬのみならず實に利益となるといふ事を見出すと、此かる反對論は力を失ふて仕舞ふ。尤も動物世界に苦痛が有るといふ難問題は是れで容易に解くことは出来ない。何分にも人間は動物になつて自ら實驗することが出来ないで困る。しかし以上述べたことが矢張り幾分の解釋にはなるまいか。動物にも人間にも苦痛といふものがあつて一見すると害物のようにあるのに、人間の方では其れを實地に試験して見て實際害でなく利益であるといふ事を見出したとすると、動物の方では人間が實地に經驗して之を説明することは出来ないが、矢張り人間と同じことではあるいまかと思ふても不可はないと考へ

る。

之を言換へて見ると、此世に於ける人間の状態は唯だ一個の説明の外到底解釋のつかぬようになつて居る。先づ人間は此世で何か目的があつて生きてをると信ずる。然るに其目的が何であるかと四方を眺めると唯だ途方に暮れる許りである。人は快樂を樂しむように出来て居るのに苦痛に遭ふ。智識を求るに知ることは難い。人類進歩の爲め盡さんとすれば、其盡力は八方より妨げられる、而して尤も世の爲めに盡し得べき力ある人は却て早世する。快樂も智識も事業も果して人間の目的ではないのであるか。若し此外に目的とすべきものなくば人の本能天性は人を欺くもので、人間は無意味に世に生存することゝなる。然しながら若し此世を以て品性の修練所と見做さんか、萬事の説明は始めて叶ふことゝなる。人は此世に於て相當の快樂、智識、事業を有するので、未來に於て尙一層發展するであらうといふ希望を起し得るやうになつて居る、而して人の進歩を妨げる苦痛疑惑、挫折等畢竟將來の爲め品性を陶冶するの具と認め得ることになる。

人の心の鏡には、ひたすら憂苦とうつることゝも、
愛の光に照しなば、喜悅の賜としもかゝやくべし。

(アラウニク)

【四四】

基督教徒は他の理由よりして神を信じ、神が世を攝理することを信ずるものであるが以上克己苦痛の問題を考へても亦た有神説に歸着するのであつて、此く何れより考へても自分の信仰の正しきことを觀るにつけ、愈々其信仰の主義を奉じて世を渡るやう覺悟するのである。以上論じたる處を約めると此うである。生命は人の目的である、然るに人は死の垢しよを有して人生の旅を初めるのであるから、先づ其れを去らねば其本性を發展する譯に行かぬ。其處で基督教倫理では悔悟、克己、及我意を棄てるといふことが第一の順序になる。處で其れが發端であるといふ事が抑も、其れが目的ではなく手段であるといふ證據なので、目的は畢竟圓滿の生命といふ事なので、悔悟克己等は之に對する消極的の手段方法に過ぎない。

且つや此手段の必要と此目的の高遠なる事とは充分心に銘すべきもので之を忘れると餘りに急いで早く目的を達することにのみ注目し一切手段の方を顧みないやうになる。今日随分此弊がある。人は圓滿の生命といふ最終の目的を云々するが之を達する手段としては少くも幾分かは禁慾主義を實行せねばならぬことを思はぬ。禁慾主義といへば直ちに古代の極端なる例を聯想して今日の時勢に適せぬものと爲し之と共に鍛鍊克己といふ凜たる精神をも看過して仕舞ふ。然し此精神は決して一國一時代のものではなく、眞正なる人間の生涯には缺くべからざる要素である。成程時代により人に

よりて其發現の様は異なるであらう。或は燭臺に點した燈火の如く人目に觸れる克己もあらう。或は顔を洗ひ首に膏を塗りて外には克己の姿を見せず隠れて密かに禁慾する事もあらう。然しながら其精神は同一である。而して罪ある世に於ては此精神なくては逆も生命に入ることには出来ないのである。

之と同時に注意すべきは吾人の目的たる所謂生命とは何であるかを能く了解して克己禁慾の應用を誤らぬやうにすることである。生命とは來世と共に現生をも意味するのである。其れであるから基督教會の過去に於て折に觸れて誤解したる如く、現生とは禁慾痛悔を爲して來生の準備を行ふ所であると考へてはならぬ。基督は正に之に反して『苦を受けて家、兄弟、姉妹、母子、女、田畑を失ふものは此世に於て百倍を受くべし』と約し給ふた。信徒は有形の財寶を失ふも無形心靈の財寶を之に代へて受け、損益相償ふて餘りあるものである。然れば基督教の使命は單に基督を萬人に宣べ傳ふるにあらずして、人生一切の活動即ち其科學も、哲學も文學も技術も、社會も政治も悉く之を導ひて基督に歸せしむるに在る。故に基督教の禁慾は此精神に適はねばならぬ。即ち人生百般の責務を辭して隱遁するにあらずして、志操堅確物慾の誘惑に超然として其責務を果すもので無ければならぬ。今や時代の風潮は禁慾主義の流行ではないが或少數の人は痛悔克己忍苦の生涯に身を委ね而かも世の趨勢に反抗するところよ

り、其生活の模範を上古又は中古の教會に於ける禁慾生活に求むる者があるので、此注意は今日にも必要が無いとは謂へぬ。此かる人は宜しく記憶すべきである。禁慾主義の崇拜されたる上古中古の時代は大なる長所あると共に又大なる短所ありしことを。然れば如何程吾人は其勇猛心を見て奮起することあるも、今日一層廣き人生觀を有する吾人は古人の言行の當否を考査して然る後に之に倣ふべきものであると信ずる。

第四章 信仰と希望

以上基督教徒の品性の反面即ち此品性には罪があつてはならぬといふ如く、有つてならぬものを論じたが、今より其正面に移り、此品性中には果して如何なるものが存するかを論ずることにする。初代基督教會の道德論者等がいよいよ基督教倫理を組織立て、説くやうになつた時、彼等は希臘哲學者の説に倣つて所謂四本徳即ち慎重、公義、廉節、剛毅の四徳を立て、之に後年神學的徳と稱せらるるに至りたる基督教特有の三徳即ち信仰と希望と愛とを加へて七本徳を立て、品性行爲の分類を行つた。七とは聖數なりなごいふ事は今日感心する人も寡かるべけれど、此分類法は古くもあり又便利なるところもあれば、吾人も之に據ることとする。或は前の四徳を男性的といひ、後

の三徳を女性的なりと稱する人もある。此れは幾分當つてをる所もあるが、一步を進めて基督教は男性的の品性を貶して女性的の品性に重を置く論する人ならば、其は甚しき謬論である。人間の品性を完備圓滿にしたのが基督教なのである。基督教以前の文明は女性の品性を充分認めないので、其文明の理想には勢ひ女性の徳を缺くこととなり、隨て其道徳上の發達に偏した所があつたが、基督教は婦人に其正當の地位を與へたので婦人は其固有の感化を社會に及ぼすことが出來て、右の如き缺點を補ふに至つた。此は決して女性的品性を以て男性的品性に代へたのではなく、完全なる人間の品性といふものを初めて世に示したので、剛柔兼備の「新人物」を生ずるに至つたのである。而して基督は親しく之が模範と爲らせ給ふた。パウロ曰く、「男女の別なし、そは汝等皆キリストに在りて一なればなり」と。そこで此品性に對して信望愛は如何なる關係あるやと云に公義とか剛毅とかいふ如く或特種の徳として存するのでなく、心靈上の素質として人格全身に沁み渡り、思想言行一々其影響を受けるといふやうに諸徳の基礎になるのである。

先づ信仰より始めんに、元來人は信仰するやうに生れて居る。人は日々大抵自ら實驗せざる事實を信じ、親しく試験せざる人を信用して暮して居るのである。吾人は見聞により道理によりて世を渡ると思ふけれど實際は信仰で生活して居るので唯其れが本

能習慣であるから氣が附かないまでいある。故に宗教上の信仰といへばとて唯此日々の信仰を擴げたままでいある。希伯來書には之を「望むところを疑はず、視ざるところを憑據とするものなり」と解釋してあるが、其引照したる實例を見ると此信仰は實行的の信仰といふのである。それで信仰とは唯だ或事物を信するといふ如き智力だけの働ではないので（信すべき理由があつて信するのは言ふ迄もないが）、確信するところから進んで事を行ひ、此くなるべしと信じて敢て斷行するといふ實行的の信仰信任であつて、要するに世界を心靈的なりと信することである。

然れば信仰の根本に溯ると其れは唯物主義と正反對になる。今日理論上唯物説を唱ふる人は少ないが實際上唯物主義で生活する人は案外に多い。吾人の心は兎角物質進化及び物質を實用することに主として占領せらるゝ傾向があるので、自ら心靈界の事を視る力が弱くなり勝ちである。然れば所謂「肉によりて生活する」といふ俗物の外に、今日其言行は不道徳ならざる迄も非心靈的なる人物寡からざる譯にして、世の風潮は大に此等の人に感化されてをる。然れば今日信仰を興すには、管に基督教特有の教理を信するの信仰を興すのみならず、今一層根本的の信仰を要する。即ち進化とは創造の一方に過ぎずして、之が爲め創造主を要せぬといふ道理なきこと、機關は其何たるを問はず心靈の用に供する機械にして、人の意志に使はるゝ、神經腦髓も、人を警醒

懲罰する地震疫病も此點に於て同一なることを記憶すべきである。信仰によりて人は唯物論者が視る能はざる神の天地六合に通在し給ふことを視るのである。而して基督教徒は一步を進めて此神を父と信するのである。是は山上の垂訓の主意である。曰く『汝等の在天の父の完きが如く完くなるべし』、曰く、『密かに視給ふ天の父は陽に報い給ふべし』、曰く、『汝等の在天の父は願はざる前に汝等の必要物を知り給ふ』、曰く、『此の如く祈るべし天に任す我等の父よ』と。

且つや此は唯だ耶蘇基督が言にて教へ給ひし而已ならずして自ら實行して人に示させ給ふたところである。彼は一生涯父の前に在つて過させ給ふた。曰く、『我は我父の事を行はざるべからず』、曰く、『我れ獨りあるにあらず、父我と俱に在るなり』、曰く、『義しき父よ、世は汝を知らざれど我は汝を知る』、曰く、『父よ、我意の任を爲さんとあらず聖旨のまゝに爲させ給へ』、曰く、『父よ彼等を赦し給へ』、曰く、『父よ我靈を聖手に委ね奉る』、曰く、『我れ我父の許に昇り行く』と。働くにも、淋しきにも、祈禱にも、苦にも、臨終の凱歌にも、父在ますとの信念搖かざること山の如く、以て人の完き生涯の模範を萬世に遺させ給ふた。基督が吾人に小兒の如くなれど教へさせ給ふたのも其極意は此れなので、畢竟小兒の如く信頼せよとの教訓である。小兒は父が己を教ふる智識あり、己を保護する力あることを信じ、父は己を愛するが故に此く信頼するは

正當なりと信する。此の如く吾人の天父を信するも憂慮を容るゝ餘地なきまでに全く信すべきである。『信仰薄き者よ汝等何ぞ憂ふるや、汝等の天父は凡て此等の物の必要なることを知り給へり』。

されば基督は只一概に信仰を命じ給ふのみかと謂ふに、彼は道理に訴へて之を命じ給ふてをる。先づ彼は傳道の初めに於て世界の美と順應に訴へ、又人の道徳性を證據として論じ給ふた。或は『野の百合花を看よ！ソロモンの榮華の極の時だに其裝此花の一に及ばざりき』といひ、『鴉を思へ……天父は之を養ひ給ふなり』と説き、又は『汝等惡き者なるに善き賜を其子に與ふるを知る、まして天に在る父は求むる者に善物を授け給はざらんや』と論じ、而して終に人間に信なくば憐むべき無力の者なることを示して此議論の根據と爲させ給ふた、『汝等の中誰か思ひ煩ひて生命を寸陰も延べ得んや』と。人は造られたれば造りし者に信頼して立つこそ道理なれとの意である。

傳道の晩年選抜訓練せる弟子に對し、基督は己れの教訓行動を指して之を天父の啓示に外ならずと説かせ給ふた。『我は父に在り、父我に在り、我を視し者は父を視しなり』。次で彼は聖靈が來つて彼の教訓行動の深意を一層明白に教ふる時あるべきことを宣べさせられて、『彼れ我より受けて汝等に之を示すべし』と宣ふた。

此結果として基督教會が信する信仰箇條即ち教會の教理といふものが生じた。此等の

【五二】
 信條は種々の證據の上に立つもので、理屈もあれば又所謂「靈の證」といふ心靈上の悟りもあるが、今は此證據の當否如何を論ずるのでなく、此證據を信するが爲め一種の信仰的品性が作られるといふのが研究の主意なのである。扱て此點に於て古人の如く信仰と服従若くは信仰を實行とを分離して考ふる弊に陥つてはならぬ。信仰を理論上から謂へば服従とは別であるが、實際上信仰は信仰する人が信仰するのであるから、信すればその信すべし神に従ふべきもので、即ち信仰が實行と爲つて來るべきものである。其れで吾人が活ける信仰と謂ふときには、神の愛を心に感じ、神の要め給ふところを合點して快く之に應じ奉るといふ風の信仰の意味なので、今日實際自分は神意に従つて生活しつゝある故に明日も神の愛護あるべしと信するといふのが眞の信仰である。然ればこそ人は信仰によりて義とせらるると稱するのである。信仰によりて義とせらるるとは吾人は罪ある者故、自力のみで儀式を行ひ又は善行を積んでも神の前に義人聖徒と見て貰ふことは出來ない、しかし若し神が父の愛を以て吾人の罪の爲めに贖と爲らせ給ふたといふことを信じ此贖こそ「我等を聖めんとする神の聖意である」と活ける信仰を以て信じ、進んで其聖旨に應じ奉るならば、其れで直ちに清淨無垢罪を再び犯さぬ義人となるのではないが神は始を見て終を察し給ふから、吾人が最後には聖めつくさるべきことを豫想して、神の前に義人として貰へるといふのである。吾人は自

己の罪を全滅することは出來ないが、神が吾人の爲めに之を滅さんとの意を有し給ふことを信じ、所謂「神に向ひては信」じて世を渡るのである。此く考へると信仰によりて義とせらるるといふ有名なる句の極意は信仰と實行との別を説いたのでなく、人間の義とせらるゝは自力でなく神の他力であるといふことを主張したのである。故に義とせらるゝ信仰とは、人が神と一致することを何よりも重要視し、之を我が力の源、安心の秘訣と考へ、又完く神を悟りて神の如くなる多福なる未來に對する豫約と之を信することとを謂ふのである。かるが故に信仰は基督教徒の生命の根本基礎であつて、以上述べたる罪との奮闘にも、是より論せんとする諸徳を修むるにも、信仰なくては一切叶はぬことである。高德の聖徒に存すべき理想的の信仰は以上述べたる如き者であるが、此くまでに厚く無くとも尙ほ信仰たるを失はないといふ事は記憶すべきである。厚き信仰を有せんとせば、之を得る爲めには申迄もなく、之を維持する爲めにも大に奮發努力を要するのであるが、大抵の人は此奮發心に冷熱があるし、其れに信仰の鍛錬には思難辛苦に遭ふやうになつてをるので、此試鍊に優等で及第するといふ人も稀である。其れで聖徒の完全なる信仰は理想たるべきは申迄もない其處までに至らずとも信仰は信仰であつて、其結ぶ行も信仰の結べる果實と認むべきものである。プラウニングの詩に左の如き句がある。

疑全身にめぐるとも
疑ふとてもさまたげじ

生命の實だに結び得ば

【五四】

天使の長のミカエルが
足のうらにて蜿くるを
泰然と神色自若たるがごと

足にて大蛇をふみおさへ
おぼゆるがゆわに
信仰とはとことばに
ふみて黙さすことにこそあれ

ブラウニングが此く詠せし人は聖書に所謂「國を求むる人」でもなく、「世は彼等を置くに堪へず」といふ如き篤き信の聖徒でもなく、殉教者を出すべき熱切なる信仰時代の事でない。然し今日の如く哲學學術上より種々の疑惑を生じて古人が肉體上の苦痛を受けし如く精神上の迫害に苦しむ時代に於ては、此詩人の語は大に同意するところがある。此疑惑に襲はれながらの信仰でも、少くとも望むところに達せんとして憧憬れるといふ誠意が貫いてをるから、信仰に相違はないので、此憧憬よりして結局安心立命が来り、而して聖ヤコブの所謂「汝の行によりて汝の信仰を示せ」といふ要求を満足することが出来るのである。

此くて議論の筋が自ら希望に移つて来る。希望は何時でも基督教徒の品性に重要である

るが、今日は尙更ら重要である。何となれば今日盛に行はる、唯物主義が人生問題の解釋を試みると、兎角失敗するか、又は人に満足を與へないで、其結果人をして人世は全然悪なりとの悲觀に陥らしめ、哲學者は自殺を正當の處世法と論斷し、自らは之を實行せざれど他人には之を勧め、俗物は絶望の極終に此勸告を往々實行するに至るといふ様であるからである。此空氣は今日恐るべきまでに濃厚であるから、希望は大に必要である。何となれば信仰が唯物主義の反面である如く、希望は悲觀の反面であるからである信仰と同じく、希望も人の天性であつて、少年は希望心が旺んである。然れど此生來の希望心は人生の經驗を積んで患難に遭ふと衰へ行くもの故、之を聖靈の力で基督教的の希望に改造せねばならぬ。「患難は忍耐を生じ、忍耐は鍊達を生じ、鍊達は希望を生じ」と聖パウロは言ふた。患難が相續いて襲ひ来ると妙齡青春の快活は亡せて、先づ心に起るは奮慨の念である。然れど若し吾人にして患難は神意に出づとの信仰にあらば、謹んで之を迎へるので忍耐を生ずる。忍耐を生ずるから品性が鍛鍊されて見識が深くなる。見識が深くなつて眼光が事物の背面に徹するので、詩篇記者と同じく、「汝の律法を學ばんが爲め患難に遭ひしは我に善かりき」と叫ぶやうになる。一たび此安心を得るや、患難の度數の加はる丈け愈々悟るところが深く患難を神意として甘受するときは必ず我祝福となり患難なくては夢にも見がたき心靈上の妙趣を味

ひ得るといふことを認むるやうになる。此くなると一見厭ふべく、希望を滅ぼすの觀ある患難も實は其反對にして希望の眞友たるが故に、患難を憂ふる心は消へ行く譯である。過去に於て患難は變装せる祝福であつたとすれば、此天地に道理の存する限り、縦し今後悲痛辛苦が我を襲ふとも、其は同じく我に恩恵を與ふる機械たるに相違なしと確信して、將來に對して希望を有することが出来るのである。即ち長年月の忍耐で我は試鍊されて、其試鍊よりして希望は生れ出るのである。

然れば基督教的希望は、かの妙齡青春の子女が何の理由かは知らず唯だ天性のまゝ輕快にして樂天的なるとは異にして、心靈上の實驗信仰に基き、希望を有すべきものなるが故に希望を有するのであつて、「我れ幼かりしが今は老いたり、然れど未だ嘗て我人の棄てらるゝを見たることなき」が故に、希望をつゞけるのである。此く希望の發展は天地人生を信仰の眼を以て觀、所謂「視へざる神を視る如くに忍ぶ」といふ心を以て世を渡るに基くものであるが、希望以外の基督教的性徳でも矢張り此信仰からして發展するのである。

以上は希望の生れ出づる道行を説いたのであるが、希望が實際に働くところを見ると、將來を確信するといふ希望は實に一切進歩の基礎であつて、其重要なることは信仰に譲らないのである。先づ一個人の心靈上の實驗に訴へて見よう。罪と闘ふて毫も之に

勝つことが出来ないように感ずる。年々歳々同一の誘惑を防いで又同一の誘惑に遭ふ。徳を修めんとて日々に勵めども徳の修らざるは我歎きにあらずや。然れど此の難境に在つて望を失はず、不屈不撓奮戦するが成功の唯一の秘訣である。宛がら寄せては返す濱の波は、寸分の陸地を占領し得ざるが如く見ゆるも、茫々たる大海は其後に在りて、どこしへに大地の岸を洗ひ、知らず識らずの裡に灣を作り、入江を成して其領地を擴むる如くである。

且つ人には老衰の痛苦がある。精神衰へ、身體弱り、墓の影身を襲ひ來るとき、人は自ら陰鬱となるのみならず、周圍の人にも悲慘の氣を移すものである。マシユー、アーノールドは之を詠じて沈鬱を極めたが、基督教的希望を有するブラウニングは正に之に反して實に壯快なる凱歌を奏して居る。

いざ我とともに年老いよかし！

人生の妙境は未來に在り、

今の生は其いとぐちにこそ。

『我は全部を経營せり、

青年は其半のみ、神を信せよ、

全般を看よ、おそるゝ勿れ。』

神は此く宣はせ給ふ。

我等の時は此神の手に在るものを。

まことに以上述べたるが如き信仰的の見解は齡の進むと共に明白になるから、老年の人こそ希望の基礎が尤も強固なる譯であつて、彼は聖パウロと共に、『我等が信仰の始よりも今は尙ほ教に近し』と言ひ得るのである。

此くて基督教の希望の絶頂に自ら達するのである、即ち『義人は死ぬる時に希望あり』といふことである。吾人は前已に基督教を来世主義なりと稱して攻撃する人に答へて、基督教の永生とは現生に今始まるもので、隨て其永生は現生日目の出来事に對して現はれるものであることを論じたが、此く言へばとて人間の責務は此世限りで來世に一切關係がないとの意ではない。却つて基督教的生命は未來に大發展を爲す望がある故に現世に於て基督教の特有の生活を爲すのである。アリストートルは『死は終なるが故に萬物中の至慘なるものなり』と曰ふたが、基督教徒は死を終と信じないから、其言行が希臘人と全く異なるのである。アリストートル流の希臘人は現世に於て一切の發達を求めし、基督教徒は『永遠を有す』るが故に、其生活は此より割り出すのである。故に基督教徒は死に臨んで、今や不朽の生命に入ると信じて希望の最高點に達する。彼は後を顧みずして前途を望むが故に、終まで進歩的である。

「義人は死ぬるとき希望あり」

以上は個人の事であるが、基督教徒は又社會團體の生活を爲すものであつて、此生活にも希望は實に缺くべからざるものである。患難は個人を襲ふのみならずして社會をも侵すものであるが、此かる際に社會を救ふものが希望の人であることは、イスラエルの歴史を見れば甚だ明白である。上下數千年イスラエル國民は國家隆興の時を俟ち望んだが、内は人心の墮落と、外は強國の壓制によつて此希望は幾度か消へ失せんとした。此かる秋に際して豫言者が相續いで起つて國民の希望を復活せしめた。彼等は罪を責め、懲罰を宣べ、悔改を勧めたが、同時に必ず希望を興へた。此希望は國運がいよいよ窮するほど明瞭になつて來て、終には神の約束が必ず成就するといふ斷言を見るに至つた。然れば後年此約束の成遂して救主の降臨しますや、之を見聞するの耳目ある人々は直ちに、『諸ての豫言者は彼の爲めに證をなせり』と斷言し得たほどである。今日過去の歴史を顧みて之を判斷し得る吾人は、希望の人たる豫言者等は其當時皆嘲罵迫害を受けたけれども、眞理は彼等の味方であつたが爲め、終に反對に勝つて今日では豫言者が正しかつたと誰も承服することを見るのである。

基督教會でも之と同一の事實がある。初代の迫害の爲めに全滅するかと思はれたこともある。アリウス宗の爲めに根本の教理が危くされたこともある。マホメット教徒が

襲來して教會が諸國から放逐されたこともある。暗黒野蠻の中世紀の初めに於ては教職も信徒も共に甚しく道德の壊亂したこともあつた。上セルサスより下ヴォルテアに至るまで教會が議論を以て攻撃されたことは數限りがない。況んや内には宗派の紛争屢々起り、終には分裂の悲しむべき事實を見るに至つた。然るに古に「天下に當れるアタナシウス」のありし如く、上下一千九百年何れの世に於ても、四面挫折の時に當り、「我は世の終まで汝等と俱に在るなり」、「陰府の門は之に勝つこと能はず」との救主の約束を確信し、毅然として萬艱の中に立ち、偉大なる希望を以て其同胞を鼓吹せる信仰の人の缺けたる例はない。今日外國諸傳道地に於ては正に此と同一の希望確信を以て同一の困難辛苦の裡に教會は擴められつつあるのである。

以上の如くなるを以て、個人にも社會にも道理は同一である。個人の希望の基礎となるものは患難を心靈鍛鍊の機械と見ることであるが、基督教會の歴史を觀ても此人生觀の正當なることが認められる。

終りに、希望の他の方面即ち基督教的博愛事業を行ふに必要な一個の勢力たることにつき一言したい。前に傳道の事を言ふたが、傳道とは唯だ基督教を宣傳するといふ而已でなく、其精神は今一層廣きものである。苟くも眞面目に基督教を信する人は、教會の傳道的精神を有すべきもので、基督教の智識か習慣か安心を人に傳へるよう或

は智慧なり、人情なり、手足なりを以て各他人の爲めに働くべき義務があることを感ぜざるを得ない。然るに此かる事業にかかつて見て尤も困難を感ずるのは失望し勝ちになることである。無識者は其儘にしていたがり、罪人は罪を改めない、悔改者は再び墮落し、悲む者は慰を受けず、世人は冷淡にして我奮發は挫けんとする、而して社會人心に深く根を下した罪惡は四方八面より改良進歩の妨害を爲す。此盤根錯節に當つて堅忍不拔の精神を有するには希望がなくて叶ふことではない。否希望は常に我を堅忍不拔ならしむみのならず、我れ不拔なるが故に他人を鼓舞し、失望せる者に活氣を炎やし、此くて困難の下に堅忍不拔ならざりしならば成し遂げ得まじき偉業を成就するに至るのである。

第五章 愛

愛は第三の神學的の徳であつて、直接に神を對象として働く徳である。神を愛する愛と、人を愛する愛とは互に關係が深いが、愛神がなくては愛人の基礎か確かでない。成程發達の順序からいふと、眼に視ゆる人を愛して愛を學び、進んで視ざる神を愛するに至るのであるから、愛人が先にはなるが、道理の上から謂ふと愛神が愛人の先に立つのである。

蓋し基督教が授くる豊かなる生命とは畢竟するに愛の生命である。即ち解放され、開發され、擴張されたる愛の生命に外ならない。生命を保つには信仰と希望の大切なるは言も更なり、其他の諸徳も必要であるが、生命其者の粹は何ぞといふに、愛である。「我等は愛するが故に死より生に移りたることを知れり」と聖書は教へる。其處で愛の意味を充分誤りなく曉る必要がある。先づ愛には唯一種あるのみで、肉的和靈的の二種がないといふことを知らねばならぬ。親子の愛、夫婦の愛、朋友の愛、神の愛、種々の愛あるやうなれど詮ずれば同一種の愛である。愛に二種ありなごいふ説は世に罪のため腐敗して、屢々其元の姿の失するまでに腐敗したる情に、愛といふ神聖の名を附して之を潰したところより生ずるのであつて、かく墮落した愛を査べて見ると、必ず愛其者に答はなく、答は罪にあるので、罪が愛を殺したのである。

愛には唯一種あるのみとして、さて其果して何物なるやを知るには、普通の愛を査べると解る。愛とは他人を慕ひ、先方よりして又自分を慕ひくれるやうに願ふ情である。勿論先方が必しも自分を慕つてくれないことも往々あるので、尤も高尚なる愛にして應答を受けなかつたものは少くない。併しかく應答かなかつたのは、我は先方を愛し先方からも愛してもらひたいといふ情が骨髓となつてをる愛が完結しなかつたものと謂はなくてはならぬ。此事は神學上關係のあることであつて記憶を要する。何となれ

ば、基督教徒のうち、神は無應答の愛あるべきものなど論ずる人がある故である。かのグヨン夫人を辯護せんとしてボスエーと議論したるフェネロンは其一人であるが、此かる無私の愛は基督教の教ふる所ではないので、此かる愛はスピノサの宗教の如く人格的の神なく、隨て人の愛に應答する力なき教の説くところである。基督教は然らず、徹頭徹尾愛の宗教にして、愛を以て人格の最上の發表と認むるのである。然らば愛が先方より、應答を求むるが故に利己的かといふに然らずして、反て其れが犠牲獻身として現れざるを得ないのである。「人其友のために生を捐つ、之より大なる愛は無し」。其理由は解らない、解らないが實驗上の事實であつて、愛といへば必ず此の如きものである。而して若し愛が相互に交換されると、犠牲獻身も互に交換されるので彼此互に相與へて相互に人格を利するのである。

人間至上の愛は右の如きものなること、是れ實驗上の事實であるが、吾人は此事實によつて神の愛を解釋するのである。若し人間の解し得る意味に於て神が愛であるならば、神は己を人に與へんと望み、又人より愛を以て應へんことを望ませ給ふべきであるが、其應答とは人が己を神に獻ぐることに相違はない。それで基督教の信仰は此うである。神は愛であるから人間の真正なる愛の源となり之を維持するものである。人間の愛は人を愛すところから初めるけれども結局神を愛せなければ満足しない。尤も

人間が愛すべきものと信ずる諸のものは神の外そとにないので、却て其中に含まれてゐるのである。而して人間の愛は人間一切の能力を司つて之を使役する如く、人が神を愛するにも心身悉く献げて神を愛するようにせねばならぬ。我情はいふまでもなく、此智も意も全く神を愛する愛に支配され、一言一行此愛の發現となるべきものである。此境まで達するのが基督教生命の不斷常住の目的である。

論者問ふて曰く、「汝は何故神の愛たることを信ずるか。若し神にして愛ならば諸問題を解釋するは容易であるが、之に反對の證據と思はるゝものゝあるに、果して其は信すべきことであるか」と。元來吾人は已に神の愛を信する者が如何に世を渡るべきやを論じてゐるのであるから、此疑問に答へるのは少しく横道に入ることになるが、基督教徒が此信仰を抱くのは唯感情に制せられての事ではなく堂々たる宇宙觀に基くのであるといふ事を示さんため、吾人の答辨の筋道を一言して置いても不可はないかと思ふ。

第一の理由は、肉を取りて降生したる神なるイエス、キリストが神の愛なることを宣言啓示し給ひし故信するのである。基督教の證據は千九百年間積んで山の如くであるが、證する處神は愛なりといふ事を證するものである。第二、人の愛を解剖して見ると、此信仰が強くなる。生れて初めて現はれ、老後までも存する人の根本性は愛であつて、

愛は人の最強の動機、至深の需要であり、之を満足せねば最後の安心は得られない。されば世には、人格とは交通を求むる力であると解釋する人さへある。交通を求むるは無論愛を求むる力である。而して此力が増すだけ品性が高くなるのであつて、高尚なる人格とは此愛が其理性道徳を支配する人のことである。故に愛は人格の基礎でもあり冕でもある。されば人間の人格といふものがあるから人格的の神があると論ずるとすれば、其神は愛であると自然に論断することになる。

且つやプラトーン、プロタイナスよりオウガスチン、ダンテに至るまで古來愛を尤も深く研究したる人は、愛は結局愛すべき無限の者を要し、無限の應答なくては不満に感じ、且利己の心を除きて眞實に限りある人間を愛するときは、自から人間以上の愛の源たる者と限なく交りたしとの望を發し來り、オウガスチンと同じく、「我等は主に在りて息ふまで安息なし」と叫ばざるを得ざることを認めたのである。其處で、道理の有る世界には物に目的と手段があるべきものであるから、此くも深く一般に人心に具はつてゐる本能があれば之を満足すべき者があるべき筈である。此はアリストートルも同意した議論である。或人は尙一步を進めて論ずるであらう。愛といふものは一種不思議の力があつて、其愛する無限の者が實在することを自分で確認するから、他の證據を要せぬと、そう論ずる人もあらう。更に又天地を觀れば動物人間に幸福を與ふべ

【六六】
 きもの一も具はらぬはなく、山川花鳥の美、人の心を樂しましむべきものが多い。此等も神の愛たる大なる證據をなり、キリストの啓示を信せしむべき理由となるのである。然るに茲に罪と苦といふ所謂 ^{イワン} 惡の存在の問題が起つて来る。或人は此暗黒なる世界の方面が光明の方面よりも多いと感じて種々の悲觀説を立てる。惡の問題の充分なる解釋は今日の智識の程度に於ては人間に出来兼ねる。然し出来兼ねるから基督教徒は此難題に基いて自ら結論をなすこともせねば、他人にも結論をしてもらひたくないのである。吾人が尤もよく知れる人性につきて見れば、苦と罪とは別物であつて、罪の存在する世に於ては苦は随分種々の用を爲すもので一概に之を惡と貶することは出来ぬ。苦は罪を防ぎ、淨め、罰するもので、我等は此かる性質のものと苦を觀ればこそ、愛心よりして却て苦を人に與へる事がある。然れば罪の存する世界にありては、苦の在ることは神の愛を證據だでこそすれ、其無慈悲を示すものにはならない。かくいふも動物界の苦痛問題の解釋は附かないのみならず、或人は動物が百千萬年の昔より今日迄苦を受け、しかも其苦が人間界に於ける如く動物を善に導くといふ用もなきぬところより、却て之を大難題と考へるのである。之に就てまづ記憶すべきは、吾人は動物の身になつて苦を實驗することは出来ぬから、外から想像するだけであつて、動物の實際感する苦は人の想ふ如き甚しきものでないと思はれることの少からぬこと

である。且つ動物の心中に立入つて見ることが出来れば、或は苦が何か用をなして居るかも知れないが、其れは出来ぬ。動物の存在、其運命、何のために動物が造られたかといふ事は吾人の解釋し得ぬ奧義である。故にテニソンの所謂

掠めうばひて

齒も爪も

紅に染みたる

自然界

といふを根據として眞面目な議論を立てることは到底まだ叶はぬことである。しかするは想像と事實とを混同するものである。人の検査し得る範圍に於ては、苦は愛と矛盾しない。故に人の検査し得ざる範圍に於て二者が矛盾すると斷言する權利がない。此は既に陳べた如くである。

罪に至つては愛の反對であるから苦とは同一の談でないが、此とても想像と智識との區別を立てねばならぬ。吾人は罪の發端も終局も知らないで、知るものは唯だ己と他人とに今罪が現はれて居ることである。然るに一方には此現はれたる罪が必ず善と愛とに反對するが、又他方に於ては善と愛とが罪を征伏せんとして絶えず働いてをる。且つや神が罪人の世に存在するを許し給ふが故に神は罪を許し給ふとはいはざるを得ないにしても、罪を犯すものは吾等人間であつて、罪を犯すときには我等が神に背くのであると感するのである。然るに我等人間が主として責任あり、又神の嘉し給はぬ

【六八】
 この明かなる罪を擧げて之を神が愛でないといふ論の證據に用ふるは不道理のことである。成程罪の存在よりして神の智慧又は力の不完全を難することは出来ようが、それには罪の發端結末をしらねばならないが、それは吾人の知らぬ所であるから、知らぬ事を基にして議論を立てる譯には行かぬ。

要之、罪と苦とは充分解らないところが多いから、世界に現はれたる神の愛の確かなる證據を消す程の力がないといふのが基督教の立場である。此は神の愛と人の愛とは別物であつて、人の愛に外れたことも神の愛には適ふことがあるかもしれんといふ危い説とは全く別の論である。此かる説は不可知論であつて其結果は有神論を傷ふことになる。吾人は正に之に反して、愛は何時でも何處でも、同一であるから人の愛よりして神の愛を推すことが出来ると主張するのである。さて我を愛すると確信する人が時に自分に合點の行かぬ行をなすとき、我は大抵彼を信任して其爲すがまゝにし、徐ろに其説明を待つのである。況んや若し吾人が了解する事實に基いて一たび神の愛を確信したる以上は、縦し一見愛に反したりと思はるゝ事實があつて、其を充分吾人が了解し得ないとしても、其底には神の愛が存してをると信じ得べきであるが、基督教徒は正に其の如くするのである。世人は往々此見解をば自説に不便利なる事實に眼を蔽ふ呑氣なる樂天主教であると誤解して、俗間に行はるゝ雜誌著書に往々之を冷笑す

るものがあるが、此は事實の正反對である。右の如き見解を下すには勿論信仰を要するが、信仰とは世界の悲惨痛苦を見ぬようするのではなく、物の眞假を辨別し、其外觀に欺かれずして其奥意を悟ることである。元來罪のために人の智力は鈍れるものであるが、信仰があると此罪の力を壓へるから智力が敏活になる。人は智力で種々の發見研究をなしたのを見て、罪は智力の鋭鈍に關係がないと思ふけれど、それは學術數理等比較的罪の影響を受けないものゝ事で、神の存在性質及神と人との關係などいふものを考へるには、智力は罪のために大に鈍くされて思考力を殺がれるのである。我等は神に對して罪を犯し、神の我等に對する關係も之がために變つてをるのであるのに、其神を自ら批評してをるのである。罪が我等の靈の眼を暗ましてをる事を棚に上げて議論をしては必ず誤らざるを得ないので、世人は動もすれば誤に陥り、信仰上の問題も數學の問題も同じく公平に判断が出来ると考へるのが、抑も大なる心得違である。罪人が神を批評するのは、宛かも病氣で心が朦朧としてをる病人が醫師を批評することさきものである。

右の如く少々横道に入つて議論をしたのは、基督教徒の立場は種々難題のあるのをよゝい加減に誤魔化して置いて無理に信するのでなく、堅實なる理由に基くのであることを一言したいと思ふたからである。さて本題に立歸つて實行上の議論に移るが、基督

【七〇】
 教的生命は神と人とを愛することに外ならない。其れで人は人を愛するから始めて神を愛するに至るのであるが、神を愛するに至らねば純然たる基督教徒とはいへない。神を愛するは常に基督教的生命の基本たるのみならず、其他の眞の愛に必要欠くべからざるものである。其理由は第一、既に陳べたる如く、凡そ眞正の愛といへば、愛する人は充分自ら知らずとも、詮する處永遠限なき者を愛することになるのである。第二、神を愛する心と共に働かずば、人間が他人を愛する心は兎角利己主義に陥るを免れない。若し我愛を活きたる愛とし、又益々擴かり行くようにしたいと思はば、良心の咎なく、善道に合ふものにならなくてはならないが、此は神を愛する心と共に働くようにせねばならぬといふと同一である。第三、只肉親の人々を愛するのみに非ずして廣く一般世人を愛するには、神を愛する心なくしてはなかなか難い。成程ホイットマンの説の如く多人數を見れば我心熱するといふことはあるが、かかる漠然たる感情は進んで人を愛するといふ處までは働かぬ。或は又コントの議論の如く、神を信せずとも人類のために盡すといふ心も生じないでもあるまいが、かかる心は論者は承知しないが、本はといへば基督教から出たもので、善を愛する心とは畢竟神を愛する心といふに歸するのである。更に又難儀なることは、論者の如き説は普通一般の人には空漠過ぎて之を感奮興起せむしるに足らぬ。實際世人は蟲の好かぬ人を愛さない。況ん

や其敵に於てをや。又況んや我恩に背く人に於てをや、然るに基督教はかかる人を愛せよと命するが、如何にしてさることを爲し得るようになるかといふに、神は何人たるに關らず之を愛し給ふものなれば、神を愛する以上は神の愛し給ふ人も愛せねばならぬと感じ、此心よりして我好まぬ人、憎しと思ふ人までも、心を取直して愛する氣になるのである。故に友人にせよ、敵にせよ、眞實に人を愛するには先づ神を愛する心がなくてはならない。
 然らば我等は如何にして神を愛するようになり得べきか。根本をいふと、先づ天より與へられなければならぬ。「我等彼を愛するは彼れ先づ我等を愛し給ひたればなり」とあるが如くである。然れど此賜を受くるには我等に於て之を願ねばならぬ。如何にせば之を切望する念が生ずるであらうか。其れは人間の事を考へると解る。我等が他人の美德、長所を見るとそれが慕はれる。慕はれるから始終之を考へ、之を思ひめぐらす。其處で之を愛する愛がまして来る。神に於ても其の如くであつて、神が人に訴へ給ふ方法は千種萬様であるが、我等は之を默考して、「思ひ續くるほどに心燃わぬ」といふところ迄行かねばならぬ。即ち神の示現を篤と考へるといふことが神を愛するに至る道である。神の示現は様々である。天地萬物の美妙、人間相互の愛、神の遣り給ひしものとして生活の樂など皆是れである。且つ神子降生と贖罪といふものがあつて我等

の心霊に訴へる。更に又隠れたる恩恵、密かなる警戒、應へられたる祈禱、心中に受くる慰藉鼓吹もある。此等一切のものが何時しか合同して大に我等の心を動かす時もあるらうが、大抵は其中の一二が殊に我等を感動せしむるもの故、先づ其れを沈思黙考する方がよいと思ふ。勿論神子降生と贖罪に於て現はれたる神の愛を充分悟るときは此れほど有力なる方法はないが、其れを充分悟るといふことは大抵吾人の信仰の順序上始めに出来ないことで、祈禱文に『主は我等を作り、我等を護り、此世の恩恵をさづけ』と先づ述べて、然る後『世を贖ひ給ひし』云々と言ふてあるのが、神の愛を悟る順序かと思はれる。されば神を愛せんとて其造り給へる世界を捨てるといふのは甚しき誤である。成程古來高德の禁慾家神秘者等で此主義を唱へ、自己の目的を達した者もあるのみならず、人によつては右眼を抉り棄てよとある如く、此くする必要があるかも知れないが、結局これは神の造り給へる世と、人の汚した世とを混合する不完全なる方法であつて、決して一般の通則としてはならぬ。何となれば世界の美、朋友の愛、生存の樂は、人の生命が贖罪によつて發展せば如何なる域に達すべきかを示す目録とも謂ふべきものであつて、最も心靈的の畫家も樂園を描くとせば、日明かに花笑ひ、朋友相擁き、喜び舞ふ様を寫し出すならん。故に世界の善き方面に眼を蔽ふことをせず、却て善き方面を沈思黙考し、之を通して神を觀るようにすると、『世を贖ひ恵を受

くる法を示し、榮光の望をたまはしめ給へる」神の愛を尤もよく悟るようになる。固より罪ある世の習として造物主よりも造られたる物を受する弊がある。其れで禁慾主義の外に修徳の道なしと感ずる人には、ロヨラの所謂造られたるものに冷淡なれ」といふ方針もよいであらうが、之を以て此弊を濟ふべきではないので、寧ろ造られたるものを愛するより進んで造物主を愛するようになり、終に同胞兄弟に於て神を愛し、神に於て同胞を愛するといふ處まで至らねばならないのである。終に臨んで一言するが、此愛には厚薄の差があり、又漸次に發達するものであることを知らねばならぬ。神を熱心に愛したとは何人も願ふ所なれど、聖パウロ、聖ヨハネ、イグナシウス、バーナード、フランシス其他幾多高德の聖人の如き熱愛にはとても企て及ばぬと感ずるかも知らぬ。然かし此かる聖人と雖も一年三百六十五日、いかなる時も、いかなる心の様にて、愛の熱の些かも冷めたることなしといふことはいないので、傳紀を見れば其れがよく知れる。幸にも愛の點に於て何人も企て及ぶものは愛を實行することであつて、此は愛の熱情と別物であるが、しかも大に重要なことである。キリストは宣ふた、『我誠を守るものは我を愛するものなり……我之を愛し己を之に示すべし』と。基督は我等が他人になすことは知らざる裡に基督に之をなすことになること其爲すべき事を教へられたが、我等は之をなして基督の誠を守ることが出

来る。此くするうち知らず識らず我等は進んで更に親密に主を愛することを得るに至るであらうが、其れは主の賜であるから、主が聖旨によつて善しと視給ふ時に分に應じて授けらるるであらう。

我等はさきに神を知らず識らず愛するといふことをいふたが右の如く考へると此邊の主意が悟られる。世には神を信じないで随分人間社會のため献身奉公する仁人義士があるが之を解しかぬる人が少くない。或は之を以て基督教の空氣の中に自ら發生したる美德となす人もあるので、成程或點まではそうも思はれる處もあるが、充分の説明にならないから、人が承服しない。其處で吾人は一步を進めて左の如く論じて無理はないと思ふ。此かる人々は知らず識らず神を愛して居るので、其れが源となつて人間社會のために献身奉公するのである。何となれば彼等は善を愛する力で献身奉公の誠を致すことが出来る。然るに善を愛するとは實は神を愛することになるのである。故に一見して基督教信仰の反對證據になるかと思はるる此事實も解剖して見れば畢竟人間を愛する心は神を愛する心を基礎とせねばならぬといふ原則の一例に過ぎないのである。此かる仁人義士は自ら知らずこそあれ、實は神を愛する愛の中の最大元素とも謂ふべき善を愛する愛を有するので、其れがために人間社會に對する献身の誠も生ずるのである。且つ忘るべからざることは、基督が「汝等我になせるなり」と宜ふたのは憐

れむべき世の人を基督其者であると夢にも思はずして仁愛を行ひたる人に對して宜ふたといふことである。然れば善人仁者にして信者とならぬことを見て、基督教徒は之を遺憾に思ふは尤であるが、其善行を見て解釋に惑ふに及ばない。何となれば己れは明かに神を認めて神を愛し、彼は知らざる裡に神を愛して此く麗はしき生涯を送つたのであるからである。

第六章 本 徳

前章己に述べたる如く、基督教徒の言行の眞の動機は神を愛することであつて、此愛には高下深淺の別がある。即ち「神をおそるゝは智慧の始めなり」といふ舊約の愛神より、「おそれを除く」といふ聖ヨハネの教へたる全き愛神に至るまで、其間種々の段階が存するのである。然し何れも一の大人格を認め、其人格が命ずるところを道徳法として、我がこゝろより之に服従するといふ點は何れも同一である。基督教以前の希臘哲學は道徳法を人格なきものと認め、之を神の律法と稱するは凡俗に道を説く方便であるとしたが、今日此舊思想を却て深遠の道理でもあるかの如く復興せんとする傾向がある。然れど此主義たるや畢竟初代の希臘哲學が世俗の多神信仰と論戦したる反動として發生したのであつて、後世基督教に接觸したる希臘學者の倫理説は大に

宗教的になつて来た。抑も基督教に於ては、神を人格と見るのが最高の見解であると信するのであつて、『自然法』とか『道徳法』とか非人格的の語を用ふるにしても、其れは人格ある神の自由意志の性質状態を便利上意志其物から取離して假りにかく名けるのである。故に基督教倫理の根本には宗教を立て、あるので、我等の生命は活ける人格的の神と活ける親交をなすところに存する。即ち神を愛する愛が生命の根となり、礎となるのである。故にオウガスチンは徳とは愛の發展することであると説いて希臘人の所謂四本徳即ち節制、剛毅、公義、深慮を擧げて此意を説明した。プラトンは初めて人の品行を此四徳に約めたが、此が希臘哲學に入り、終に基督教倫理説にも移つて来た。然るに希臘哲學に於てはこれが自己を本位として立てたる徳となり、自重の變形となつて、公義の徳すらも、人各己れの業を執ることなりとプラトンの『共和國』に解釋してある。然るにオウガスチンは、基督教が此等の四徳の目的の神にあることを教へて大に四徳の品位を高めたと論じてをる。それで彼はかくいふた、此四徳は非常に人を感せしむるものであつて、何人も之を口にしてをるが、余は之に左の如き定義を附したい。節制とは愛せらるゝ神に、愛が全く己を任せること。剛毅とは愛せらるる神の爲に愛が喜びて萬事を忍ぶこと。公義とは愛が愛せらるゝ神のみに事へ、隨て正しく支配すること。深慮とは愛が己れを妨ぐるものと助くるものとの區

別を明察することである。此れがオウガスチンの説である。乃ち基督教徒が深慮、剛毅、公義、廉節を守つて行くのは、其れが道徳に照して正しいからでもなく、其うすれば自己の幸福になるからでもなく、又其れが最大数の最大幸福になるからでもなく、畢竟彼れは神を認め、神に事へて世を渡るからである。彼の生涯の目的は神と相一致することであるが、其れには神の聖きみこゝろと命令に従ふといふことが含んでをる。命令といへば無法無理の事を唯だ命令で道徳法にするといふ事になるから不道理であるなど誤解する人もあるが、神の命令(誠)とはさるものではなく、^{ホリ}聖なる品性、聖なる意志よりして自ら發せざるを得ない命令訓誡といふのである。勿論神の聖と口にはいへど、元來神の性質は充分解し得ないものであるから、神の聖とは何の意か完全には悟れない。然し基督は其生涯に於て、神の聖徳の人間界に現はれ得べき丈けのものを示させ給ふたから、此生涯を研究すると、天上無限の神の聖徳の一端を窺ふことが出来るので、實際上差したる困難はない。然れば四本徳を首として其他の基督教の諸徳は、全く聖なる神と一致せんと願より發する聖品性の發表であるので、人格と人格との活ける關係を指すのである。成程基督教徒は希臘人の語を用ひて、徳を行ひ、善を爲すといひ、又は羅馬人の風に習ひて、責任を果し、義務を盡すなどいふが、其れは彼等の意味と異なつて神を愛する心より

其聖旨を行ふといふ意なのである。無宗教主義の道德論者は神を愛せず、應報を望まずして本務を果すのは難いから高尚なる行爲であると往々論ずるが、成程人間の最後の目的が道德であればそうであらう。然し此は眞の説でない。既に述べた如く、人性全體の要求は生命である、即ち生命の發達、擴張、實現である。道德は此生命をうる一の方法であるし、又生命が活動すると、道德といふ一個の現象は生じて来るが、道德が生命其物ではない。生命其物は神と一致することである。

然れば縦し神を無視して高尚なる生涯を送る人は難事を成す人であると認むるにしても、其人が神を愛し、神に事へて生涯する人と同様に完全なる人道を踏むものであるとは言へないのである。其れ計りでない、先づ宗教なくして能く道德を行ふ人は極めて稀である。次に、縦し人が困難なる事を行ひ得たりとて、唯だ難事を行ふが善行であるとは謂へぬ。我等は「其は困難なりや」と問はないで、「其は正しきや」と問ふのである。而して若し誤れる思想よりして餘計の困難に遭ふとすれば、其れは決して賞むべきことではあるまい。更に又問ふべきは、果して單に道德を行ふことは、道德宗教共に之を生涯に現すに比して難いであらうか。兎も角詩人ウオーズワースは其う考へなす。

うつつし世をすつるは

さのみ難からねど

絶へせず天と交るは

容易き業にはあらじ

宗教的道德は行ひ易しといふ意見は、宗教は未來の賞罰を説くが故善を行ふに便利であるてふ謬見より起るのである第十八。世紀の功利主義の道德論者は皆かく論じたけれども實際基督教會の説は此の如きものではない。屢々述べたるが如く、基督教の教義は神と一致せよ即ち聖となれ、然らば善を行ひ得べしといふのであつて、罪に汚れたる人性を此點まで高むることは決して容易の業ではない。

然れば基督教的品行の特徴は神に對して行動し、神を愛する念より萬事を行ふといふに在る。「我等は生くるも神のため、死ぬるも神のためにす」、「食ふ者は主の爲に食ひ食はざるものは主の爲めに食はず」是れ聖書の語である。又僕に教へて曰く「人に事ふる如くせず主に事ふるが如くすべし」と。而して主人には「天に主ある者の如く僕を遇すべし」と命ずる。此精神に合ふ様進み行く丈け、基督教徒の德行は活ける人格の交通となり、愛の發表となつて来るのであるが、基督教的生命の特質は凡て之より發するのである。」

先づ第一の特質は、人は此世に於て各自特有の天職ヴォークケレシヨを帯びて神に奉ふるため日々を送るのであると觀することである。遺傳、氣質、境遇、機會、勸告等所謂人の運命は大に人の生涯を形くるものであらうが、基督教徒はかかる死せる事物の奥に神の召命

あることを信ずる。聖パウロは此信念に充ちてをつて、其書簡に始終此事を述べてをる。『神の各を召し給へるが如く生活せしめよ』といひ、『各召されたる召を守りて動くこと勿れ』といふてある。此は管に或特別の職業に限らず人間萬般の職業に及ぶものであつて、奴隷の務すら之にもれてゐない。『若し奴隷にて召されなば思煩ふ勿れ』。此信念たる人の生涯を高尙堅固にするものである。勿論危険がないではない。之を厳しく解釋すれば人の自由を妨げるかも知れず。傲慢に解釋すれば熱狂の弊に陥るかも知れぬ。然かし概して天職が自分に有ると思へば生涯の目的も明かになり、不屈不撓の元氣も出て事業も成功多く、殊に此念があると貧賤辛苦の裡にも大に自ら重んずる處が生ずる。

且つ『萬物を赤裸のまま見透したまふ主』のため生活すると念へば、心に偽りなく眞實になつて来る。自ら欺くといふは人の陥り易き罪であるか、詩篇記者の如く考へると大に此缺點を補ふことが出来る。『看よ、我れ舌を以て言はざるに主は悉く之を知り給ふ、神よ、我を試み、我心の奥を探り給へ、我をためし、我思をしらべ給へ』。此く考ふるときは人の心根は自ら清く正しからざるを得ないで、己れ自ら欺かぬといふ眞實の徳が進む。此徳こそ確實なる品性の基礎であつて、又苟くも眞實の徳に關係ある他の諸徳の依て立つところである。眞理の神に仕ふるか故に眞實になる、其れが基督

教的生命である。

眞實の心が發すると同じ源より流れ出つる徳は綿密に職務を盡すといふ心である。僕人は人を悦ばすものの如く只眼前の事を行はず、主に事ふるが如く主人に従へと教へられてある。綿密とは我言行の些細の點まで注意することである。抑も愛に關係あることは小事も大事件である。愛は無限に大なるものであるから、とても大なる行爲に於て之を表はすことは出来ない。故に我等は其反對に出で、些かの事に誠を盡し、細かき處に心を配つて愛の心を表はすのである。即ち此に一の事があつて、其れは愛ある者にあらずは逆も行ふの價なしと思ふまでに些かにして、又之を行ひたりとて愛あるものにあらずは氣附くまじきまでに小さき事である、故に我は之を行ふ、其れが愛の證據であると考へるのである。

然れば神を愛する心より萬事を行ふといふ風習の進歩するだけ、人は行爲の細節を重んずるようになつて来る。其れは日常行爲の細節が人の習慣を成し、習慣は品性を形づくるからである。故に小事に注意するといふは基督教の綿密を成す一元素であつて、小事に忠なる此習慣を以て品性を築き上げておくと、人生の大事危急の場合に泰然として之に應ずることが出来るようになるのである。

以上四本徳をあげて、基督教の愛神の動機より之を見ると其れが如何になるかを論じ

たが、其他の諸徳でも同一であつて、何事も神の爲になし、己の力の及ぶ丈の愛心より之を行ふといふが其特徴である。世の無宗教的の徳論者は種々の疑問を起して居る。例へば『道徳上の理想とは何ぞや』『道徳の標準は何ぞや』『道徳を實行せしむべき制裁の性質如何』『人は何故道徳的ならざるべからざるか』といふが如くである。幾多の倫理學派は甲論乙駁此等の問題を論究してをるが、理論を好む人は何時までも此等の問題は興味があらう。しかし一旦我等が眞正の生命は全然聖き大人格と相一致するに在りと確信するや、此諸問題は實際上には解決の着いたものになる。故に動機と對象とを唯だ神のみと立てたる基督教倫理は大に問題を簡單にする。固より時々かくかくの場合には如何にせんなどいふ實際問題は起るであらうが、人間行爲の大元則について彼此再び議論する必要はないのである。

加之基督教倫理は更に大なる倫理問題の解決をつける。即ち個人道徳と社會道徳の衝突、更に之を言ふと、古人が自愛他愛の衝突といひ、今人が利己主義と利他主義の衝突と稱する問題を解釋して仕舞ふ。此問題は古來幾多の倫理學者、殊にホッブズ及功利論者を悩ましたもので、彼等は随分窮した議論を立てた。勿論此二者が根本に於て相反對してをると見れば此問題の解決はつく筈がない。然れども一旦人の人格が二方面を有することを認めると、再言せば、人は他人と相分別せる個獨者であると同時に、社

會的の者にして、他人と合同一致して初めて自己の本色を全ふし得る者であると認めると、理論上の難題は煙の如く消ゆるのである。残るは唯だ罪が在るために生ずる實際上の困難のみとなる。此罪が他人を犠牲にして自己の慾を満さんとする利己主義の源である。『各人は萬人と戦ふ』といふホッブズの言は人間自然の性を言表はしたるものでなく、罪ある人間自然の状態を指したものである。然るに基督教は個人に其罪に克つ力を興へて人格に自由を授け、以て其社會性の屈したるを伸ばしてやるのみならず、他人と交りたしとの願望を充分満足さすものは神なりと教へ、人の社會性に對する眞正の目標として神を説くのであつて、人が此道理を解し、神を愛する心のみし行く丈け、先づ己と同じく神と交る人々を愛し、次に又神の愛し給ふ一切人類を愛せざるを得ざるに至るのである。

故に萬人齊しく無限の活ける神と相交り、之がため萬人又互に相親しみ、各人は萬人を愛し、萬人のために生き、萬人も亦各人を愛し、各人のために生き、かくて人類一般和氣洋々の裡に其社會性を満足するといふこと、是れが基督教徒の理想である。固より生に限りあり、罪に支へらるゝ現世に於て此理想をとげんとするも、其が思ふ儘ならぬことは是非がない。然りながら現在此世に於て不完全ながらも形づくり得る愛の姿を眺むれば罪惡なき彼世に於て完ふせらるる愛の傍も偲ばれて嬉れしいのである。此

【八四】
 貴き時の來んため天地人間界はたへず進歩發達しつゝありとは我等の信ずるところである。古代教會が基督教反對の社會と相對立せる間は、其反對のため教會内には「兄弟の愛」が盛に炎へたけれども、外部に對しては勢ひ疎くなつて來た。交際遊戯等は決して基督教と衝突するものではないが、當時の交際遊戯職業には随分基督教と相容れざるものがあつたため、教徒は之に關係するを得なかつた。之が爲自ら隱遁出家の修道院生活を生じ來つたが、中世の頃社會の野蠻化すると共に愈々此風を長するに至つた。亂れ果てたる天下に在つて基督教的生活を送らんとせば、人は修道院に通るゝ外殆んど道が無かつたので、此く世をはなれて修むる徳が個人的に傾いたのは是非なきことであつた。中世の道徳論者は此個人道徳の解剖説明をなして教會に不磨の功績を立てたが、其主張したるところは遁世の精神であつた。有名なる「日耳曼神學」及「アケンピスの『基督の模倣』」の二書は此主義の千古の代表である。そこで世間生活の貴重なることを唱道するに至つたのは文藝復興の時である。然るに此は大體基督教的の運動ではなかつたので、基督教の性質を帯びたるものすら、希臘主義と基督教的理想との混合物であつた。此と他の原因との結果で宗教改革運動も結局個人の靈魂を救ふといふ個人主義に終つて、自から宗派の分裂を來し、一般兄弟を愛するといふ社會主義は消え失せた。其後佛國革命が現れて文藝復興の精神を極端に發揮したので、益々非世間的と世

間的との反對を激烈にした。
 然れば諸の歴史上の事情に妨げられて、教會は此世の諸國を神と基督の國に改造するの義務を果すことが出来なかつたが、今日基督教徒が此方面に於ける己の義務を大に感じ來つたことは過去に例なきほどで、其れは諸方面に現はれて居る。或は教會一致を圖つて一層「兄弟の愛」の實をあげんと力むるが如き、或は傳道心の著しき増加の如き、或は無教育者、無賴漢、貧民の心靈上及び社會上の改良を企てる者の多きが如き皆其例證であつて、皆我等の社會的意識の盛になり來つたことを示すものである。しかし我等は今ほ他の點を論ずるので、吾等は基督教主義を所謂世間生活即ち文藝、學術、實業、政治、娛樂、其他人間正當の業務の隅々まで限なく行渡らせる義務があると感じて來たといふところが今陳べるところである。一見すれば此は人間が正當自然に具へる能力を發展するところであるから、之を抑へ、世を棄てる方が覺かにかたく思はれる。然かし世に汚されずして世を感化する方が、斷然世をすてゝ山に通るるよりも大に難事である。古來立派に基督教徒となつて恥かしからぬ人で、其宗教生活と世間生活とを全く別物にして、美術家と基督教徒、實業家と基督教徒、軍人と基督教徒、政事家と基督教徒といふ風に二者の間に水別れがしてをつたが、是れは基督教的美術家、基督教の軍人、基督教の實業家、基督教的政治家といふように、其職業に基督教を注入し、其

職業によつて基督教的事業をなし、其天職を果し、其れを神と人にと對する愛を實行する媒介にするといふのは大に異つてをる。

然るに眞面目に此主義で世を渡つて見ようとするだけ惡の強さ加減が知られる。といふのは人は新開地の殖民者の如く、過去を打消して新たに生涯を初めるとは叶はないので、昔より世に存在し、又善人悪人、千種萬様の人が共に形づくりたる職務事業に従事するのである。風習慣例傳説聯想其他社會の空氣が惡に汚れてをる。人は常に惡人に反して善を行はざるべからざるのみならず、又實に惡人と共になつて善を行はざるを得ない。不實の人の中であつて誠實に、利己主義の人の中にて利他的に、人の名譽を受くるを不斷の目的とする人の中に在つて只神よりの譽を樂とせざるを得ないのである。且つ近世社會道徳の問題は中々複雑で、是れは善、此れは惡と水別れがして居ないで、善も惡も混じたように思はれるものがあつて、之を辨別することが容易でない。其處で事件が新たに起つて來る度毎に之に處すべき正道を判定して行かねばならないといふ譯であるから、常に奮發して正義に就く心があるべきのみならず、大に手練判断を要するので、隱遁生活を之に比すると實に樂なものである。且つ如何に用心しても人間は各何處かに弱いところがあつて誘惑に陥りかねない處へ、其從事してをる職業の性質や、共に其職業を執つてをる人物の性質やが兎角人を誘惑に陥らしめ易い

ところがあるといふので誠に困る。例へば美術家となるには覺官の鋭敏な人でなくてはならないが、此かる人は種々肉感上の誘惑を受ける。或は又不正直なる商業界に立つ實業家は如何ほど正しい心でも全く正直に買賣取引をすることが難いかも知れぬ。公正廉直なる政治家も節操卑き徒輩と相提携せざるを得ないことになつて、多少は彼等に讓歩せねばならぬこともあらう。更に又組合の申合を奉ずる職工或は亂暴なる雇主に使はるゝ雇人が、如何にせば善道に合ふやと身の判断處置に窮するようのも起るであらう。此類の難儀があるからとて、人間日常の職業事務を決して避けて隠遁することは成らぬが、實際世間生活を心靈的に送り行くことは容易でない。しかし此難い世間生活を各自天より賜る處に隨つて正しく送つて行くので其人の社會的方面の品性が發展し、隨つて一般人類の進歩をも來すのである。若し基督教徒が世を避けて所謂『地の鹽』たる職分を盡さないなら、世を腐敗に委ねても構はないと謂ものである。例へば劇場問題の如きもので、或基督教徒は之に對して、劇場は廢止した方がよいと云ふようなる方針を執るのであるが、技藝心の強かつたプラトーンさへ此説に傾いた位で一應尤もである。然し實際上演劇の文明國に絶へた例はなく、又何時まで絶へないことは儘であるが、其れが存在する以上は善かれ惡かれ人心を感化するに相違はない。其れで演劇は高尚にもなれば又墮落もし得るものである。或は古代教會の師父等

【八八】
 が鼓を鳴らして責め立てたる羅馬時代の演劇又はチャールズ二世時代の英國の劇場の如く墮落することもあらう。又は希臘のエスキラス、ソフォクリスの如く、シェイクスピアの如くコーナイユの如く、ツァグナーの劇の如く之を高めることも出来る。然るに基督教徒が悉く若し一切演劇を排斥するとなれば、其れは演劇の社會に興ふる利益を減じて、加々其害を甚しくさすものではないか。尤も吳々も斷つておくべきは、前述べたる世間生活を心靈化するの困難は俳優生涯に於て殊に大なることである。感情的なる人物の情は演劇生涯のために殊に興奮挑發されるから、兎もすると放縱になり易い。其れで世間には随分俳優たる天才伎倆を有しながら、自分は逆も此生涯を安全に送るとは叶ふまいと感じて斷念するものが少くないであらうと思ふ。此れは他の職業に於ても世人がなして居ることでは俳優生活に限つたことではない。所謂右の眼を抉つて之をすてることなのである。基督教徒の立場からいふと、事業や成功よりも品性の方が重いので、品性の墮落と交換の出来るものは世に無いのである。故に一旦定められた職業を變へるのは難いであらうが、定める前には篤と考へて、此職業に従事すれば我品性を害するや否やと問ひ、然る後安全なる方に決すべきものである。品性なくば決して眞正の基督教的事業は出来ない。

以上述べたる處を約めると此うである。神に於て人を愛し、人に於て神を愛するといふように愛が基督教の動機であるために、基督教の一切の徳は社會的の性質を帯びて来る。何となれば尤も個人的の徳でも之を「主のため」として他の爲めに行ふからである。それで罪の束縛を脱すると其必然の結果としてそうなる。何となれば人格の進歩發達とは畢竟他人の生命と相交り相通じて愈々加々充實圓滿し行くことであるが、此發達を妨げるものは唯罪其物であるからである。

第七章 祈 禱

前既に述べたる如く、基督教的生命とは神と相一致することである。悔改めるといふも、禁慾するも之がため、信仰と希望の目的も其れであり、其れが又諸の愛のかくれたる源である。此一致たるや結局唯神のみよく來すものであることはいふまでもない。「我己を彼に示すべし」「我等來りて彼と俱に住はん」とキリストは宣ふた。後年教會の大神學者アタナシウスは之に應じて「神は人性を享け給へり、是れ人が神性をうけんがためなり」と言ふた。此一致はかく神から初まる者ではあるが、二人格が相一致するには相方の合意を要するから、人間の方で神の賜を有難く我意より受けるといふ處が無くてはならぬ。此は我等に意志の自由があつて物を取捨撰擇する力があるからである。

神は種々の方法で此意志に訴へ給ふことはあつても、自ら造つた人格の自由意志を壓制して強て我意に従はせるとはなし給はぬ。故に苟くも神の恩恵力を過大に觀て我等の宗教を一種の宿命説にして仕舞ふ主義は古來教會に排斥された。舊約でも新約でも人間の感動すべき理由條件をあげて置いて、さて其上は人の取捨に任せるのである。「生命を撰べ」「今日汝等誰れに事ふべきかを撰べ」と神は宣ふ。此く自由撰擇の方法を以て神が人に對し給ふことは、基督教徒の心靈上の實驗に訴へてみても解る。恐怖、警戒、訓練、推論、獎勵、愛など交々來つて我等の心に訴ふるところがあるが、其れが決して強て我等に此く爲させ、かくなさせぬと云ふ事はないので、畢竟最後の撰擇は我等自身が勝手にする。此れが即ち祈禱といふものの理由である。祈禱とは自由のある人が神の招待を認めて之に應へ奉り、人と交はらんと望み給ふ神に對して、人が之と交らうとすることである。故に祈禱を以て單に惠福を嘆願するものとなして之を嘲弄する反對論者は大に誤つてをるので、祈禱は其れより餘程重大なるものである。即ち其れは人の社會性の活動であつて、一切社會の無限永遠の源たる神と相一致して充分の満足を得たいといふに外ならない。故に祈禱は人の生命と同じく多方面の者で、又畢竟活動せる信仰が祈禱であるから、信仰と同じく廣大なる意義のものである。之を人間同志の事に譬へると、祈禱は嘆願に當らないで友人との交際に當るのである。元

【九〇】

來人が友と交はる第一の主意は、其友人が友人であるから交はるので、友人と交はりさへすれば其れだけで我交友の情は満足し、又其情を現はしもし得るのである。其れから人は思想を友人に語つて意見をきき、其計畫を告げて忠告を請ふ、先方の友情に對して愛と嘆賞と感謝を表する。我と共に喜び、我と共に悲しむことを求める。此外何事か友人に願ふこともあるが其は尤も稀である。然し一旦願ふときには其友誼相應に我願ふところが聽かれることを確信するのである。扱又友人間の交際は必しも談話を要しない。さまで親しからぬ間柄では力めてでも談話をつづけねばならぬといふ事もあるが、友人間では互に心情を解してをるから、しばしば無言が有言に勝ることがある。

然れば祈禱は人の交友に譬ふべきものである。即ち祈禱は唯だ諸種の宗教上の義務の一人でなく、諸義務の基礎であつて、人生一切の吉凶禍福に際して常に之を神に告げ、神を中心として、神を第一と思ひて生活することなのである。「主の禱」はよく祈禱の精神を教へるものであるのに、人は餘りに馴れて其主意を充分に解せずをる。先づ冒頭に神と其聖きことを稱し、地上に聖徳の擴まらんことを思ひ、其れより聖旨の成らんことを考へる。此冒頭を置いてから後に初めて個人の祈禱を献げるが、其中三ヶ條は人と神との心靈上の交際を妨ぐるものに關してをる。即ち罪の赦免と、誘惑より

濟ふことと、惡を免れしめるところである。肉體上の祈禱は唯一あるのみで、而かも其れは極めて單純なもので、『我等の日用の糧を今日も與へ給へ』といふのである。是れすら基督の教示に照らして見ると心靈上の意味を生じて、神の聖旨を成す是れ我糧なりとか、天より降れるパンとかいふことを思ひ浮べざるを得ないのである。故に「主の禱」は祈るべき事項の順序、大小輕重を教ふるものであるから、尤も深き意味に於て人に祈ることを教へるといふて不可はない。而して「主の禱」の如くに實際生活すると其れは神と相一致して生活することになるのである。

此く考へ來ると、祈禱の生涯は漸次發達進歩するもので、下は母の膝に坐して「主の禱」を誦する小兒より、上は浮世の風雨に打たれて其一生涯は宛然たる一個の「主の禱」ともいふべき聖徒にいたるまで、其間に幾多の段階があるのである。成程祈禱は人の天性に發するに相違はないが、罪に染みたる我等人間には容易に之れが行へない。宛がら未だ見もせず觸れたるでもない樂器で音樂を奏しかぬるが如く、心して祈禱の力を養はないと、祈らんと欲しても祈れるものでない。故に我等は祈ることを學ばねばならぬ。歴史あつて以來祈らぬ人はないが、祈禱の念はしばしば萎縮して仕舞つて、又之を修養するまで大抵は不規則不確である。而かも其修養は一通りの苦勞ではない。其處で世人が動もすれば靈の自由を妨げるとして非難するかの祈禱文が必要に

なつて來る。祈禱文を非難する人は人間が立派に祈る才能があるとして其論するものであるが、人はさる祈禱の才能を以て生れない。適當に祈り得るようになる豫備には定まれる季節、定まれる規則、定まれる祈禱の語は必要である。恰かも學術技藝を學ばんとするにも此種のものゝ要するが如くである。アルファベットを學び、手本を用ひ、モデルを寫し、音譜によつて奏するが如きは皆之れである。且又我等は個人として充分祈禱の習慣を作るまでは此かる祈禱文を決して棄ることは出來ないのみならず、或人は此かる習慣が出來ても引續き之を用ふると、其習慣を維持して行くのに利益があると考へる。何となれば自由祈禱は兎角心身の快否等のため浮沈あるを免れないからである。然し之と同時に、此形式を用ふる祈禱が眞實心より出づる祈禱と爲つて來る丈け、自ら形式に甘んずることが出來ないで、其れが衷心より出づる叫聲とならざるを得ない。即ち時も定めず、語も定まれる形なく、唯だ我念の發するまゝ、我喜憂の動くまゝ、大事の我を蹴起せしむるまゝ、閑暇の我に默想の機會を與ふるまゝ、矢の如く天に向つて祈禱を献ぐるこゝとなる。而して此種の自由祈禱が加々習慣となるに隨つて祈禱の品性が徐らに成つて來る。祈禱の品性とは祈禱が主腦になり、祈禱なくては存立しない程で、其全體の調子が祈禱で出來てをるといふ様な品性をいふのである。吾等は今祈禱の生涯を論じて、かの聖テレサの如き神秘家が録したる幽遠玄

妙なる宗教的實驗に詳かに及ぶ必要はないが、唯一言すべきは、祈禱の習慣が進むと我
 信仰上の經驗はいよいよ眞實にして空虚でないと思ひ來つて、經驗の外生せざる泰然
 不動の平安確信を得るようになる。『何人も汝等の平和を奪ふことあらじ』。抑も此も
 祈禱の教育に就て我等が喫々したる所以のものは、此く祈禱に修養を要するがため、
 非宗教的道德論者中祈禱を非理と認めないでも、全く之を不問に附して顧みないか、
 又はさまでいなくとも、之を餘りに肝要と思はず、道德生涯には之を加へても加へな
 いでも差したる損益がないと考へる者が少くないからである。然し基督教の立場は明
 白で一點の疑を容れない、即ち祈禱は生命の粹である。祈禱の難いのは全く罪のため
 である。故に陥り易き誘惑に陥るまじと奮闘するが如く、一藝に達せんとして刻苦勉
 勵するが如く、我等は祈禱の困難に打勝たんため同じく奮戦努力せねばならぬ。成程
 祈禱をなさずして道を踏み行く人もあらうが、此かる人は概して稀れである。何とな
 れば人間は大抵宗教なくして道德を行ふことは出来ないからである。基督教の主張す
 る生活は主として心靈的であつて單に倫理的ではない。先づ心靈的であるから倫理的
 になつて來るのである。然らば心靈的生命を養ふものは何ぞといふに、其れは應驗の
 あつた祈禱といふに歸着するのである。

祈禱の教育の事は右にて筆を擱き、今より祈禱すべき事項につきて述べよう。『主の祈』

に於て神と神の榮光の事を最初に置いてある事は已に語たが、新約全書中の書簡も之
 と同主意で感謝讚美に重を置いてあるのみならず、教會の祈禱式にも、『主なる神よ、
 我等主を讃め……主の榮光の故感謝し奉る』といふように此點を重んじてある。人に
 感謝讚嘆の情を起さしむるものは萬人萬様であらうが、何にもせよ此かる情を起さし
 むる時は直に之を機として神に祈禱すべきことである。天地の驚くべく、美しきを見
 て感極つて泣かんとするが如きことあるは珍しからぬ事である。昇る旭、没せんとす
 る夕陽、水に映する月の光、岡の上にかかる影、燦然たる天の文章、廣き原野、咲き
 匂ふ花、戯るる獸、舞ひ踊る蟲、歌うたふ鳥、數へ來れば天地は實に驚嘆に堪へぬも
 のに充ちてをる。人が此かる光景に接し、此かる音樂を耳にして嘆賞の念内に湧きな
 が之らを吐露すること能はざるがため、心中悶々の情を禁せざることは幾度であらう
 か。基督教徒に取つてはかく鬱屈したる情を流露せしむる道は讚美である。讚美とは
 唯だ漠然宇宙の大と美とに對して驚嘆の情炎へ、情として炎へたるままにて頓がて復
 た消へて跡なくなるが如きものでなく、活ける神に對する活ける讚美である。即ち
 『詩篇』の詩歌又は『主の萬物よ、主を祝ひ、世々うたひあがめまつれ』との禱式の頌
 の如きものである。かかる讚美は抑も神の萬物を見て讚嘆感謝の念を禁せず、我を忘
 れ自ら唇を漏れて轉び出づる聲であるが、又此かる讚美を常に獻げてをると其れが自

分の品性の修養にもなる。何となればこれがため萬物の裏面に心靈上の意味を認むる習慣を生じ、視ゆる世界を通じて神と交ることを得るようになるからで、基督が譬喩を以て道を説かれたのも此主意を人に悟らせたいと思はれたのではあるまいか。此祈禱的態度が宇宙に對して缺けると、天地が昔なきオルガン、封したる書物の如くなつて仕舞ふのみならず、或は宇宙を以て唯物説の證明に用ふるまでに立至る。此は讚美の念の起る由來の一例に過ぎないが、人間世界の愛を考へて之を感ずると、亦た讚美の情を發する。我等が親を愛し、子を愛し、戀人を愛し、朋友を愛する。而して眞に之を愛するだけ愛とは實に深きものにして逆も全く之を表はす事の出來ざるを感ずるのである。其れのみならず、四邊を顧みれば我を懷ひ、我がために泣き、献身犠牲の誠を盡す愛の無限の世界があつて我は其恩を受けて世を幸に送りながら相當の感謝の務も果さないことを感ずる。我等は人に負ふ愛の恩の厚きことを悟るのが遅い。ために、しばしば之を悟つて萬の一をも返さんと願ふときは已に其人が去つて悔ふとも及ばざることがあるが、此かる際に我等の悲嘆は言ひがたく、往々痛悔の涙にくれるのである。然るに此言ひがたき情は神に對する感謝の情として表出することが出来る。我を愛せし人は逝いたが、愛の源たる神は存し給ふ。「我等は此等の人が神に在りて生くるを信じ、其處に在ればこそ彼等は却て深く愛するに足るものなれ」と成人が言ふた如

くである。此く愛を考へると自ら讚美的の祈禱に思ひ至る。即ち神が愛である故神を讚美するに至るのである。更に又基督教特有の感謝の源としては、神が基督によりて世を贖ひ給ひし愛があるし、其外一個人の生涯中様々の恩恵もあるべし。今は感謝の理由を一々述べるのでなく、此かる理由が實際あるといふことを示すのが主要であるから、之を詳しくは言はない。悲觀主義の人でも人生の喜悅、美、愛、徳等を見ないではないが、一方に患苦罪惡といふものがあつて差引無になつて仕舞ふといふのであるから、人生に何も有りがたいと思ふ所がないようになる。此れは悲觀主義の學者論客のみでなく、今日の文藝にも随分盛んなので、一般人民の中にも何となく此病毒に感染してをるものが決して少くない。此は基督教徒の解くべき大難題の一である。然らば如何に之を解くかといふに、善惡の比例について悲觀論と意見を異にするから解決がつくのである。先づ道徳上の惡即ち罪惡は如何に其結果が廣く且つ複雑なるにもせよ、本はといへば人間の我意が人間の本性を曲げたからであると觀る。更に又人間の遭ふ患難辛苦は随分人間の罪惡の結果として來るものがあるので、此かる分に對しては人間にこそ責任あれ、之を以て神の愛を符むることは出來ないと考へる。右の二者は悲觀論者の論據とする二大事實であるが、右述べたような患難辛苦の外の分は、其實在も意味も充分解しないから、人間の智力を以て曉ることは出來ない。其處で此は

論じても想像論で徒勞である。其處で前已に論じた事であるが、世界全體の痛苦の中で一都は只痛苦であらうと想像したものであつて、残る大部分の痛苦で人間が解し得る分は大に人間が責任を負ふべき筋のものであるから、基督教徒は自己が實際明白に經驗する宇宙の善福を宇宙に存する痛苦に比べると善福の方が差引平均以上になると信するのである。故に美と愛と喜と徳とは申迄もなく、信者に取つては基督教の啓示も凡て確乎たる事實として動かかないと信するのである。

祈禱の正當なる根據は右の如くである。祈禱は讚美である、何となれば神は愛であるからである。又其れが種々に現はれて來る神の愛に對しての感謝である。とはいへ、此感謝の念がなかなか容易に起るものでないので、一事一物神の恩恵でありがたいといふ心になる迄には随分修養を要する。幾度も之を實行し、漸次に進み行いて、始めて其れが自然と心より湧き又習慣となつて來るのである。一旦其れが習慣となると我品性全體が大に影響を受けて、喜ばしき事のある毎に神を思ひ、神を思ふは眞に樂しきこととなり、隨て神といふ念も神と我との間柄につける觀念もいよいよ盛になつて來るから、我等の信仰は之が爲に快活となり、高められ、強められ、擴められるのである。さて此念が生ずると、次に自ら祈禱の第二の主意、即ち『聖國を臨らせ給へ、聖意を成らせ給へ』といふ事に移らざるを得ない。何となれば我等が、神は愛であり、

凡て愛すべきものの源であることを愈々悟るだけ、神の力の世に普及することを望まざるを得ないからである。我等は力を盡すに足る唯一の事業、人間の唯一の天職は、其地位職業に隨つて神の眞理を弘通するに在ると感ぜざるを得ない。文藝にせよ、學術にせよ、實業にせよ、交際にせよ、事業にせよ、或は又直接傳道にせよ、皆同じことである。一旦此れが我願となると其れが又祈禱の主意とならざるを得ない。我等は神が聖旨によりて他人の利益のために我等を用ひ、我等の生涯の祝福となつた物を他人にも與へ給へと祈らずしては居られないようになる。此れが他人のための祈、即ち仲保の祈禱である。仲保祈禱には解しがたい奧義がある、何となれば自分の祈禱の場合には神の恩を自分の意志で謹んで受け容れるのであるから、神と自分の意志とが共に働いて恩恵を受けるといふ事で道理が解るが、自分の意志が何故に神の他人を恵み給ふための益になるかは解らないからである。解らないが此の世に之れに類したことがある。

人間の實驗によると、神は幾分か人間を用ひて人を支配し給ふのである。智を磨き能を練る人は之がために他人を助け、智能を正しく用ひぬ人は其れだけ他人に損失を與へるのは世俗の常であつて、心靈界の事に至つては尙更そうである。預言者、説教者、教師、美術家等にして『其天才を發揮する』人は大に同胞人類の心靈を益するが、かかる

天才を布に包んで用ひない人はそれだけ世の心靈界を貧しくするものである。兎も角く神は世の中を此様にして置かせ給ふのである。故に若し我等が信する如く祈禱にして有力なるものならば、他の場合に人間の自由意志の働が他人の幸不幸に關係すると同じく他人のために祈ることは大に他人の幸福に影響することであつて、人が此務を怠らば其責を免れることは出来まい。且つ他人のための祈禱の應驗が惜かに一ある。其れは常に神を讚美すると益々神を愛するに至る如く、常に他人のために祈ると自分が愈々人を愛するようになることである。人のために祈る丈け人を助けたしの熱望を生じ、此熱望は非常に人を助くる元氣能力を増して來るので、之を祈禱の應驗と見まゝと思ふても思はれないほごになるのである。右の如く讚美の祈禱は自ら仲保の祈禱となり、仲保の祈禱は又自ら人をして世のため盡す義務ありと感せしむるに至る。されば祈禱するに、先づ我等は自分が恵を受くるようにと祈らず、人が恵を受くる助となるようにと祈るのが正當の順序であるので、「主の禱」にも自分の事を祈る段になると主として罪より免れて神と一致し、管に自己の安心を得るのみならず、社會に對して有益の人となり得るよう祈ることになつてをる。之に反して肉體上の祈禱は此れ以上僅かの事を祈ることは出来まいと思はれる程僅かの事、其日其日の食物を興へ給へと祈れとある。此は基督が明日の事を思ひ煩ふことを戒められたので、祈禱の生涯と

は抑も信頼の生涯であつて、神と一致してをれば人に必要なるものは神が必ず興へ給ふと信頼する生涯であることを教へられたものである。否、祈禱の應驗を望まば此信頼がなくてはならぬと特に命じてある。「汝等が信じて祈るものは悉く興へらるべし」、即ち是れである。此く一身上の祈禱は限られてあるが、然ればとて肉體上の恵を祈ることを禁じてはない。或は祈禱は心靈界には効力があつても物質上の法則の働く物質界には通用しないと論ずる人がある。更に之を言ふと、天地の法則に現はれたる神の意志に従ふように努めるのが祈禱であつて、天地の法則を祈禱で動かさうなどと思ふてはならぬと主張する者がある。然かし此く物質兩界の別を立てるのは基督教にも反し、哲理にも戻るものである。哲理に戻るといふのは、右の説は、物質界とは因果必然の約束で結ばれて、心靈が毫も干渉し能はぬものであると獨斷して掛つてあるが、高尚なる哲學はアリストートルより以來宇宙萬有の極致は靈であつて、物質とは靈の示現器械に過ぎないと説くのみならず、我等が日常自由意志を發揮して事物の進行を變化左右するは實際疑ふべからざる事で、法庭に出で、之が反對の説を主張したならば狂人と見られるであらう。かく右の區別は非哲理的のものであるが、殊に其は非基督教的のものである。何となれば基督教は受肉降生インカーネーション(神子降生)の宗教で、靈が物質に現れ、神の「イソバ」が肉となつたといふ宗教であるからである。此骨髄たる教理が基督教の

四肢五體に貫いてをる。奇跡があつて基督が物質を支配する力のあることを證明すると信する。見るもの、きくものを捕へて心靈上の眞理を教へる譬喩とせられる。聖奠があつて、物質を聖別して靈生の補助とする。又克己修養して我肉體を聖靈の貴き殿とせよと教へてある。畢竟基督教は物質世界をば心靈の用を足す機關と見て、此主意で物質界を支配して行くべきものと考へるので、此は哲學も常識も共に賛成である。故に基督教が日用の糧といふが如き如何にも物質的なもの、ために祈れと命じ給ふたとて、右の精神に些かも反して居ない。但し糧のために祈れといひ、且其を其日其日の糧に限つてあるところを見ると、我等の日用の糧は自分一人の口腹を肥やすために其を用ふべきでなく、靈の生命の用をなすべき體の元氣精力を養ひ且増すやう糧を用ひよとの主意であることが悟られる。此れは糧に限らないことで一般肉體上の恩恵に及ぼしても不可はないと思ふ。此かる考へ方では、苟くも人間の道に合ふ肉體上の恩恵は祈つても差支はない。人の信仰の進むにつれて肉體上の祈禱は減じ行くかも知らんが、此種の祈禱を献げる際にも心に疚しき所なくして献げられるやうになる。「主の禱」を右の如く充分考へて見ると祈禱の生涯の眞相が解つて来る。受肉降生（神子降生）に照らすと世界諸宗教の眞意が察せらるゝ如く、「主の禱」に照らして見ると何故人間に祈禱の念が授けられたかといふことが悟られる。バビロンの懺悔の歌も、

第八章 サクラメント（聖奠）

埃及の嘆願も、吠陀及アヴェスタの讚美歌も蠻族の呪文も祈禱は人間の天性であるといふ事を示すもので、其れ相應の用をなしたものである。祈らずして安心を得ざる人は聖アウグスティンが言ふた如く、安心の唯一の基たる神に頼りて安心を求めず、人間自然の性情に戻つたからである。然れば基督教的祈禱とは神の愛を感じて自らも神を愛し奉り、神の愛の命するまにまに己が智能才藝を用ふること、即ち人の眞性を發達し、之を全ふすることなのである。終に一言したい。聖パウロは聖靈が人の爲に祈らるゝことを説き、基督が活きて我等のために仲保し給ふことを教へてをる。此は人間の語で永遠の三位一體の神と稱する三位間に行はるゝ祈禱の事を指すのであるが、此かる語を見ると、成程人間の祈禱は人の自由意志に出づるには相違ないが、神の感動援助を得て祈る方が實際多いのではあるまいか。又恰かも電氣が相接觸せる物體に普く通する如く、祈禱によりて神の靈が基督教會といふ社會に洽く通じ、萬の社會の永遠の源即ち神の中に存する社會的生命と基督教會とを相結合するのではあるまいか。兎も角も我等は何時しか此兩者が密切に相結ぶ時の來らんことを望むものである。

祈禱は人の意志が神の意志と相一致することで、神人相交はる自然の方法である。然る

に基督教に於ては祈禱の外にサクラメント(聖筭)といふものがあつて其助勢をする。しかも其れは勝手に作つたものでないので、基督教が元來神の「語肉となる」といふ宗教であつて、畢竟心靈が物質に現れるといふサクラメント主義なからである、即ち自然にサクラメントが基督教に存せざるを得ない譯になつてをる。近來の研究に據る世界の幼稚なる宗教にはサクラメントが重んぜられてをつたので、殊に聖洗及聖餐の禮は甚だ大切に思はれてゐた。淨めの標ともなり又心を潔くする効があるといふので、禮拜に列する前に身を洗ひ淨めるといふことは、世界到る處に行はれてをる。又古代宗教の儀式を見ると大抵犠牲を獻ぐると同時に一同會食することになつてをるが、其主意は此會食で、動物の形を具へたる神と其禮拜者とを結び附けるか、又は其獻ぐる犠牲と禮拜者との關係をつけて、之によりて禮拜者同士の結合を強くするといふに在るのである。古代の進歩した宗教には此思想の幼稚な點は失せても其精神は存してをる。猶太教は暫く措くとして、基督教發生當時の異教にも皆サクラメントはあつたので教會の先達等は今日の如く世界諸宗教の連絡を知らなかつたから、ミヌラとか又は其他の儀式を見て大に解釋に惑ひ、此れは惡魔が基督教を傷けんとして故らに基督教の聖式をもちり世に之を行はしめたものであるとまで説いた位である。此解釋は勿論誤つて居るが、サクラメントの盛に行はれてをつた確證であつて、此主義が歴史あつ

て以來宗教に存したことを知るべきである。基督は此サクラメントを單純高尚のものになされて新たに之を聖別されたのである。基督は此サクラメントを單純高尚のものになされて新たに之を聖別されたのである。何故此主義を基督が執られたかといふと、肉體は人の人格を組織する一部分であるからである。前條述べ來つた諸徳は申迄もなく、祈禱さへも之を發表するには神經腦髓を用ひなければならぬ。肉體は物質を食物として收容し、以て物質を靈の器とし、神に仕ふる具とする。我等の靈生は外界に活動して其本性を全ふするものであるが、外界に活動するには體を以てするより外はない。肉體的にいへば我等の體は社會の單位たる家族の基であり、人と交際するには耳目口鼻を用ひねばならず、肉體上の諸種の必要あればこそ人と相交り相助けて行くといふことも始まるのである。此故に肉體は靈の戰場となるので、誘惑の起るも、罪に勝つように戰ふのも、聖徳を修めんと勵むのも、皆肉體の中でするのである。死後の生命すら靈の體として、罪の力に制せられぬ従順なる機關のうちに宿るといふのである。且つや體は唯だ靈の用に供する器のみでない。體は人の人格全體に反應し、靈の生命の偶々まで影響する。肉體の苦樂健否は大に人の品性を陶冶する材料になる。肉體上の變化活動で人が自ら感せざるものは數限りもないが、其れが一々人の心を感化してをるのである。此くも體と靈とは相互に密接の關係があるから、苟くも眞實に神人相合體して充分神を人に示現するには受肉

降生(神子降生)があつたのは至當であると我等は合點するのである。何となれば人の人格が神と合體するといふ以上は人格の必要部分たる肉體も神と合體せざるを得ないからである。更に又宗教が進歩して心靈的になつたからとてサクラメントの必要がなくなるといふ事はない。ヘンデル又はベートーヴェンの音楽は蠻人の音楽よりも心靈的であるが、やはり音響といふものを用ひねばならぬ。人が腦を以て考へ手を以て働き、五官に誘はれ、妙音清歌に感動する限り即ち肉體が人格の一部分である限りは、サクラメントは人の靈生の媒介物たり、人と神との一致の媒介物たらざるを得ない。然れども一致合同はまづ神より始め給ふのであつて、人は唯だ神の招待に應ずるまでである、サクラメントの主意は茲に在る。サクラメントは基督が人として之を立て、又人として彼が設け給へる人間の社會即ち教會が執行するものであつて、外より、又人間以上のものより神の命令として各人に臨むのである。其目的は無論靈の恩恵を授くるに在るが、之を授けるには體を用ふる。それは之を受ける人が體を有つてゐて、恩恵を受けるにも其れが必要であり、又恩恵を受けて其體を聖めて貰はねばならないからである。基督教的品性を完成するにサクラメントが何程の効力あるかを考ふるには、果てしなき神學上又は教會上の議論に立入る必要はないが、一言茲に我が主義を發表して置きたいと思ふことがある。

古來基督教徒の大多數はサクラメントを恩恵を受くる方便器械と考へ、又其の如くに之を使用してをる。此點に於ては何人も異存はないが、さて進んで其運用の秘密、其授くる恩恵の度、若くは性質、其恩恵の授け方の解釋になると、議論が百出して來る。其議論の兩極端は此うである。一の極端説はサクラメントを行ふと、之を行ふたといふ丈けで魔法の如く機械的に人に恩恵を與へるといふのである。此は歐洲の中世に行はれたる世俗の信仰であつたのみならず、學者中にも此説を唱へた者があつたので、ツレント會議で議誅された。同會議は『唯だ外部の作用』といふ語を存したが、受ける人の信仰も要するようになつて之を解釋した。此く此説は根據のないものであるが、随分其れが實際上には世を害した。他の極端はツウイングリが初めて唱へてツウイングリ説といふもので、サクラメントは心靈的真理の符號にすぎずといふ意見である。他の諸説は此兩端の間に在つて或は彼に、或は此に傾くのである。其處で極端にせよ中間にせよ、此等の諸説は唯だ人間の理論推測に過ぎないといふ事を記憶すべきものである。元來基督教のサクラメントは理論でなく、實用的のものであつて、用ひらるゝために存する。其實用なるところが肝要なので、説明は何でもよい。其處で如何に之を用ふるかといふに、サクラメントの物質的及心靈的要素は、恰かも人の體と靈との如く、合して一物になつてをる。其れで此二者中の一を離すと其れは實際の物でないから其

んなものは何ものか少しも解らない。人は自然の情として聖なる物の全體を敬ふものであつて、サクラメントを立てるのは全く此く全體を敬ふようにするのが主意であるのに、之を分離して彼是議論するのが誤つてをる。解らぬ世の解らぬ人々が之を忘て機械的なる意見を抱き、サクラメントの物質が心靈と離れて魔力を以て人に恩を與へるなどの迷説を振り舞はしたので、ツウイングリの如き極端説が反動として起つたのである。之と同時にサクラメントを單に符號と見做して得意がるのも謬である。何となれば今日我等は物質と靈とは互に親密に相關係し、相依つて立つことを知つてをるかから符號其物と、符號で現はされてをる物とを全く分離することは出来ないのである。此かる説はデカートの物心二元説の臭味を脱せないもので、寧ろ時代後れたるの譏を免かれぬ。自然界は昔の人の考へたよりも案外に統一があるので、形ある符號と、形ある符號を以て表はす無形のものとは互に相關係し相影響するものである。恰かも言語の如きもので、言語とは單に符號を集めた丈けのものではなく、人の思想を表はしもし、形づくりもして、思想に欠くべからざる要素である。

初今よりサクラメントが人の品性に及ぼす影響に立返つて論ずることにしよう。第一サクラメントは人が神と一致することを得るのは全く神の賜であつて、人は唯だ之を有り難く戴く丈けであるといふことを教へるが、此は今日の世には殊に肝要の教訓で

ある。今日は發見發明の世で、人は發明に心を奪はれ何人も發明者發見者の根性を有してをる。さて種々の發見のうちに所謂宗教歴史の發明といふがあつて、宗教は幼稚卑近の處より漸々發達したこと、其儀式表象の進化せること、諸宗教の信條に類似の點あること、迷信思想が宗教の歴史の汚點となつてをること、宗教の名の下に罪惡を行つたことなどを發見したのである。此く宗教の人間の方面のみに注意するところより其神の方面を忘れ易く、宗教とは全く人間の發明にして其裏面に神の啓示といふものなきように説くのである。此かる時代に一種の制度があつて、吾等が宗教を發見するのでなく、宗教が我等を發見し、我等を索め、我等を其貴き腕もて抱き、隨て我等に重大なる責任を負はしめるといふことを人に記憶さすのは殊に肝要である。且つや今日は批評の時代であるが、批評は兎角人をして單に批評者たるを以て満足せしむる傾を生ずる。此かる人は甲乙の議論を較べ、彼此の證據を比べて斷定を差控へ、兎角確乎たる念といふものがない。宗教上の批評に於て殊に之を見る。勿論信仰の厚き宗教的批評家はさうでもないが、信仰的なるよりも批評的なる人で右の如き有様に陥つてをる人は少くないのみならず、基督教は批評的調査を受けつつありと漠然と見聞する普通一般の人々は之が爲め進んで善をなすの熱心を失ひ、又は心に惑ふて何事もなし得ないようになるのである。然るに此く實行力を失ふを防ぐものはサクラメントであ

る。サクラメントは活動せる基督教を示すものである。群疑百出するに關らず、我等は進んで品性を作り、義務を盡さねばならぬことを教ふるものはサクラメントである。サクラメントは批評の裏面に大實在があつて人が眞實の人となるには恭しく之に近いて之を容れねばならぬことを教へる。此くサクラメントは世界に神の活動し給ふことを斷へず證するものであつて、軀も靈も共に神に献げよとの常住の勸告である。此はサクラメントが我等の智力に及ぼす影響であるが、其影響は唯だ智力に限らないで、我等の情も躰も智力と共に之を高めて、キリストに於て神と之を相一致結合せしめる。其處で我等の力量と信仰相當に、愛肉降生の生命即ち肉となれる神の生命が我等の中に産み出されるのである。聖パウロは此生命を稱して「基督の形我うちに成る」といひ、「我れ生くるにあらず、基督我に在りて生くるなり」と叫んだ。次にサクラメントは、我等の心次第で受くるならば受けよといふように我等の前に呈供さるのみならず、必らず之を受け容れよと命するのである。我等は基督教徒たるが爲めに之に對して特別の宗教上の義務を生じて來る。サクラメントは我等の信仰を實行せよと命じ、常に日々の行爲に於てのみならず、特別な宗教上の動作に之を表はせと教ふるのである。此主義は今日の如く兎角宗教上の信仰が朦朧としてをる時代には宗教を明確にしてよいと思ふ。サクラメントを用ふる人は其信仰する處が實在であ

ることを感ずるし、又實在たることを外に示さねばならぬ。そうなると其れが又自己の聖徳を進めんとする努力を増し、世人の心靈上の補益となりたしとの念を旺んにするようになる。故にサクラメントは基督教を實行するよう人を導く案内者である。其證據には冷淡なる基督教徒はサクラメントに列するのを避ける。是れは其うないと自分が實行する覺悟のない事を實行する義務を負ふようになるかも知れぬといふ心配からであると思ふ。以上サクラメントが人格の個人的方面のみに及ぼす影響について考へたが、サクラメントは又基督教會の社會的生命の外に現れて視ゆる紐である。此も亦サクラメントの至要の意味である。人の生れない前より存する基督教會て一社會があつて、其れがサクラメントを人に呈供する。サクラメントによりて人は教會に入り、教會の會員として長く交り、全體の人と共に祈り、共に同情し、所謂聖公會の親交に入つたことを確知するのである。即ち幼兒を抱き、青年に信徒按手を施し、結婚する者を祝し、病者を訪問し、死者を葬る教會「淋しき者の家庭」と稱せらるゝ教會の親交に入つたことを確かに認むるのである。此く基督教會と相一致結合するは基督教生命の極意である。

人間の人格に社會性があつて、其れは他人を通して全ふせらるゝことは己に述べた如くであるが、基督教は自家獨有の方法として教會と稱するものを以て此目的を達する

【一二三】
 ののである。教會は基督教徒が一個人として其信仰を充分實現し得べき社會であり、他人も自分と同じく「兄弟の愛」といふ心を以て人と交り、己れ人を愛すれば人も我を愛すると確信して行動し得べき唯一の社會である。彼は教會の廣大なる生命の流に身を投ずるのである。身を投ずると、教會の教によつて智力は鋭くなり、意志は其高潔なる模範によつて強められ、情は其愛の空氣に鼓舞せられ、誘惑の時には助けられ、失敗の際には支へられ、悲には慰められ、成功には衛られる。此く種々の道にて同信の教徒に助けられ、いよいよ全く首なるキリストと相一致するようになるのである。之と同時に社會の方でも、其社會の中にある衆人が各其特別の務を盡し、其分を果して自己の理想を全ふして呉れると、社會其物も其能力を充分圓滿に發達することが出来て其目的を全ふするものである。此は如何なる社會でも左様であるが、殊に基督教會に於てそうである。何となれば教會はキリストの體であつて、彼が其中の一切のものに充ち満つるからである。勿論基督の靈に充たさるゝ教徒は自家の特色を具へて基督の圓滿の徳の一部分を反射するのであるが、此く特色を具へたものが合して一大團となる、其れが眞實充分に基督の充ち足れる徳を示現するものになるのである。かゝるが故に教會は常に各信徒が之に由つて自己の生命を實現する媒介たるのみならず、教會の衆員が互に相親交一致していつてこそ其生命が存するようになつてを一個の社會である。

此は理想であつて、罪ある現世には只其幾部分が成就するのみである。幾部分であるから完成した教會の有様を其れで推察することが難い。難いけれども皮相の觀察者が夢にも見ぬ程に此理想が此世で實現される。それで不完全ながらも此く實現されたる社會生命に由て基督教の品性は形られ、基督教の生命は鼓吹され、基督教の世界に對する使命は果されるのである。そこでサクラメントは基督教的人格の社會的發展と社會的生命の示現ともなり、手段方法ともなるので、人格に關係の深きものである。右の如くサクラメントは基督教徒の人格が神と一致するといふ目的を達するために種々の大なる効力を有してをる。尙之に附帶したる効力がある。サクラメントを執行する場所も、其儀式も、サクラメントに附屬する古今の音樂美術も、其他サクラメントに關係ある一切の有形物も皆其の爲めに聖別される。此くて吾等は世界全體をサクラメント的に觀察する習慣を養成する。世人或はサクラメント主義は唯物主義に人を陥らしむると論ずるが、甚しき誤解であつて、却て其れは世俗的生涯を鹽化するよう人を教ふるものである。今や世俗生涯を重んずるの風が盛なるために、人は名利權勢のみを求めんとして實際的唯物主義の横行甚しきものがある。其徴候は決して少くない。先づ今日は商業時代であつて金錢を尙ぶ。金錢に豊かなれば奢侈に傾く。金銀珠玉、

衣服、娯樂、數百金の宴會、數千金の演藝、人の耽り荒む所は古今同一轍であるが、今は昔に比べて高尚の理想といふものの制裁力が薄いかと思はれる。之と同時に近世商工業の状態が一變して、生存競争が日に月に激烈なるがため、貧者は日々の衣食にのみ腐心せざるを得ない。富者も貧者も共に肉の事を念ふて精神自ら卑しく、人情日々に薄くなり行くのである。搦て加へて今日學術界の傾向が兎角物質を肝要に思はせる。世間に行はるる書物を見ると其れが現はれてをる。例へば生理的心理學の如きも學理上より正確に教へると物質的のものではないが、其れが不正確なる一般世人の心中に誤れる思想を起さしめて、小説でも評論でも人の心情を物質であるかの如くに見て書いてある。他の學術でも皆左様であつて、學術其物の罪でなくとも、世人が物質的の考を自ら望むから自然に其れを物質的に解釋してをる。其處で學術上の眞理でも、眞理其物を重んずるといふよりも其れが何程商業の助となるか、幾何の快樂を人に與へる力があるかと算盤珠をはじいて學術の價を定めるといふ様である。悲しいではないか。

近世の唯物主義とは此の如きものであつて、實際物質は空でもなく、價値もあるのであるが唯だ其れの用ひ方が本末輕重を顛倒してをるといふのであるから、之を矯正する方法は物質を正しく用ふるように人を導くことである。今日の盛大なる商業と確實

なる學術とを有する我等は物質世界を妄想とし、夢幻と考へることは逆でも出來ない。そこで若し物質の濫用を矯めようとするれば物質の高尚なる用を人に示すに及くはない。即ち美術、技藝、金錢、學術の發明、政治上の成功は、驛を亡ぼし、悲を滅じ、人の心靈の進歩を増すものなることを説き示すべきものである。而して古來此任を盡したるもの、一は教會のサクラメントである。宛がら大聖堂が巍然として空に聳へたる木石の大建築を以て心靈上の眞理を人に示すが如く、サクラメントは物質の目的は心靈に在り、心靈の用を爲してこそ物質の意味あれといふことを尤も明白に指示したのである。さればサクラメント主義の極意は其れが唯物主義に對する不斷の駁論たり、又世俗生活の眞意を證しする常設の證人たるにある。

物と靈との二の世なくば、

まごかなる宇宙はあらじ、

美術にも、道徳にも、

はた社會の潮勢にも、

二者の間を裂く人あらば、

そは自然の紐を切り、

六合の生命をたち、

徒らなる書をうつし、
虚しき辭句を書きつらね、
劣りはてたる月日を送り、
人をあしらふ道にくらく、
ひたすらに、誤りたる者こそいふべけれ。

(ロバート・ブラウニング)

最後に、サクラメント主義の宗教は人の動作に影響を及ぼす。身體を絶へず靈界に接せしむるが故に自ら其感化は舉措進退に及ばざるを得ない。此かる些事を此處に論ずるのは餘りに大袈裟であると考へる人もあるか知らんが、人の動作は品性に重大の影響を及ぼすものであるから決してさうでない。成程腐敗したる社會には唯だ外に巧言令色あつて内に仁なく、ハムレットの所謂『にこにこしても姦物である』といふ様な人物もあるが、基督教の行儀作法は之に反して、内に存する誠と愛が外に形れるのである。而して此かる行儀作法はサクラメントの時に實行する恭敬謹慎の態度で大に養はれるのである。古代教會の先輩の書を讀むと、皆聖なる場所、聖なる儀式に際して恭敬なれと懇々信者を誡めてをる。シプリアン曰く「人は謙遜と靜肅を表はす穩かなる聲にて祈るべし」と。「何事も控へ目にし、道にはづれたる様にて手を擧ぐることを

へせず」とテルタリアンはいふた。「聖卓には天使の臨みて嚴かに之を圍むものを。俳優の眞似事を教會にて演せずもがな」とクリンストムは叫んだ。教會よりして此禮節は家庭にも社交にも波及するのである。アレキサンドリヤのクレメントは其著しき例である。彼は其著『基督教教育論』に於て大に舉動に重を置き、食事の際の行儀、言語動作の慎み、器具器態の質素、衣服の清潔、男女間の禮儀、其他一切の作法の大切なることを痛論した。後世に至り英國の高徳アンヅルースは「姿勢身振り」について祈つたといふが、クレメントは此と同じ精神であつた。何故此く舉動にまで重を置るかといふに、基督信者の體は活けるサクラメントであり、聖靈の殿であり、肉と成れる『ことば』の内在的の靈の外に現はれるものであるからである。

第九章 神 秘

以上祈禱とサクラメントとは人が神と一致する方法であつて、此く神と一致することが基督教的生命であることを述べた。言迄もなく無限の神に有限の人が一致しようといふには限りなく断らず進歩して行かねばならぬ。故に神との一致といふも進歩の程度に随つて其意味が異なるべきものである。

先づ此一致の端緒として人は此一致を冀ふ念が生せねばならぬ。即ち「我靈は神を慕

ふ、活ける神を慕ふ』といふ心を要する。而して此冀願は詮するところ神學上に所謂神の『先行的恩恵』といふて、神が先づ人の心に此の善き冀願を起して下さる所から生ずるのである。序ながら一言して置きたいが、先行恩恵といふものは、かの神の全能力を立てるために餘りに神の恩恵の力を強く言ひ過ぎて、實際上人の自由意志の働きを無視するに至つた彼のカルヴィン説の意を含むものではない。此神學上の定命説は唯物論者の定命説と同類であつて、自家獨斷の説に勝手が悪いために、意志の自由といふ實驗上の事實を否定するものである。『神は全能であるが故に人には自由がない』といへば何となく敬虔に聞へるが、實際其れは『自然界は畫一であるから人には自由がない』といふと些かも異るところはない。此かる全能力は事實上無いものを勝手に考へ出したものなので、基督教の眞の説は此うである。神は有限の自由意志を世に存在するようにし、神の御勝手よりして自ら己を制限し、人の自由意志を働かす餘地を與へ給ふた。しかし神が此く自己の任意で己れを制限されたことは外から制せられたのでないから、神の全能力を妨ぐるものではない、此れが基督教の説である。さて我等が神と一致を冀ふ心が先づ神の恩恵によつて與へらるゝといふことは、人が造られたる者として何事にも神に依つてをるところから割り出すところあるべき筈である。キリストが嘗て『我を遣しし父若し率かすば何人も我に來ること能はず』と宣ふ

たのは此意味かと思はれる。しかし若し我等が神を慕ふ心が神より授けられたものとするれば、神は我等が神を慕ふことを望ませ給へばこそ之を授けたまふたのであるに相違はない。『我等彼を愛するは彼れ先づ我等を愛せしによれり』。故に神との一致の發端は人が神を慕ふことであつて、此く神を慕ふ心の我中にあるは神も我を慕はせ給ふといふ證據であるとするのである。勿論實驗上景慕の念が自他相互のものであるといふのは人間世界の事をいふので、神も人の景慕に對して人を慕はせ給ふとは、實驗でなく畢竟そう信仰する迄であるが、さりとて此信仰は空でなく、相當の理由のあることは既に述べた如くである。此く神と一致を冀ふ念が先づ起つて、其れが我意志を動かすのであるが、其順序は此うである。人には各特別の境遇事情があつて其れに一々神の聖旨が現れてをる。此聖旨を基督教の啓示に照して解釋して、さて此が神の聖旨であると斷定すると、我意志は恭しく之に従ふて行くのである。而して有爲轉變の世の中に此從順の念を片時も失はずして進み行くにつれて、我意志は漸く神に一致するのである。但し意志の事でも景慕の念と同じく、確かに知るのは人間の方面のみで神の方の事は充分解らぬ。我は自ら誘惑に抗しつゝあることを知り、克己を實行しつゝあることを知り、正しと思ふことを力行しつゝあることを知り、又神の聖旨を行ひつゝありと信じて之を行つてをる。

且つ神を慕ふ心と同じく、我意志の此く働く前に神の意志が我に向て働いて、所謂「神我等のうちに働き、聖旨に合ふことを思はしめ又行はしむ」るのであると信するのである。しかし如何程かく信する理由が強いにもせよ、到底其れは信仰たるを免れない。扱又「我教を行ふものは其の神より出づるや否やを知るべし」とある如く、従順が進むと智力が進んで悟得が深くなる。即ち靈の生命の確實なることを悟り、祈禱の力を悟り、基督教の眞理を悟ることが深遠になる。随つて基督教徒として我等は神と一致してをると確信するようになる。更に之を言ふと、基督教的生命の進歩につれて信仰が確信安心といふ域に達して來て、益々神が我等人間の生涯に於て協心戮力の恩恵を垂れ給ふことを確認するようになる。

此くなると我等は自己の冀願行動といふ念を超越して自己ならぬ「或者」の在ますことを悟るようになる。それでも此は此悟をなした人丈けの納得する悟であつて、如何程神の導ありと確く信すればとて、其確實なることを他人に證明することは出来ない。到底其れは傳へがたき個人の會得である。

右の如く冀願は従順を生じ、従順は悟得を生じ、悟得は確信を生ずる。即ち世に我等が神に事へんと努めつつあるのみならず、神は實際上「我等の心を宰り給ふ」といふ確信を生ずるが、此確信は漸々成長するものである。それで神と一致するといふのは此

處まで達すれば終である。

然るに尙此上に幾多基督教會の聖徒が有したる一種の神秘的實驗がある。それは幻として、直覺の事實として神と一致したと感ずるので、其刹那には唯恍惚として無我入神の様にあるのである。しかも此は獨り基督教徒に限つたことではない。此は儘かに實際あるあとで、其人の身體の状態が異常であるといふので之を一種の病氣と見ることは出来ない。勿論基督教徒は決して之を妄想として解釋しようとは思はないのである。何となれば普通信仰上の様を見ても、信仰が熱して來て愈々神の我靈の裡に在ますことを確信するやうになると、終には一心不亂の祈禱となり、又はサクラメントによつて神とひたすら親密に交るといふ嚴かなる刹那があるからである。それで時に非凡の天才が彗星の如く現はれて非常の精神力を發揮するところを見れば、人間の精神力が只普通の状態のみに限られねばならぬといふ譯はない。殊に心靈の生命といふが如き神妙不思議の力あるものに於ては、其れが非常の高潮に達すると超然として脱塵し、道理を推して得らるる確信は一躍して直覺となり、普通の意識は暫しが間停止せられるといふことは固より有り得べきことである。扱又之を他方より見るに、絶へず己れの臨在を信念厚き信者の心に示し給ふ神が、時に特別の理由よりして特別の靈に一段明白深遠に己を啓示し給ふことを疑ふべき道理はないか。然れば右の如き神秘

【二三三】
 的實驗は即ち此實驗を有する人が信する如く我等信徒が信仰と希望の目標としてたへず達せんと努めつつある神人一致の妙境の一時靈眼に觸れたのであらうと思ふ。固より此く眼に映したる天の妙境も現世にて視ることなれば、彼の坐ヨハネが「彼の顔を見る」といひ、又聖パウロが「神を有のまま見る」とか、「我等の知らるる如く我等も知らん」とか言へる如き程度までは逆も及ぶべきではないであらう。
 右の状態を「神秘的」なる語を以て表するを常とするが、此語の意味が曖昧なるため大に人を惑はすから、今其正當なる意味を明かにするのは徒勞でないと思ふ。或は此語を以て、心を亂さずして心内の幻を視んがため外物に眼を閉づるの意となすも、或は又言もて表はしがたき秘義を默然として沈思冥想せんがため唇を鎖すとの意となすも、孰にするも此は主として哲學上の語である。神秘を哲學上の語として見ると、人間の靈が絶對無限の存在者又は實在を直覺する力を有するとの信仰、即ち推論によらず、一躍して覺得し、中間の徑路なく、隨て説明し難けれど、説明し難きが故に却て確々實々一點の疑を容れざるやう神を知覺するとの信仰を表はすものである。抑も個人の實驗に基づく確信は最も強くして又最も秘密なるものである。我は我見たる物又は打解けて語らひたる友の存在することを確信するが、我と同一の實驗なき他人に此確信を傳へることは出来ない。此の如く我れが絶對的實在者又は絶對的實在を直覺し

て之を他人に傳へることの出来ないのは、哲學上の神秘からいふと是非そうあるべきものである。宗教上の神秘でも全く此道理を神學上の語で言表はしたまでのもので、畢竟人の靈は直接に神の靈と相一致し相親交する力があるとの信仰に外ならないのである。それで神學者でも哲學者でも此點に於て尤も重を置くのは此知覺の直接なること、若くは其れが實際上の經驗であるといふ處に在るのに、普通の人は此實驗の人に傳へがたきところが神秘であると考へる。此れが抑も誤で、其れは神秘の輕い方の點である。それで世人は通常曖昧不可思議にして普通に解し得ないことを神秘的と稱するのであるが、實は此語は人の靈と天地究極の實在との關係が直接であるといふことを表はすもので、神秘家といへば、理論上より此信仰を有する哲學者も其中に入り、又實驗上神と直ちに一致したる意識を有する聖徒にも此名稱を應用さるのである。さて我等は今聖徒の方を論ずるのが主意である。以上述べたる處より考へると、神に就ての思想が異ると、神秘主義も亦之に隨て異なる筈である。或人はヴェダンタとか新プラトニ派とかの如く、絶對とは人の靈の如きものでもなし、物質でもなしといふやうに此世のものをあげては此でもなし、彼でもなしといふて、全く此世のもの、性質を一切缺くもの、其れが絶對であるといふ考へ方の哲學を神秘主義といふのであるが、しかし實際上此語は一切の宗教に存する元素を指すものとして廣く用ひられてを

る。それで此語を神の直覺といふ一點のみに應用し、神秘主義の性質は其關係ある神學の如何によつて異なるものであると見るのが、尤も單純で又一般の慣用にも合してをと思ふ。そこで世に種々の神秘主義があるが、其中より兩極端をあげて論じたら今は充分であらうと考へる。

一の極端は歴史上最初に印度に發生したる印度の絶対説である。此説によると、唯一の實在として一個の人格なき存在者がある、而して人間の思想意志情慾は申迄もなく宇宙萬法皆空にして幻の如し。是れ皆唯一の絶対より我等を離別するものである。故に若し人間にして絶対と合一せんと欲せば、各人其特質を滅し、其特徴を除かねばならぬ。かくせば人の眞我は、已を蔽へる千種萬様の特質特徴の絆を離れて絶対と合一し、眞如の光に接し得ること、宛がら一滴の水の大海に落ちて元の姿の消れたるに異らない。此が印度の説である。

今茲に此教理若くは之が變態を一々論評する必要はない。只だ注意して置きたいことは、人格の無い絶対と一致するには人間の人格の特徴たるものを悉く滅殺して仕舞はねばならぬこと、又之を裏面から見ると、此く消極的に人格の特徴を否定して神と一致せんことを求むるときは、論理上絶対は人格なしといふところに落ちて來ない譯に行かないことである。

右の説の正反對は神の人格パーソナリティーを認むる基督教の教理である。此教理は二意に解釋することが出来る。神は我等が人格と稱する者以上の者であるが、少くとも人間の人格に存する根本の性質を其中に有し給ふと考へるのが其一で、人間の人格に存する性質存在法が圓滿の域に達したのが神であつて、人の人格は神の萌芽の如きものであると思ふのが其二である。蓋し第二説が種々の理由よりして正常に近いかと思ふ。ロツツアも同意見である。基督教が人間の人格を強め、此強まりたる念を神に移して神も亦た人格ありと考へさすようにしたることは、余が嘗て詳論したところである。扱て印度の汎神教は多を殺して一を活かすが主義であるが、人格主義の方では一のうちに多を含めて圓滿を成すのである。人間界のこのを見るみと解る。人格者として人間は一の單位であり、自家特別の我といふものを有して、それで外に向つて無數の他の人格者又は物に對してをる。而して我等が成長發達するのは此等の他のものを自己のうちに受け容れるからである。我は友情を以て他人を我うちに受け容れ、其能力を利用し、又彼此互に愛を交換する。此くて知らざる學術の智識を得、美術品を見て我想像力を養ふといふ風に、我といふ單一のうちに千萬無數の外物を含蓄せしめ、多を約めて一となし、以て自己を實現するのである。而して時と機會さへあらば此發達は殆んど際涯を見ないものである。且つ此作用の基礎として意志が存するので、此くなりたし

【二二六】
 との意志が絶えず自己を發揮し、自己を主張するのであるから、前に述べたる自己滅絶主義とは正に相反する。此、他によりて益々自己を實現し、圓滿にして行くのが我等人間の知つてをる人格であるから、ユニテリアン説の如く神をたゞ單一と見做すときは、神を人格と認むることは難いであらう。何となれば神を單一と見るときは神に對して他者の地位に立つものは有限なる人格か物かより外にないから、神は此有限のものを通して自己を實現せねばならないことになり、随つて神の絶對無限たる所が失せて仕舞ふからである。しかし絶對が無いといふことは有るべからざることである。之に反して基督教の三位一體説は一方には神を人格と認め、他方には其絶對性を保つやうにして此難關を切り抜けるのである。何となれば此説に據ると、神のうちに三位（三人格者）があつて永遠よりして彼此互に相關係し相實現してをるといふので、人格的關係の要素は絶對のうち存してをるからである。故に基督教の神の唯一は多數を除き去つて空虚なる單一を残したものでなく、唯一の中に多數を含蓄するといふ人格主義のものたらざるを得ない。随て又基督教には有限の人格者の存する餘地があつて、其れに聖靈が充ちて以て其中に基督の生命を生み出す事が出来る様になつてをる。かく神と人と相合一するも、それは相一致するのであつて、單一となるのではない。即造られたる者が創造主の實體と同一になるのでもなく、又は其中に吸収されるのでもない。

猶又ヘーゲル派の或學者の主張する如く、創造主が被造者を通して自覺を有するやうになるのでもない。創造者も被造者も各その特質を失はず又相互の愛の作用に依つて相一致するのである。此區別さへ明らかにたて、置けば、神が人を通して自己を實現し、又人は神と相一致して始めて充分自己を實現するといふても毫も不可はない。人が神を慕ふ心を生ずるのみならず、進んで其誠を守り、其聖旨を行はんと努めても、神の方より之に對する應答がないやうに思ふ時があるといふ事は前既に論じた處であるが、それが或は祈禱により、或はサクラメントにより、或は神の攝理の感によつて神の應答があつたといふ念を生じ、随つて信仰の念が實驗によつて證據だてられるやうになると、かゝる心狀は神秘的と稱してもよい。何となれば是は神と人格的の交りをなし、ともかくも神の實體と相接觸するとの確信に外ならないからである。故に苟もこの確信を有する基督教的生命は其神髓に於て神秘的であると謂ひ得べきであるが、只此神秘的元素を著しく有するものは普通神秘家と稱する基督教徒である。されば基督教的の神秘は人格相互の愛に基くものであるから、理論に於ても實行に於ても印度若しくは新プラトニ派の神秘と相去る甚だ遠き物でなくてはならぬ。此兩派はいづれも神の性質を一切否定して神の唯一を立て、人格の特質を一切除き去つて唯一の状態に達せん事をつとめる。然るに基督教徒は神は人格の要素を一切具へたるも

のと考へるから、人格が人格に對するものとして神に向ひ以て神と相一致せん事をもとめる。再言せば人間の人格の一切の要素即ち理性、意志、愛、及び要素を發表する機關たる身體を滅絶せず、却て之を發揮して神と相一致すると云ふのである。而して是等の人格の要素は人の心靈内にやざる神の靈に養はれ、隨つて人は神に依りて己れを示現し得るのである、聖パウロと聖ヨハネの品性を比較して見ると此點がよく解る。孰れも頗る神秘的であつたが、それがため同一型の人格を生じないで、反つて其特質を發揮し、各其特長を以て神を表はす事ができた。後世の基督教會に於ても其如くで、最も偉大なる聖徒は必ず最も著しき特質を有する人であつた。如何となれば此かる人は神と一致せるがため其能力を充分に利用し、神よりうけたる自家特有の光を世に放つたからである。人格的の愛を基礎とせる神秘の結果は必ず右の如くであつて、人を眞實、明確、有力にし、又人を廣くし、實行的にし、熱烈にする。之に反して、人格を否定する神秘主義は自ら人をてし遁世せしめ、新プラトニヤ教者の所謂「孤立者と共に孤立」する人となすのである。

然るに基督教の禁慾主義に誤謬の生じたるが如く、その神秘主義もいつしか誤を生じて來た。神人相愛の積極的神秘主義が、根本よりして縁の無き否定抽象の消極的神秘主義のために、理論實行共に其影響を蒙つて來た。其原因は禁慾主義と同じく實際上

の必要より自ら茲に至つたのであらう。既に述べたる如く、罪ある人が神と一致するには先づ罪を排斥するといふ消極的の運動から始めねばならぬ。而して罪は大に肉體と關係があるから、罪を排斥するには肉體上の種々の情念慾望等を抑へねばならぬ。肉慾を抑へんとて奮闘する熱心の餘り、肉體と肉體を使つて罪を犯す我意とを混同して、兩者共に本來惡であつて、共に抑へ制すべきものであると考へるやうになるのは賭やすき理である。禁慾主義が此過に陥つたことは既に論じた如くであるが、一旦肉體を靈の機關にあらずして牢屋であると考へ、神と一致するに妨害となると信ずると、其は消極抽象の途に上つたものであつて、結局萬有を排斥否定せずば神は見えずといふ信仰に落ち行かざるを得ない。嘗に罪ある慾望を棄つべきのみならず、一切の慾望は多少罪あることとなり、人間の趣味情慾は神と一致する補助とならずして障害であるといふことになる。一たび此途に上ると論理の車は轉り轉つて止まらない。嘗に肉體のみならず、文藝學術政治其他一切世俗の職務は皆靈の生命を煩はすものとなつて來る。之と同時に勢ひ神に關する思想も否定抽象に陥らざるを得ない。なせといふに、人間は實驗した物を材料として思想といふものを作るのに、此材料となるものを一切否定排除したものが神であるといふことになるからである。此消極否定の傾向は多分右に述べた如く禁慾生活を送らうとして奮闘した人が、肉體を餘りに残酷に扱つた爲

め却て其靈に對する反抗を激しくした處から來たので、全く禁慾家の實際生活の呼吸に基くものである。然るに新プラトニー派の哲學が恰かも此主義に理屈を附けて來たので、渡りに船と基督教の神學が之に乗込んで、『僞ダイオニシアス』の著書となり、終には中世紀の頃スユタス、エリジナが大に之を世に流行させることとなり、其結果として主なる基督教の神秘家は、大抵抽象的思想に傾いた。佛蘭西にてはバーナード及セント、ヴィクターのヒューとリチャード。スペインにては聖テレサ及タロスの聖ジョーン。獨乙にてはエカート、タウラー、スーソー、皆其有名なるものである。右の三派は其調子氣質に於て大に異なる所はあるが抽象否定の點に於ては其揆を一にしてをる。バーナードは愛を主として其當時の世事に盛に執筆した人であるが、それでも彼は此く言ふてをる。『宛がら存在を中止するが如く自己を失ひ、我れといふ意識を除き、己を空しくし、而して成る可く己れを滅ぼすこと、此れが天の生活といふものである』と。彼は又神の意志が人に於て完ふせらるゝことを説くとき實に左の如く言ふた。『此かる心を有つときは神とせられるのである』と。聖ヴィクターのヒューもリチャードも同主意の語を用ひてをつて、共にダイオニシアスの感化を受けてをる。しかもヒューはダイオニシアスの書の註解を著はした。スペーンの神秘家の方は實際的で理論を尙ばない。彼等は修道院の改革に熱心であつて、

其愛は南方暖國の熱火に炎へてをるが、それでも理論實行共に彼等は神と一致せんために「隔離」を主張してをる。聖テレサは曰ふた、「我等の主は、いや近く我等を御許に引きよせんがために、我等が萬事萬物よりはなれんとを望ませ給ふやうに思はれる」と。又曰ふた、「我等が何物かを愛する心の起るときは、之を轉じて神に向けるのが甚だ有用である」と。其意味の如何を知らうと思へば其次の語を讀まねばならぬ。曰く、『オ、若し我等宗教家が屢々我等の親族と談話するがため如何ばかりの害を受けるかを悟つたら必ず大に彼等を遠ざけるであらう』と。然れども此傾向が充分理論となつて現はれたのは獨乙の神秘家エカート及其一派の人々である。エカートの説によれば、神は人格なき惟一であつて、其永遠の本質本體は雷に人間のみなならず、此非人格的の神自身も知らず又知ること能はざるものである。三位一體の三位は此知るべからざる惟一者の顯現である。而して神と一致するには死の方法を執るの外に道はない。即ち自己を殺し、神を慕ふ心をころし、何物をも知らず、何物をも欲せず、何物をも有たず、此くせば神は此の全然たる空所を充たして之と一になる。彼は又此の作用を稱して、父其子を靈に生れしむともいふた。タウラーも同様の説を唱へてをる。『若し人が眞實に神と一にならうとすれば、其一切の能力、否其心靈的能力すらも全く死して黙せねばならぬ。意志は無意志とならねばならぬ。』

理性の中には智識が全く失せねばならぬ。記憶及其他の能力の中に何物も有つてはならぬ……何となれば之れあるときは、神のみ在ますといふものでないからである。」
 叔聖バナード、聖テレサ、タウラーの如き人々は言迄もなく其時代の偉大なる基督教の感化力であつて、精勵して善事を勤め、神を愛するの念も實に濃かなるものがあった。それで彼等が以上の如きことを言ふのは、基督教が實際認めてをる主義を只極端に言表はしたものであるといふのが公平であるかと思ふ。彼等は如何にも熱誠炎ゆるが如き人であるから、自然此の如き極端の言を爲すに至つたのであらうし、又實際其熱烈の爲めに此かる極端の説も此等の人の口より出づれば其害が少いように考へられる程である。しかし此く過大の説が唱へられるといふ事實を見ると、基督教の真正の主義と全然基督の眞精神に反する一種の異主義とが、兎角すると混同されるといふことを知るべきである。而して此極端説を信仰淺く、見識狭き人が眞似て主張し出すと、其れこそ危嶮極まることであつて、基督教倫理に大なる邪説を輸入し、世の神経鋭敏なる人を惱まし惑はすとは一通りでないのである。此故に我等は飽までも東洋流若くは希臘風の抽象否定の神秘主義と、人格者相互の愛を基礎とする基督教の神秘主義との間に截然たる區別をせねばならぬ。詩人コレリツヂは有名なる句を以て基督教的神秘の精神を言表はした。

高さひくきの けじめなく
 なべてをせちに いつくしむは
 たぐひまれなる 祈なり。
 われらをめぐみ いつくしむ
 御神はよろづ 千よろづの
 物をつくりて いつくしみませば。

第十章 基督教的生命は超自然である

以上述べ來りたる基督教的生命及品性を屢々超然的であると稱する。然るに此語は往々誤解されるから、終に臨んで其意味を説明したいと思ふ。アリストートルは自然といふ語の二個の意味を區別して此く曰ふた、「自然といふ語の一の意味は、發達すべき力のある物が未だ發達せずしてをる初步の材料といふことなので、他の意味は、其物が發達して終に達すべき目的を指すのである」と。其例として彼は家族と國家とを擧げていふには、大古の家族は人間の社交性の初めて發表されたもので、人間社會を作るべき未成品ともいふべきものであるが、之を甲の意味に於ける自然の制度といふのである。然るに文明開化の國家は人の社交性が完全圓滿に發達したものであつて、社會

の理想目的であるが、乙の意味に於て、此も亦た自然と稱し得られる。彼は尙ほ言葉を添へて曰ふた、『何となれば物が充分發達して仕舞つた時の様を我等は其物の自然といふのであつて、人でも、馬でも、家でも皆同じことである』と。後に至つてストア派の學者も自然に合する生活といふことを、正しき理性に合する生活、若くは自然の内部に存する目的に合する生活といふことに解した。第十八世紀にルソー及其一流の人々は文明は人爲的で不自然であるといふて自然の様に立返れと叫んで大に人を惑はしたが、希臘人の自然に關する思想は其正反對であつた。ルソー等は人間が誤れる方向を取つて發達したといふて大に立腹し、人間といふものは兎も角も發達せねばならぬものである事を忘れて仕舞つて、アリストートルなら人間の初歩の状態といふべき大古質樸の風を人間の自然の様であると唱へた。然し發達に關する今日の思想の方がルソーのよりも歴史の本意に合するものであつて、其れは再びアリストートルに立返つて來たのである。今日我等が人間の自然といふときには、或る時期に於ける人間の現在有のまゝの様といふ意と、將來人間が達し得べき状態といふ意と、兩ながら之を含めてさう言ふのである。此か見る見解から言ふと、成程『超自然』といふ語を非難する人の説は尤もである。なせといふに人が何程道德上宗教上深遠の域に達するにもせよ、其れは人の自然の天性に存してをるものであるから、之を自然と稱すべき

で超自然と名くべき理由がないからである。實に我等は人の真正の自然は神に於て自己を實現完成するに在ること、又神を信せずして安心のなきは此自然に戻るからであるといふことを徹頭徹尾主張して來たのである。然れども之が爲め『超自然』といふ語を全く棄て、仕舞ふことは出來ない。何となれば右の外尙一個の立場があつて之を忘れてはならないからである。既に説いた如く、人間が自己を實現するには先づ神より近づいて下さるので、又さうするには時々刻々神に支へられて其れが出來るのである。人の真正の自然は神の自己示現に對する器となるに在るので、此意味に於て神は人によつて自己實現を爲し給ふといふべく、人は此神の自己實現の機械となるのである。此立場から言ふと、全體の作用を超自然即ち自然以上と稱して差支へはない。即ち人の自然の天性は己よりも高尚なる他の者に支配指導されてをるといふことなのであつて、自力でなく全く天よりの他力によつて支へられてをるといふ意である。再言せば、人間の進歩は神人兩意志の協同によるのであつて兩方面があるから、兩方を言表はすべき語があるべきものである。人間の進歩が人の意志の働によりて生ずる範圍内で言ふと自然的といふても不可はない。之と同時に人の意志が神の意志の感化を受けて働く丈の範圍で言ふと超自然といふべきである。且つ此差別は人に罪があるところから大に際立つて來る。何となれば罪の結果として人は一入神祐を要するものに

なつてをるからである。人は聖パウロが心靈的のものと區別して所謂肉生的スカーといふものなので、英語の聖書には之を自然的ナチュラと譯してある。即ち肉の慾が靈に逆ひ、靈の事を見る力がなく、心中に争のある人といふことである。それで此憐むべき有様から救はるべき道は只神に頼る外はないのである。此く基督教徒の生命品性は神の赦罪に基き、聖靈の心中に宿り給ふことに依り、神の恩賜として神が人に近づき給ふより来る神人の一致に由来するものであるから、之を超自然といふのは頗る其當を得て居る。殊に此點は今日大に之を主張する必要がある。人は時代の空氣に感染するものであるが、今日の人は人の善に進むのは全く人間固有の能力が自然に發展するからであるといふて、此意味でそれが自然であると考えざる風がある。此は當今の流行の自然主義といふものを道徳の事に應用したまでのものであるが、元來此主義は詮する處唯物主義であるのに、近時の有神論者否基督教徒までが之にかぶれてをるのは實に奇怪なることで、之をよく論じつめて見ると非常なる思想の衝突を自ら發見するに至るべきである。

右の謬見の一例を挙げると、進化といふ語を歴史に適用するとき、人間の性質は恰かも動植物の機關が漸々進んで複雑なる作用を爲すに適應する者となると同一の道行で、人間の動物性が上へ上へと進むものであるといふ意味に之を取つて平氣でをる人が少

くない。しかし此は甚だ皮相の見であつて、所謂進歩的國民と稱する國民の歴史に於て、諸の進歩の根となつてをる道徳の進歩は、畢竟基督教徒が身を粉にして働き上げたものであるといふ事實を全く無視することになる。更に之を言ふと、此進歩は自然以上の祐助あることを最も強く信じ、人間の力のみにては此進歩を遂ぐることはできずと信じたる人々の業であつて、しかも此等の人々が人類道徳の進歩を大に助けたところを観ると、其意見信仰の正當なることを認めねばならぬ。故に此等の人々が生きては獻身の誠を盡し、死するには殉教の義烈を發揮したのが、根本的に誤れる妄想に基いてをつたのでないとすれば、彼等は自然主義の解説に反對する永久の證人ではないか。言を換へていへば、人類の進歩を詮じつめて見ると、人の謬見妄想より來つたか、又は人間以上の祐助があつて生じたか、孰れか一になつて來るが、二者の中孰れにしても自然主義の生理的進化とは類が異つてをる。

今一つの例は、有神論者でありながら基督の神性を拒む人である。基督は單に非常なる宗教上の天才であつて、初めて人間の心靈的能力を充分實現完成した人であると、此く考へる方が單純で自然であるといふのが其説で、此かる人の基督論は必ず多少此自然主義の臭味を帯びてをる。しかし彼等はかくキリスト問題を單純にしようとして實は反つて人生問題を難儀にするものである。人は己の性質といふものに慣れて充分之

を知つてをると思ふが、なかなかさうでないで、其由來は不明で、運命も測りがた
い。其大なる能力、其小さき成功、其罪惡と、其希望と恐怖、數へ来れば不思議なも
ので、若し神性あるキリストが人生に下した解釋が眞でないとなると、人間は到底解
せられない問題物になる。故にキリストを他人と同一にするのは人生問題を解くべき
唯一の手掛りを棄てるものである。又キリストの神性を信じながら、其生涯に奇跡の
あつたことを信じない人も同じことである。他人の説と調子を合はす爲めにせよ、自
分の心を満足さす爲めにせよ、此かる態度を執るのは自然主義であつて、之を行く處
まで論じて行くと、基督教及基督教的生命は超自然であるといふ主張を無意味にして
仕舞はざるを得ない。

以上は智力上の自然主義であるが、此外に道德上の自然主義ともいふべきものがあつ
て、神より與へらるる啓示とか生命とかいふ説に反抗するのである。無論此れは不品行
不道德のたとを指すのではない。不品行不道德が人の悟を鈍くするといふとは何人も異
論のないことである。今茲に言ふのは、人間の發見發明研究の本能、自ら自己の運命を
開拓せんと欲する本性、再言せば自力を以て自己を實現せんとすることを好む態度の
ことなので、此かる態度を執ると、自分が出来なかつた事を他に爲して貰つたとか、天
啓が與へられて、其れが充分解らんながら、有難く之を受けるとかいふやうに、從順

を要し、自尊の念を壓へるやうに思はれることを爲すことは兎角出来難くなつて來る
のである。

右の如く自力の念より基督教を棄てる人もあるが、實際真正の自力の念を満足さすも
のは基督教である。抑も自力の念とは何であるか。其れは實のものになりたいたいの願で
ある。又實のものになつて永續するやうになりたいとの願である。即ち眞の智識を得
て我物を知る能力を満足せんと願ひ、物を實行成就して我意志の力を満足し、充分愛
するに足る者と交はつて我愛する力を満足せんと願ふことなので、一言にしていへば、
現在發展せずしてをる力を現實のものにしたいと云ふ本能である。此本能が人間の奮
發努力の源であつて、名利權勢快樂智識等を人が希ひ求めるのも畢竟其れが人の生命
を實にするに信すればこそである。他人に對する交際友誼親愛でも同様で、皆人を實
にする方法である。道德になると尙ほ高尚で、本分事業博愛献身など皆此世に自己の
實在を發揮することなのである。要するに前に生命として述べたことを今は實在とし
て説いてをるまでの事で、生活するといふことは實になるといふことである。且つや
人間の一部くの願望の奥には其人格即ち自我が存してをつて、人間が實際求むると
ころは、智識とか快樂とか只一局部の力の満足を得ようといふのでなく、此等の諸能
力によりて人格全體が満足を得ようといふのである。よし人が己れを卑しく觀じて卑

しき満足を求むるにしても、其の人は自分の人格全體を實にせんが爲め、即ち實現せんが爲めに之を求めるのである。扱て此人格、此自我といふものが心靈的のものであるといふ事を認めるには、多くは苦しき經驗によらねばならぬかも知らんが、兎も角此人格は心靈的のものである。故に人格者たる我等が先方に求むる實在は所詮心靈的のものでなければならぬので、哲學の所謂最も實在的なる者、一切の實在の源たり總計たる神の外其者が有る筈がない。

更に又神人の一致が神の賜として與へらるべきことも、道理上しかあるべきことである。限りある劣等の者が限なき優等者に命令することは出来ない筈で、只だ限なき者の言ふがまにまに彼を容くる外はない。此は人生に常にあることである。聖パウロは『汝等何の賞はざるものをもつか』といふた。我等の能力は賜である。我等は之を有つてをるが自分で之を造り出したことがない。且又此等の能力を満足する種々の物も、之を満足する機會も矢張り賜であつて、自分の力で出来ない。獨立自成の人とは畢竟天の賜をよく用ひたる人といふ意である。故に人が天啓を蒙るは人の獨立自主を侮辱するものであると考へなごするのは、獨立自主の本色を忘れたもので、其獨立は神に造られ、神に頼つて立つ獨立であるのである。神は人を造るとき現在人の有する一切の能力を授け給ふたので、其中根本的の願望として自己を實現したいといふ念を與へ

給ふた。此念を解剖して見ると神と一致したいといふ願に外ならないから、神は己れを示現して自ら造り出し給ふたる人の願望を満足せしめ、以て世界を完全の域に達せしめ給ふべき理由は充分あるのである。人間が神よりの賜を受けて圓滿完全になるといふのは、造られたる者といふ立場からは是非其うなくてはならない。且つ既に述べたる如く、我等が自然に實現せんと冀ふ自我の人格は孤立せる個人でなく、我は他人に頼り、他人も我に頼つて始めて其本性を全ふするといふ社會的の自我であるから、自立自力と共に依立他力も人の本性であると謂はねばならぬ。此主義の最も高き發表なる愛を見ると其れがわかる。若し強て他人に我を愛せしめるといふならば、其は愛ではない。愛たるは其れが其人の意より出でたる賜であるからである。愛を貴ぶ所以は其れが我が命令、強壓で造り出し得るものでなく、先方の誠意より我に與へて呉れるものを有り難く受け得るのみであるからである。扱て他に頼つて立つといふ點に於ても亦た人間は實在と永續とを希望するのであるが、人間といふ限り有る者に頼つてゐては、どうも充分實在であるといふ安心が出来ぬ。人間は不完全である、缺けてをる、死ぬる、我を失望させる、そこで自然と人は此かる缺點なく、『昨日も今日も何時までも變らざる』絶對無限に實なる『他の者』に依らざるを得ないやうになる。我等は自ら此『他の者』を求むるのみならずして、自分が愛する他の人々にも同じく此實在を

得させたいといふ心になる。然し此く我が社會的の本能が神によつて満足されるのは、矢張り神よりの賜として之を受けらるからである。人間相互の交と同じく彼此互に相頼つて立ちたいといふ我願に對し、之を満足すべき神の愛が先方から我希望に應じて來たのである、自分の力で其うなるのではない、神の賜であると、さう感じなければならぬ。而して基督教の啓示は神が此賜を授け給ふたといふ事實を示し、又其を保證するものである。

加之天の啓示といひ、自然以上の生命といひ、決して其れは有神論者の立場から見ると進化説と衝突するものではない。進化説といふ語は既に述べたる如く亂雜に用ひられるので、或人の進化説によると、宇宙一切のものは下等單純なる物より漸々進化して來たので、其又下等なる物は最初其よりも下等なるものより出て來たので、其は人間にはわからぬといふのである。此説たるや純然たる唯物説であるが、或人は此進化説と神の觀念とを結付けて、神は此宇宙萬有の進化作用のうちに在りて進化したて行くので、其うするうちに自我といふ念が神に起つて來るのであると、そう考へる。他の難題は且く措くとして、第一此かる作用といふものは全く意味なく、又考へられるものではない。無より何物も生ずることなしといふ思想の元則に反するものは右の説ではないか。何となれば右の説たるや、新たに高等の物が世に生ずる際に、高等の物

を生ずべき力のない下等のものから其れが發して來るといふ論なので、無より何物かを生じ、瓢箪から駒が出るような談であつて、唯だ語でもつて思想も道理もないことを胡魔化してをるまでのものである。何となれば發展して實物になり得べき未發の力とか物とかいふものが、其力が物かの外に實在する或物の助力なくして存在し、實現し得るといふことは考へられないからである。アリストートルは此理を明知して法則を立てた、『實在は可能に先だたざるべからず』而して『完全なる者は萌芽の前に在り』と。彼は種々の點に於て後世人の師表であるが、此點に於ても我等の指導者である。

今日に至るまで凡ての唯心説は之を疑ふべからざる原則として守つてをる。故に我等は右の不當なる進化説に反して主張し得る。完く實在的なる神の理性があつて進化作用を支配して、下等なるものを造り、之を漸々進めて高等なるものを造つてもよい處まで達せしめ、そこで高等なるものを造つては又之を一層高等なるもの造られ得べき處まで進めて、更に高等なるものを造るといふやうになつてをると、此くいふても決して不可はない。成程此進化作用は充分今日ではわからないが、人間の理性が日々物を造つてをる作用と同様であるから、人間に考へられないことではない。右は有神論の立場であるが、此立場から言ふと、基督教の神の啓示は道理に外れてもをらず、世界の發達の秩序を破るものでもない。何となれば造られたる者が造られた

得させたいといふ心になる。然し此く我が社會的の本能が神によつて満足されるのは、矢張り神よりの賜として之を受けるからである。人間相互の交と同じく彼此互に相頼つて立ちたいといふ我願に對し、之を満足すべき神の愛が先方から我希望に應じて來たのである、自分の力で其うなるのではない、神の賜であると、さう感じなければならぬ。而して基督教の啓示は神が此賜を授け給ふたといふ事實を示し、又其を保證するものである。

加之天の啓示といひ、自然以上の生命といひ、決して其れは有神論者の立場から見る進化説と衝突するものではない。進化説といふ語は既に述べたる如く亂雜に用ひられるので、或人の進化説によると、宇宙一切のものは下等單純なる物より漸々進化して來たので、其又下等なる物は最初其よりも下等なるものより出て來たので、其は人間にはわからぬといふのである。此説たるや純然たる唯物説であるが、或人は此進化説と神の觀念とを結付けて、神は此宇宙萬有の進化作用のうち在りて進化したて行くので、其うするうちに自我といふ念が神に起つて來るのであると、そう考へる。他の難題は且く措くとして、第一此かる作用といふものは全く意味なく、又考へられるものではない。無より何物も生ずることなしといふ思想の元則に反するものは右の説ではないか。何となれば右の説たるや、新たに高等の物が世に生ずる際に、高等の物

を生すべき力のない下等のものから其れが發して來るといふ論なので、無より何物かを生じ、飄忽から駒が出るような談であつて、唯だ語でもつて思想も道理もないことを胡魔化してをるまでのものである。何となれば發展して實物になり得べき未發の力とか物とかいふものが、其力が物かの外に實在する或物の助力なくして存在し、實現し得るといふことは考へられないからである。アリストートルは此理を明知して法則を立てた、『實在は可能に先だたざるべからず』而して『完全なる者は萌芽の前に在り』と。彼は種々の點に於て後世人の師表であるが、此點に於ても我等の指導者である。

今日に至るまで凡ての唯心説は之を疑ふべからざる原則として守つてをる。故に我等は右の不當なる進化説に反して主張し得る。完く實在なる神の理性があつて進化作用を支配して、下等なるものを造り、之を漸々進めて高等なるものを造つてもよい處まで達せしめ、そこで高等なるものを造つては又之を一層高等なるものを造られ得べき處まで進めて、更に高等なるものを造るといふやうになつてをると、此くいふても決して不可はない。成程此進化作用は充分今日ではわからないが、人間の理性が日々物を造つてをる作用と同様であるから、人間に考へられないことではない。右は有神論の立場であるが、此立場から言ふと、基督教の神の啓示は道理に外れてもをらず、世界の發達の秩序を破るものでもない。何となれば造られたる者が造られた

る者として存在するといふことが抑も神の賜であつて、其存在の様が變化して行くのも造物主の所爲であるから、是れも賜である。成程此賜が授けらるゝ方法のみを見て之を進化といふて差支へはないが、之と同時に他の立場より見ると矢張り造られるのである。物體の化學力や電氣力といひ、植物の生命といひ、動物の本能、感覺、劣等の思想といひ、いかに進化の方法を用ふるにせよ、矢張り神が造つて之を賜として授け給ふたのであつて、其れが此の賜を受けた者が各其課せられたる作用を果すに適してをる。人の理性良心に至つては、よし發達はいかに遅くとも、其れが天の賜であることは既に論じたるが如くであるが、此賜を先づ授かつたが爲めに更に新なる賜を要するのである。何となれば人間以下の者の賜は、之を受ける者の性質として意味も何も解らずに盲目的に之を受けるが、人間は直ちに之を賜であると合點して受けるから、隨て賜の授け主を知りたいといふ願を生ずる。此願の種々に現はれること、又其れがいかに盛んに炎へるかを再論する要はないが、唯一言せざるべからざること、此の願を満足せんが爲め新なる賜即ち天啓の賜、神の子の賜、聖靈の賜、及聖書によれる自然以上の生命の賜を授けられたればとて、其れが世界進化の方法といさかも矛盾しないといふことである。天地創造の時もペンテコステの日に聖靈を降された時も、方法に於ては何の變化斷絶もない。「凡ての善き賜と全き恵は上より光の父より降るな

り、父は變ることなく又轉りて寫す影もなきものなり。然るに此の如くに兎角く考へがたいのは、自然と自然以上との區別の立て方が誤つて、普通の事物事件は自然であり、唯だ非常の事物事件のみが自然以上であると思ふからである。世には自然の物と自然以上の物との相異なる二種の物があるのでなく、同一物に此二方面があるまでである、即ち我等が日常知つてをる方法で發生する物を自然的の物といふのであるが、其自然的のものを詮じて見れば神が其本になつてをるから自然以上とも謂へるといふのである。而して基督教の立場から言ふと、此點に於て人間が兎角誤謬に陥るのは、罪が人の意志を害すると同じく人の智力をも鈍くして、神の天地に普く在すことを悟るのを妨げるからであると思ふのである。我等が罪にいよいよ勝つだけ、神の恩賜即ち自然以上の祐助に依つて之に勝つのであると益々認めて來る。之と同時に我等の得たる新なる生命は人間の眞正なる自然の成就せるものであつて、我等が發達の旅を終へ、神と一致して終に達すべき彼の圓滿の妙境を今より豫じめ我等に感得せしむるものである。

基督教徒の品性 終

明治四十二年八月廿七日印刷
明治四十二年八月卅一日出版

英國人

ヂエー、アール、イーリングオース

東京市京橋區明石町廿六番地

小林彦五郎

信州松本市蟻ヶ崎

イー、ライアソン

東京市神田區小川町壹番地

木村義治

東京市本八丁堀一丁目十五番地

立教社

東京市神田區小川町壹番地

發行所

普光社

新刊廣告

イーリンググオース著 立教高等女學校長小林彦五郎先生譯

基督教徒の品性

定價金 參拾錢
郵税金 八錢

著者は有名なる思想家なり譯者英文に堪能なる教育者なり本社特に先生に囑し之を公にす譯文平易にして著者の意を穿てりとは讀書界の批評なり
メーソン著 小林彦五郎先生譯

再版福音の道

定價金 七拾五錢
郵税金 八錢

本書暫らく絶版の姿なりしが今般世人の要求に迫られ小林先生の手によりて新たに改譯せられ出版することとなりたり
ミスバラード著

再版通俗舊約全書拔萃

創世 定價金 拾貳錢
紀 郵税金 貳錢

日曜學校の教科書、求道者の讀物、又一般信徒の讀物として好適著ならん
デヨルヂ、ヂー、ペリー著 細貝邦太郎先生譯

師

父

傳

(近刊)

古への師父等が如何に自己の信仰を固持するに就て苦楚を嘗めしか、野獸の爪牙あり、炎々たる火あり、壯絶又悲絶を極む、本書は之等師父の經路を示し、讀者諸士の信仰を益々修養せしめんと期す、

普光社出版書籍販賣所

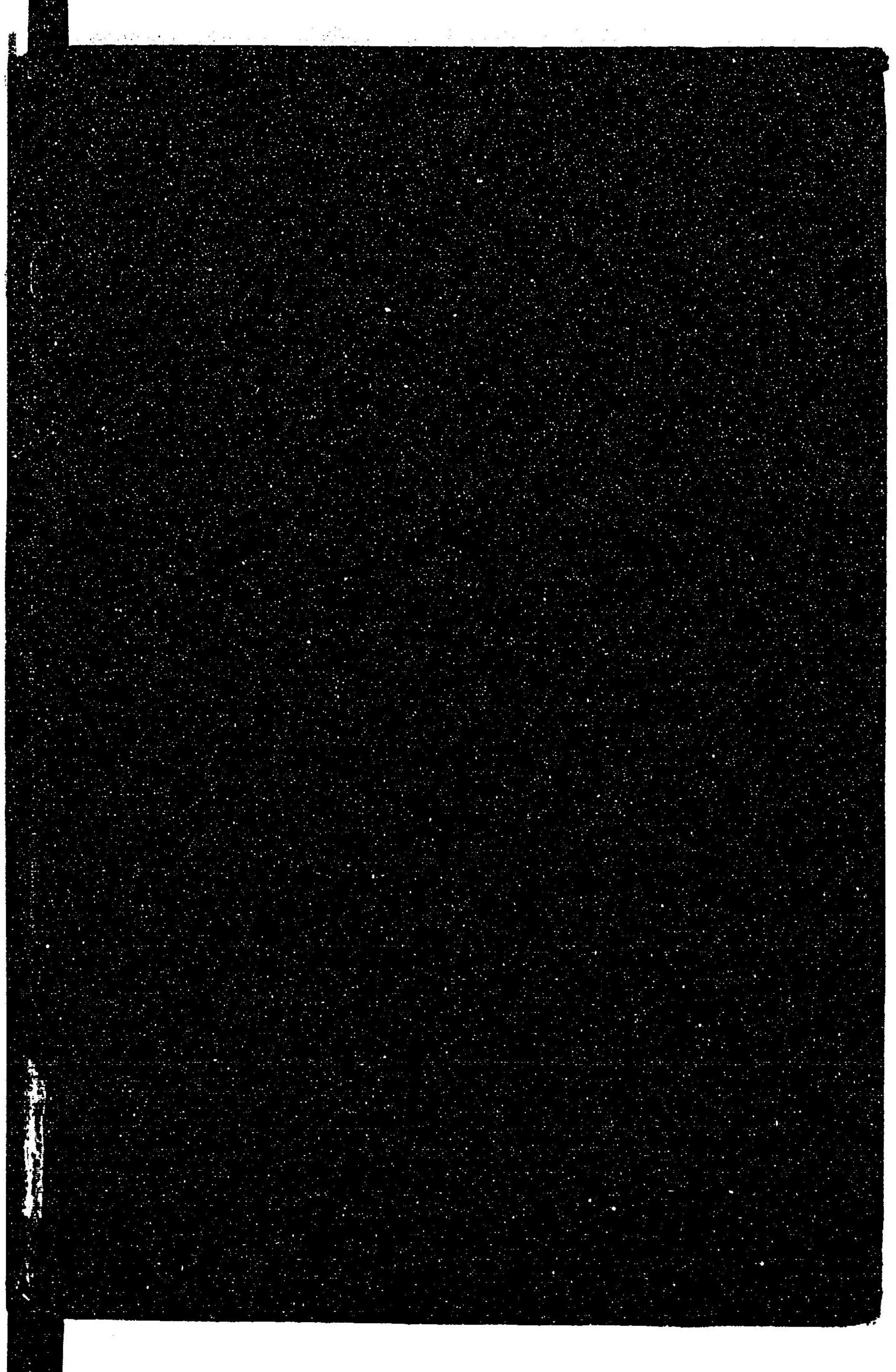
神戸市中山手通三丁目五番地

日本聖公會出版社

東京市神田區三崎町三丁目一番地

音樂社出版部

普光社代理店 有美堂



020484-000-3

330-7

基督教徒の品性

ヂェー・アール・イーリングオース/著

M42

ABI-0294



